

【国語】

1. 得点分布等に基づく分析

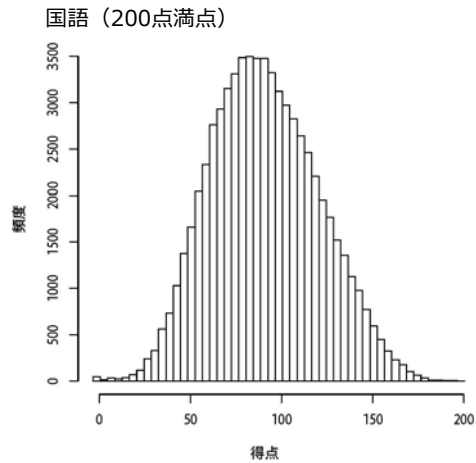
《受検者数等》

全受検者数 67,745人
 高校3年生 14,677人 (21.7%)
 高校2年生 53,068人 (78.3%)

《問題構成や設問数》

大問数 5題
 設問数 マーク式 34問

《得点の分布図等》



平均得点率 45.40% (51.37%)
 平均点 90.81点 (102.74点)
 標準偏差 29.52
 最高点 194点
 最低点 0点

※ 平均得点率及び平均点の括弧内は高校3年生のみを対象。

《設問正答率幹葉図》

平均正答率区間	設問数	設問番号	(部分正答等)
95%≧	(0)		
90%~95%	(0)		
85%~90%	(1)	2:2	
80%~85%	(1)	2:1	
75%~80%	(0)		
70%~75%	(3)	2:3, 2:4, 5:1	
65%~70%	(1)	5:2	
60%~65%	(2)	3:5, 4:2	
55%~60%	(2)	3:4, 3:7	
50%~55%	(4)	2:5, 4:1, 5:3, 5:6	
45%~50%	(1)	3:6	
40%~45%	(2)	2:6, 2:(10-12)[246]*	
35%~40%	(6)	2:7, 3:1, 3:2, 3:3, 5:7, 5:8	
30%~35%	(7)	2:8, 3:9, 4:4, 4:6, 4:(7-8)[26]*, 5:4, 5:5	
25%~30%	(2)	4:3, 4:5	4:(7-8)[2]
20%~25%	(1)	3:8	2:(10-12)[24]
15%~20%	(1)	2:9	
10%~15%	(0)		4:(7-8)[6]
5%~10%	(0)		2:(10-12)[2], 2:(10-12)[26]
<5%	(0)		2:(10-12)[4], 2:(10-12)[6], 2:(10-12)[46]

※ 設問番号の「2:1」は、大問番号「2」、解答番号「1」を示す。

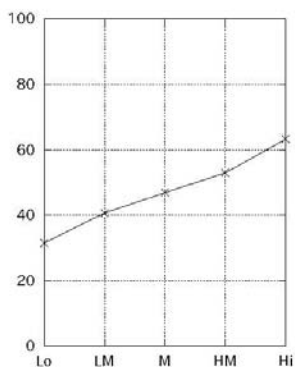
設問番号の後ろの[]内の文字列は選択肢を示す。

*は部分正答または正答の組合せが複数あるものを示す。

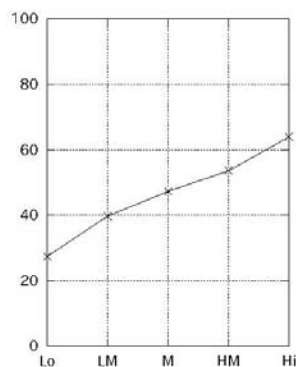
平均正答率 46.92%

《大問の五分位図》

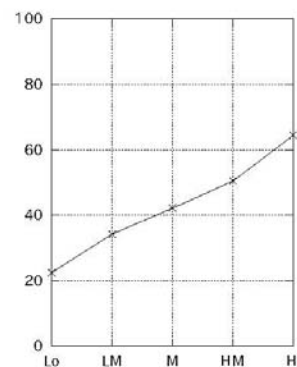
第2問
 配点 50点、平均 47.10%



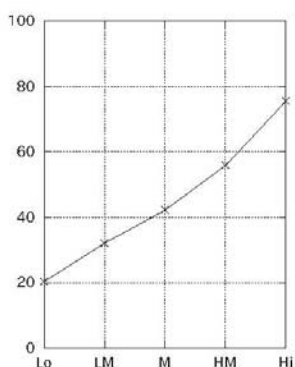
第3問
 配点 50点、平均 46.44%



第4問
 配点 50点、平均 42.80%



第5問
 配点 50点、平均 45.27%



- 第1回試行調査における各設問の正答率、アンケート調査の結果を踏まえると、試験時間と問題の量のバランスとともに難易度のバランスを更に図っていく必要があることから、第2回試行調査では複数の題材を提示する場合には特に文章量に配慮し、第1回試行調査と比較して字数を減らすなどしたところである。
- 得点の分布図は、正規分布で幅広い分布となっている。3年生の分布の方がやや広がりがあり、高い方にある。平均得点率は45.40%、目標としていた高校3年生のみの平均得点率は51.37%であり、平均得点率は5割程度に達しており、問題の難易度について概ね妥当であったと考えられる。
設問正答率幹葉図は、正答率が低い問題が若干多いが、全体的には広がりはある（HM群の正答率区分では、より広がりがあり、偏りも少ない）。標準偏差は29.52であり、センター試験の過去3年間の標準偏差34.95～36.01と比較すると、得点分布の散らばりが少し小さい。センター試験とでは目標平均得点率が異なることや、センター試験では受験する大学で求められる科目に合わせて古文・漢文を受験しない生徒がいる状況もある。また、実施時期が11月であり、受験者のうち高校2年生が約8割である。これらのことから一概にセンター試験との比較はできないものの、満点の受験者がいないことなども踏まえると、正答率が低い問題数がやや多かったと考えられる。
- 各大問の五分位図からは、多様な学力層を識別できていることが伺える。第2問は、Hi群とLo群の差が他の大問と比べて小さいが、問題全体としてはバランスがとれていると考えられる。また、全大問においてHi群の得点率が50%を超えていた。
- なお、無解答率1%以下の問題が5割以上、その他でも無解答率約5%以下となっており、無解答率は全体的に低く、第1回試行調査に比べて低くなっている。

2. 小問ごとの分析

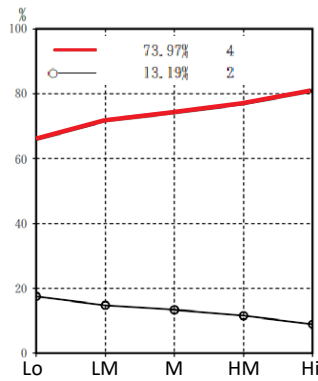
- 各小問と、当該小問を除いた全問題との間のピアソンの積率相関係数を算出し、さらに、五分位図により分析を行った。また、新たな出題形式等についても分析を行った。
 - (1) 五分位図におけるLo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の問題
4問あり、五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。
 - (2) その他
 - ① 正答率が低い問題

(1) 五分位図におけるLo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の問題

第2問問1(工)
(解答番号4)

多肢選択
選択肢数5

正答率 73.97%



参考

第2問問1(イ)(解答番号2)

多肢選択：選択肢数5 正答率87.40%

Lo群とHi群の正答率の差21.68ポイント

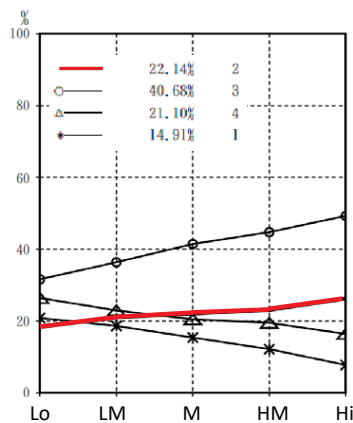
Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の理由としては、以下が考えられる。

- ・本文における「エツラン」の語句の意味を理解し、同じ「ラン」の漢字が使われている語句を選択肢の短文の中から適切に捉える設問。Lo群とHi群とともに正答率が高かった。「エツラン」は、学校生活や学習場面、実生活で触れる機会が多く、正答の「イチラン」も同様であることから、Lo群とHi群ともに正答率が高かった可能性がある(同様の傾向は、第2問問1(イ)にも見られる)。等
- ・なお、設問正答率幹葉図で第2問は小問が広範囲に分布し、Lo群とHi群ともに正答率が高い問題も多様な学力層を識別するためには必要である。

第3問問6(i)
(解答番号8)

多肢選択
選択肢数4

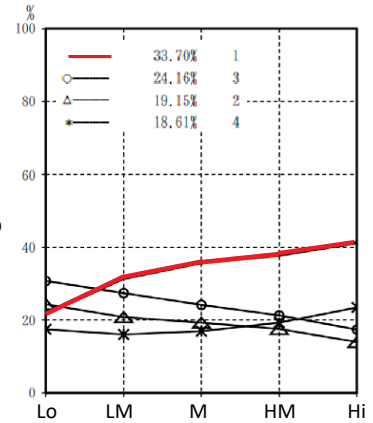
正答率 22.14%



第3問問6(ii)
(解答番号9)

多肢選択
選択肢数4

正答率 33.70%



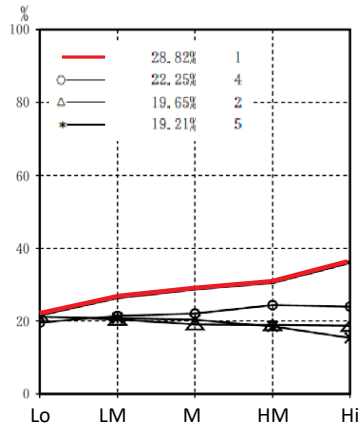
Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の理由としては、以下が考えられる。

- ・文学的な文章として、同一の作者による詩とエッセイを題材としている。第3問問6(i)は詩の表現の効果を適切に示す設問、第3問問6(ii)はエッセイの表現の効果を適切に示す設問。センター試験にこれまでなかった韻文の表現技法に関する出題であり、それらの効果が問われることから、受検者が戸惑った可能性がある。等

第4問問2(イ)
(解答番号3)

多肢選択
選択肢数5

正答率 28.82%



Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の理由としては、以下が考えられる。

- ・ 本文における「こちなし」の語句の意味を適切に捉える設問。正答率が28.82%と高くなく、三つの誤答選択肢に一定の受検者が解答している。本文における人物の心情等を考えながら、語句の意味を捉える必要があることから、受検者にとって難しかった可能性がある。
- ・ 学習する機会が比較的多い傾向にある(ア)「聞こし召す」の正答率は63.12% (Lo群とHi群の差が約50ポイント) であった。また、古文・漢文における語句の意味や文法等は、実際の大学入試に向けて定着度が上がる傾向もある。これらのことから、「こちなし」は受検者にとって難しかった可能性も考えられる。

等

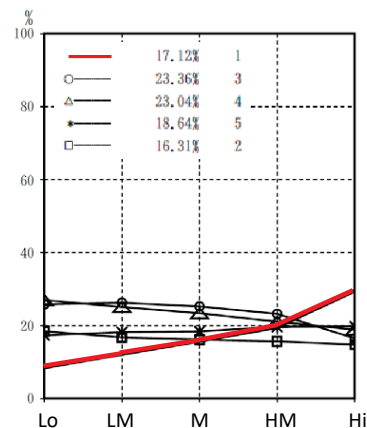
(2) その他

① 正答率が低い問題

第2問問5
(解答番号9)

多肢選択
選択肢数5

正答率 17.12%



Hi群とそれ以外の群との差異はある問題であるが、正答率が25%以下で、特定の誤答選択肢を選択した者の数が正答を選択した者の数を上回った理由として、以下が考えられる。

- ・ 表現の効果を適切に示す設問で、適当でないものを選ぶことから、受検者にとって難しかった可能性がある。
- ・ 五つの選択肢のうち四つは正しく、本文との照合や確認に時間を要する問題であったため、正答率が低かったと考えられる。
- ・ なお、同様に表現の効果を適切に示す設問である第3問問6(i)・(ii)はともに、Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下であったことから、表現の効果を適切に示すことに課題がある受検者が少なくないと考えられる。〔第1回試行調査も正答率が低い傾向にあった。〕

3. 有識者コメントの概要

大学関係者 5 名、高校関係者 3 名

○各問いの問題のねらいや、主に問いたい資質・能力が反映されていたかどうか

①評価すべき点

- ・各大問において、複数の文章（言語活動を想定した対話文も含む）を関連づけながら、テキストを的確に読み取る力や、目的等に応じて必要な情報を比較しテキストに対する考えを説明する力等、思考力・判断力・表現力を測る問題に工夫があった。
- ・各大問が前回調査と異なるジャンルの題材で問題が構成され、新たな出題形式等を示すことができた。

②改善すべき点

- ・テキストの比較・分析という点において、テキストの多様性という点で疑問が残る。

○科目の問題作成の方向性を踏まえ、題材の選定や問題の場面設定、出題形式等は適切だったかどうか

①評価すべき点

- ・第2問で、文章とを整合させる内容を問いとして立てている点は、非連続テキストと連続テキストの関係についての理解をはかる設問と言える。
- ・第2問は、出題における題材の利用の巧みさはもちろん、授業改善の視点からも効果的な題材選定である。
- ・第2問の間2から間6については、いずれも各資料の内容をしっかりと読み取らなければ答えることのできない設問であると考えられる。
- ・第3問は、同作者の詩とエッセイとを比較しながら、表現の意味を考えさせる問題文として、「問題のねらい」にも合致しており、韻文と随筆という二種類の問題文の選択が妥当である。
- ・第3問では、詩とエッセイを取り上げ、「文学的な文章における構成や表現の工夫を読み取る力」を問う問題として、工夫されている。
- ・第3問には修辞法を組み合わせる問い方の問題があり、これまでにない形式であると思われるが、表現の特色に着目して読む力を問うものとして工夫された問題となっている。
- ・第4問は、比較的オーソドックスな古典語の知識や解釈の形で入りつつ、最後の問いで読みの問題へと昇華させている。生徒に語らせることで受験生にもわかりやすくなっている。これにより、古文の本文に対する理解を個人個人が確認しつつ、全体をまとめることができ、優れた問題である。このような出題が今後も続くことを期待したい。

- ・第4問には、本文中の一文には、「何が」「どのように」「どのような意図で」書かれているのかについて多様なアプローチから検討する設問がある。多様な捉え方がそれぞれの選択肢で構成されており、古文の授業づくりにおける発問の参考とすることのできる良問である。
- ・第5問での漢文と口語訳とを合わせ読む形式は、問題化の工夫が見られる。
- ・古文と漢文で、和歌の解釈に踏み込んだ問いを設定したり、漢文を古典として学ぶ意義を伝えるような問題だったり、古典学習における資質・能力を示した設問となっており、高校へのメッセージとなった。

②改善すべき点

- ・具体的な言語活動場面を設定した設問がある点は、高く評価できる。さらに内容についても中等教育の内容としてふさわしいものが求められるだろう。
- ・かなり出題される文章も十分に吟味され、複数の文章の批判的・統合的な読み取りを求める問題作成も進んでいる中、一方の文章が短いと、十分に組み合わせられない。
- ・応用的な思考・判断を伴うものであれば比較的短い文章で問う方向性も異論はない。とは言え、各選択肢の文章の長さが140～150字程度の問いが2問程度あってもよい。その場合も、テキスト全体を捉えた上で、思考力・判断力が求められる選択肢となることが肝要である。

○各科目の問題構成、設問数、内容、難易度等のバランスは適切だったかどうか

①評価すべき点

- ・難易度については、全体として5割の得点率を目途とした設定に合致していると考えられる。設問の難易度が多様であり、大問間での難易度に大きな差が見られない点も評価できる。
- ・「言語活動の過程」を取り入れた設問が多数作成されている。

②改善すべき点

- ・受検者が読みを深めたり、考えたりする思考に沿った設問順となるような配慮が必要である。
- ・第1問、第2問ともに評論というよりも説明文、解説文に近く、抽象的で高度な論理的文章を読解する能力、及びその内容を踏まえて思考・判断・表現する能力を問うことは難しいと思われる。実用的な文章の対応能力を問うには適切であるが、今回の問題文だけでは大学入学後に必要とされる知識や技能を活かした思考力や判断力、表現力を本格的に問う問題にはなっていない。

○各問いの問題のねらいや、主に問いたい資質・能力が反映されていたかどうか

①評価すべき点

- ・全体として、問題のねらいや問いたい資質・能力が、適切に反映されていた良問と考える。
- ・今年度の第1問の文章は、いずれも平易な文章で論旨も明確であった。大学としては、このような文章がしっかり読み取れる入学者が望ましい。
- ・問3で80字～120字、2段落という条件設定、及び複数の資料の比較に基づいた理由説明は、目的に応じた表現力を問うものとして評価できる。

②改善すべき点

- ・問1から段階を踏んで考えを深め、文章内容を整理して自己の考えの形成に至る展開を捉えることができる。ただし、問3は、記述に際しての条件が4点あり、いずれも内容を吟味した上で記述を求めている。この点は、より簡略にしないでほしい。恐らく採点作業を考えての条件付けであろうが、表現等の工夫が必要となる。
- ・問3は、「書くこと」の能力の高低が、この設定で測ることができるのか疑問である。
- ・問いたい資質・能力別に計3問設定し、難易度に軽重をつけることは理解できるが、「大学入学共通テスト記述式問題」で求める「思考力・判断力・表現力」とは、本調査で言えば問3のような問題ではないのか。また、そのような観点で言うと、問3にしても、二文目の書き出しや文末を指定する必要がなく、地図を用いるような例も含めて受験生が思考し表現する力を測ることが本来の目的に近い問題と言える。

○科目の問題作成の方向性を踏まえ、題材の選定や問題の場面設定、出題形式等は適切だったかどうか

①評価すべき点

- ・共通するテーマに基づく二つの評論文が素材となっている。複数のテキストの共通性や差異について幅広く考察する設問が可能であり、目的に応じて読んだり、必要な情報を比較したりする力を評価できる題材の選定となっている。
- ・一つのテキストで解答できる問1、双方を関連付けて考える問2、さらに、具体的な場面と二つの文章を関連付けて考える問3という設問順、それぞれの文字数や条件設定による難易度、いずれも適切である。
- ・記述させる必然性が生まれるよう、解答者がレポート作成者の立場に置く設定が用いられている。

②改善すべき点

- ・正答例とされる記述内容にかなりの理解力の差が見られる問いがある。これらを同一の「読み取る能力」と判断することには、疑問が残る。書き出し指定に工夫が必要ではないか。
- ・示された「条件」が「考え」を絞り込む手がかりになるような工夫が必要となると考える。「条件」を指定した記述問題の場合には、「条件」が解答作成のきっかけになるような工夫があること。

○各科目の問題構成、設問数、内容、難易度等のバランスは適切だったかどうか

①評価すべき点

- ・全体的に難易度が適切になってきた。
- ・文字数が設問ごとに増加していく形態の方が、受験生にとっては取り組みやすいと考える。平成29年度の試行調査の記述式問題の無答率が低いことから、記述式全体として取り組みやすい良問だと考える。
- ・文章の展開や論理構成を視覚化して整理する問いがあり、従来も選択肢で作成されてきた内容を記述して解答を求めている。設問の工夫が見られる。
- ・80～120字というやや字数の多い記述問題を導入しており、表現する力を本格的に問うことのできる設問が置かれている点で、今後も継承することが望まれる。
- ・問3は、【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】、そして【資料】を関連付け、そこから推論による情報の補足や整理を行い、条件として示された書き方の目的等に応じて、説明する内容を問う設問である。条件の項目が多いこと、複数の文章を関連付けていくことへの対応が求められる。ある程度のまとまった時間を要する設問と考える。

②改善すべき点

- ・テキスト全体の要旨を把握できなくても、「語句」に着目するだけで解答できる可能性を生じさせることとなるような問いがある。
- ・2回の試行調査における問3については、いずれも複数の文章から情報を集めて関連させ、かつ設問の条件に合わせて整えていくという論理過程が何層もあることから難易度が高いと考える。
- ・ある程度時間をかけて思考する問題を出題するためにも（解答時間の確保のためにも）、少なくとも小問の数を減らすことを検討してほしい。
- ・記述式問題を設定すること自体、基本的に賛成であるが、採点のしやすさを考慮する等、諸々の事情によって本来の目的から離れてしまうのであれば、記述式問題の問題数や各問の難易度の設定はもちろん、記述式問題の導入そのものについても再考する必要がある。

4. 共通テストの実施に向けた方向性

高校3年生の受検者を念頭に、平均得点率（平均正答率）が5割程度となるよう作問したところ、全体の得点率は45.40%で、目標としていた高校3年生のみの平均得点率は51.37%となった。

第1回試行調査の結果を踏まえて作問し、得点の分布図と設問正答率幹葉図、大問の五分位図から、難易度、試験時間と問題量のバランスが一定程度図られた結果となった。

こうした結果を踏まえ、今後も、特に複数の題材を提示する場合には文章量に配慮し、全体としての問題の分量や難易度と試験時間のバランスが適切なものとなるよう検討を行っていく。

記述式問題の分析については、別途記載。

【数学Ⅰ・数学Ⅱ】

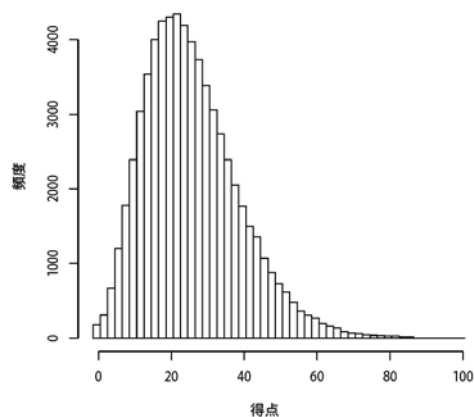
1. 得点分布等に基づく分析

《受検者数等》

全受検者数 65,764人
 高校3年生 13,407人 (20.4%)
 高校2年生 52,357人 (79.6%)

《得点の分布図等》

数学Ⅰ・数学Ⅱ (85点満点)



平均得点率	30.13% (36.16%)
平均点	25.61点 (30.74点)
標準偏差	15.22
最高点	85点
最低点	0点

※ 得点及び五分位図等については、記述式問題を除く。
 平均得点率及び平均点の括弧内は高校3年生のみを対象。

《問題構成や設問数》

大問数 5題 (数学Ⅰ：2題 (必答)、
 数学Ⅱ：3題から2題選択)
 設問数 記述式 3問、マーク式 44問

《設問正答率幹葉図》

平均正答率区間	(設問数)	設問番号
95%～	(0)	
90%～95%	(0)	
85%～90%	(0)	
80%～85%	(0)	
75%～80%	(3)	4:(ア-イ), 4:ウ, 4:エ
70%～75%	(2)	1:ウ, 2:セ
65%～70%	(1)	1:ク
60%～65%	(1)	1:カ
55%～60%	(1)	1:キ
50%～55%	(2)	2:チ, 3:(ア-ウ)
45%～50%	(3)	1:エ, 3:ク, 4:(オ-カ)
40%～45%	(2)	2:(エ-オ), 5:ウ
35%～40%	(3)	1:(ア-イ), 4:(キ-ク), 5:カ
30%～35%	(5)	1:オ, 2:テ, 3:(エ-カ), 3:(キ-ク), 5:(ア-イ)
25%～30%	(5)	2:(ア-ウ), 2:ソ, 2:ツ, 2:ト, 5:(エ-オ)
20%～25%	(2)	2:タ, 4:シ
15%～20%	(2)	3:テ, 5:キ
10%～15%	(4)	3:(コ-シ), 4:ス, 5:ク, 5:ケ
5%～10%	(5)	3:(ス-ソ), 3:(タ-ツ), 4:(ケ-サ), 4:セ, 4:(ゾ-タ)
<5%	(3)	2:(カ-ク), 2:(ケ-ス), 4:(チ-ト)

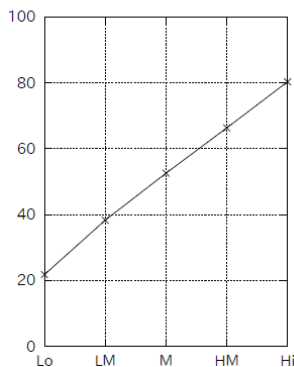
※ 設問番号の「1:ウ」は、大問番号「1」、解答記号「ウ」を示す。

平均正答率 34.54%

《大問の五分位図》 ※記述式を除くマーク式のみのデータ。

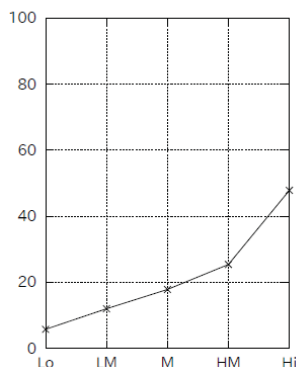
第1問

配点 15点、平均 51.99%



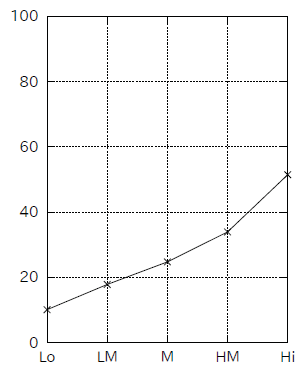
第3問 選択率75.96%

配点 20点、平均 21.43%



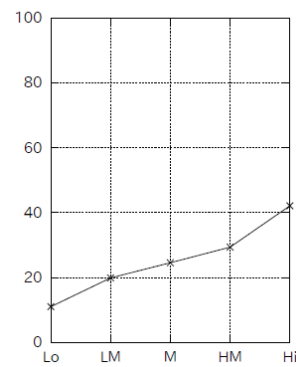
第2問

配点 30点、平均 27.72%



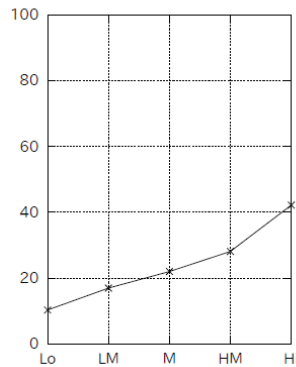
第4問 選択率75.28%

配点 20点、平均 25.98%



第5問 選択率48.77%

配点 20点、平均 23.83%



- 平均得点率と平均正答率はともに5割程度に達しなかった。設問毎の正答率では、8割を超えている問題がないこと、5割を超える問題が44問中10問となっていることから、正答率が中～高程度の問題数が少なかったと考えられる。得点の分布においても、満点の者はいるものの得点率が5割を超えている受検者は1割に満たず、低い方に偏っている。目標平均得点率が異なるため一概に比較はできないものの、標準偏差15.22を、センター試験の過去3年間の標準偏差18.69～21.35と比較すると、得点分布の散らばりが少し小さい。
- 各大問の五分位図からは、目標とする平均得点率（平均正答率）に影響を与えた大問が見受けられた。具体的には、第3問～第5問はHi群でも得点率が5割未満、第2問のHi群でもほぼ5割となっている。さらに、第2問～第5問の各群での得点率の差を見ると、HM群とHi群が最も大きくなっている。このことから、第2問～第5問については、高学力層の識別により寄与しているが、受検者層全体に対しては難易度が高かったと考えられる。また、無解答率が5割を超える設問は4問であり、それらはいずれも大問の後半の問題である。
- 平均得点率（平均正答率）、得点分布等を踏まえると、試行調査の受検者に相当する学力層を識別するためには、正答率が中～高程度の問題を一定数含む様々な難易度の問題からなる試験問題とする必要がある。

2. 小問ごとの分析

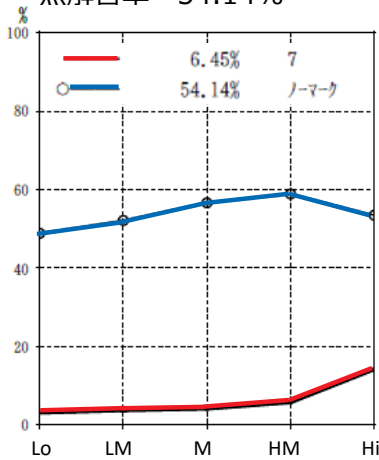
- 各小問と、当該小問を除いた全問題との間のピアソンの積率相関係数を算出し、さらに、五分位図により分析を行った。
 - (1) Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の問題
 このような問題は7問あり、その全ての問題について、五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った（その他の①はその項目に記載）。
 - (2) その他
 - ① 当てはまる選択肢を全て選択する問題＜新しい出題形式＞
 2問出題。五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。
 - ② グラフの動的変化に基づく方程式・不等式の解を定性的に捉える問題
 3問出題。五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。

(1) Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の問題

第4問(5)(解答記号セ)

数値解答問題

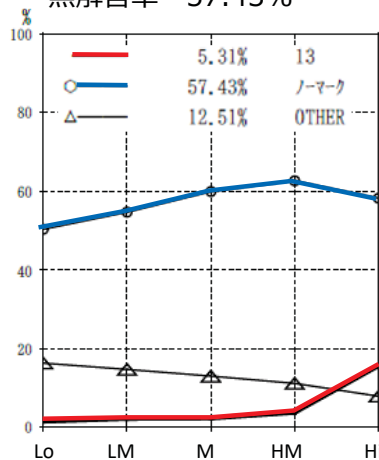
正答率 6.45%
無解答率 54.14%



第4問(5)(解答記号ソタ)

数値解答問題

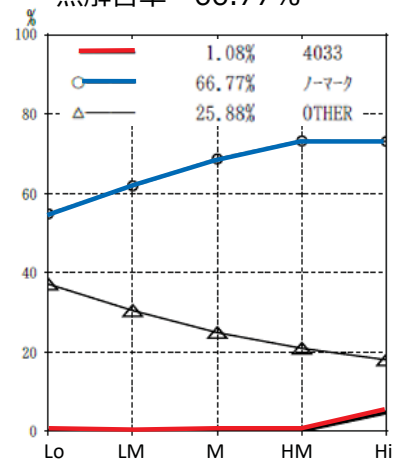
正答率 5.31%
無解答率 57.43%



第4問(5)(解答記号チツテト)

数値解答問題

正答率 1.08%
無解答率 66.77%



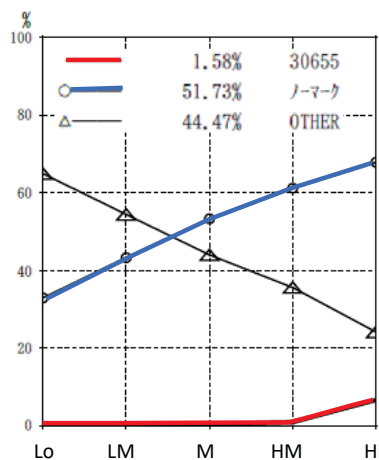
Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の理由として、例えば以下が考えられる。

- ・二つの自然数を変数とする二元一次式が表現し得る自然数について考察する問題である。解答番号セ、ソタについては、比較的簡単な係数による一次式であったにもかかわらず、いずれも無解答率が50%を超えていることから、他の問題で解答時間の多くを費やし、本問を思考する時間が足りなかった可能性がある。
- ・解答番号チツテトについては、前問の考察を拡張して、より一般的に考察することを求めた。直前に考察のための道筋を提示したものの、受検者にとっては難易度が高かった可能性がある。

第2問[1](2)
(解答記号ケコサシス)

数値解答問題

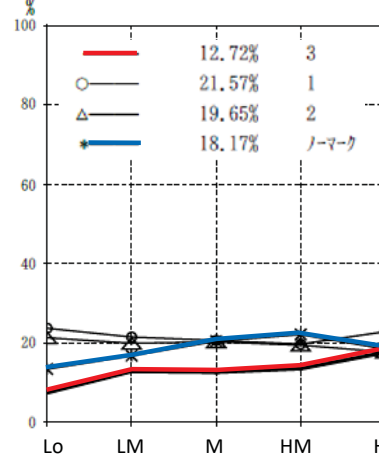
正答率 1.58%
無解答率 51.73%



第5問(2)(v)(解答記号ク)

多肢選択
選択肢数 7

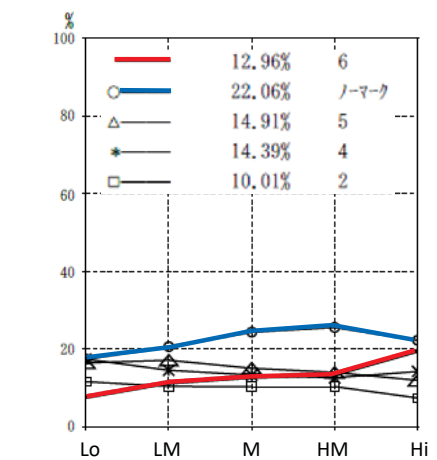
正答率 12.72%
無解答率 18.17%



第5問(2)(v)(解答記号ケ)

多肢選択
選択肢数 7

正答率 12.96%
無解答率 22.06%



Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の理由として、例えば以下が考えられる。

- ・前問での思考過程を振り返り、適切に解決の構想を立てられなかった受検者にとっては難易度が高かった可能性がある。

Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の理由として例えば以下が考えられる。

- ・三角形の各頂点からの距離の和が最小となるような点の位置(特徴)について、三角形の形状に応じて考察する問題である。前問までの考察を前提としているが、直前の(iv)の正答率が15.70%であるなど、受検者にとっては難易度が高かった。

(2) その他

①当てはまる選択肢を全て選択する問題<新しい出題形式>

第2問1(ii)(解答記号カキク)

多肢選択

選択肢数 5

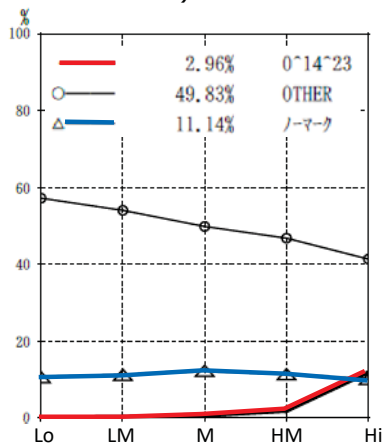
全て選ぶ

完答

(全ての選択肢が
いずれかにあて
はまる)

正答率 2.96%

無解答率 11.14%



Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の理由として、例えば以下のことが考えられる。

- ・線分の長さを自ら変数を設定して関数の式として表し、そのグラフを用いて与えられた値を、とり得ないもの、一回だけとり得るもの、二回だけとり得るものの3タイプに分類する問題である。新しい出題形式であり、受検者は戸惑った可能性がある。
- ・グラフを用いれば包括的に処理できる問いであったが、各値を個別に処理しようとして計算ミスをした受検者が多かった可能性がある。

第4問(4)(解答記号ス)

多肢選択

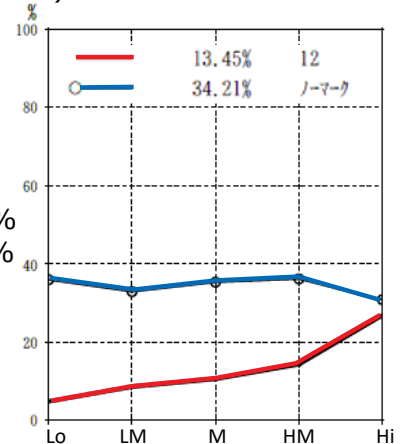
選択肢数 4

全て選ぶ

完答(正答二つ)

正答率 13.45%

無解答率 34.21%



Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント程度の理由として、例えば以下のことが考えられる。

- ・二元一次方程式が自然数の解をもたないときの係数の特徴を考察する問題であり、教科書にある基本的な概念を用いて包括的に判断する問題であったが、文脈に応じて立式できなかったり、式を解釈することができなかったりした受検者がいた可能性がある。
- ・無解答率が34.21%であることから、他の問題に解答時間を費やし、本問に辿り着けなかった可能性もある。

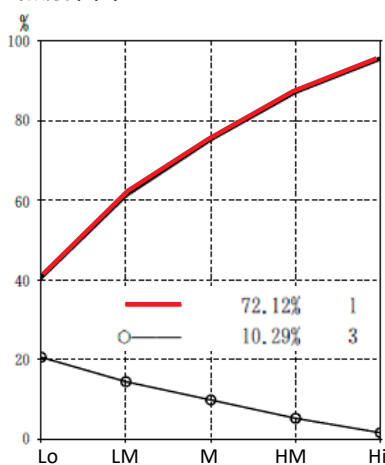
②グラフの動的変化に基づく方程式・不等式の解を定性的に捉える問題

第1問[2](1)(解答記号ウ)

多肢選択 選択肢数 5

正答率 72.12%

無解答率 0.49%

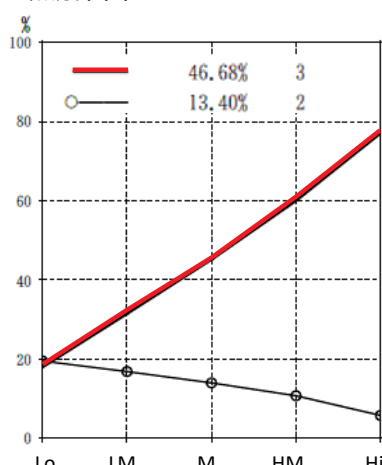


第1問2(解答記号工)

多肢選択 選択肢数 8

正答率 46.68%

無解答率 1.38%

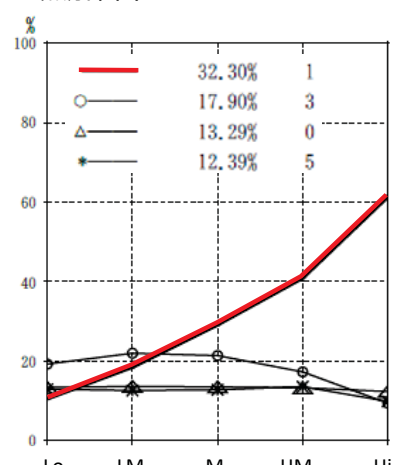


第1問2(解答記号オ)

多肢選択 選択肢数 8

正答率 32.30%

無解答率 1.65%



- ・二次関数について、係数の変化に伴うグラフの動的変化を基に方程式や不等式の解を定性的に考察する問題である。現行のセンター試験では出題されていないタイプの問題であったが、設問順の正答率の推移や設問ごとの五分位図の傾向から考えると、受検者の学力の識別に寄与しているものと考えられる。なお、本問はコンピュータのグラフ表示ソフトを題材として用いたが、より妥当な題材選定については引き続き検討する必要がある。

3. 有識者コメントの概要

大学関係者 5 名、高校関係者 3 名

○各問いの問題のねらいや、主に問いたい資質・能力が反映されていたかどうか

①評価すべき点

- ・問題のねらいや問いたい資質・能力を具体的に分析され、的確に反映された力作揃いである。
- ・一つの課題について、複数の方向から考えさせたり、分かっていることをもとに発展させていくよう巧みに練られた構成となっている。
- ・数学における原理・原則の体系的理解や構想力を問う問題もあり、問題のねらいに合致した良問も多い。こうした問題が出題されることを望む。
- ・多くの高等学校の授業で、結果が求められたら終わりとする傾向がある中で、条件を新たに設定するなど、問題を別の視点から考え直すという提案にもなっており、授業改善にも繋がる示唆に富んでいる。

②改善すべき点

- ・問おうとしている内容はよいが、問題は簡潔にするのがよい。
- ・受験生は、慎重に問題文を読んで題意を正確にくみ取る必要があり、想定以上に時間も労力もかかる。

○科目の問題作成の方向性を踏まえ、題材の選定や問題の場面設定、出題形式等は適切だったかどうか

①評価すべき点

- ・全体的に、授業において生徒が学習する場面や、社会生活や日常生活の課題を題材にした問題で、非常によく考えられている良問である。
- ・ICTを活用した授業は年々増加傾向にあるが、こうした問題が新テストで扱われることで高等学校における授業改善にも繋がる。

②改善すべき点

- ・日常生活や社会の問題を数学的に捉えることをねらいの一つとしているが、具体的な場面設定は、それを身近に感じている受験生とそうでない受験生との間に心理的な不公平感を与えられられるので、極めて慎重に扱うべきである。
- ・出題形式として、解答と関係しない記述がかなり多い印象を受けている。関係ないものを考慮の外に置く訓練も必要であるが、実際の解答の作成には現れない余分な時間を必要としていることを考慮すべきである。
- ・会話文を読んで解答する問題について、会話中の発言はすべて正しいことが前提なのか。いつも正しいという注意事項を設けるなら「批判的思考」を促すことに反しないか。

○各科目の問題構成、設問数、内容、難易度等のバランスは適切だったかどうか

①評価すべき点

- ・各問いの重さ・解答に必要な時間は様々であるが、許容範囲であり、同時に全体としてはバランスもとれていると思う。
- ・数学における基本的な概念や原理・法則の体系的理解から、解決過程を振り返るなどして統合的・発展的に考える問題まで幅広く網羅しており、現在のセンター試験から大きく舵を切っていることがうかがえる。是非、この方向性で進めて頂きたい。
- ・前回の試行調査に比べて文章が短くなった点は大きく評価する。問題も工夫されていた。

②改善すべき点

- ・数学という科目は問題が与えられたとき、推論により結論を得る科目なので、多肢選択式の問題が多すぎると考える。
- ・問題文中の設問の前提となる説明部分が多いように感じた。説明部分が必要なことはわかるが、受験生には説明を読むのに時間がかかり、負担に感じたように思う。説明部分と設問部分を分けて示すような工夫をしてみてもどうか。
- ・設問数が多すぎて時間が足りない。
- ・問いごとに力作がそろっているのに、全体として読む量が多すぎる。

4. 共通テストの実施に向けた方向性

- 試行調査においては、高校2年生が約8割、3年生が約2割であること、11月に実施しており、受験本番に向けて学力がこれから伸びる時期であることを踏まえる必要があるものの、全体的に得点率が低く、平均正答率が5割を超える設問の数が44問中10問であった。また、無解答率が5割を超える設問は4問であり、それらはいずれも大問の後半の問題である。
- 得点の分布図、設問正答率幹葉図、大問の五分位図、無解答率等を踏まえると、思考する時間が足りなかった可能性がある。この要因として、例えば、以下が考えられる。
 - ・ 問題文を読み解く量が多かった。特に、会話文や日常の事象を用いた問題では、読む分量が多くなる傾向にある。
 - ・ 数学的な問題発見・解決の過程（作問のねらいとする主な「思考力・判断力・表現力」、及びそれらと出題形式との関係についてイメージ（素案）参照）の全過程を重視した問題などの工夫を第2問～第5問で行った。また、特定の資質・能力を問うために、あえて問題を段階的に問わない設問も設定し、思考の過程を明示しなかったため、受験生によっては考察に多くの時間を要した可能性がある。
 - ・ 解決過程を振り返って考察させる問題については、問題を数理的・数学的にとらえたり、構想・見通しを立てたり、焦点化した問題を解決したりする問題より正答率が低い傾向にあった。前問までの解決の過程を振り返って考察するという大問（もしくは中間）全体の出題意図が捉えられなかったことも要因のひとつと考えられる。
- 問題を段階的に問うのではなく、問いたい資質・能力を直接問う問題については、受験者層を踏まえると、やや難易度が高い傾向にあった。日常事象を扱った問題の問題設定を理解することや読む量と相まって、思考する時間が足りなかったのではないかと考えられる。
- 受験者自らが、問題発見・解決していくためには、日常事象を数学的にとらえたり、会話や問題文を単に読解するのではなく数学的にとらえた上で問題・課題に照らして必要な情報を整理し、その情報を活用することは重要である。「作問のねらいとする主な『思考力・判断力・表現力』、及びそれらと出題形式との関係についてのイメージ（素案）」のCに該当する資質・能力だけでなく、A、B、D、Eなどに該当する資質・能力を評価する観点から、試行調査のように、問いたい資質・能力を直接問う問題や数学的な問題発見・解決の全過程を重視した問題については、問題の難易度とのバランスにも十分配慮したうえで、引き続き出題し続けることが重要である。

- 以上の分析を踏まえ、共通テストに向けては、以下の基本方針に基づき問題作成を検討する。
 - ・ 大問構成については、試行調査および現行センター試験を踏襲し、共通問題を2題、選択問題3題とする。共通問題においては、現行学習指導要領における「数学Ⅰ」の大項目はすべて網羅するようにする。また、選択問題については、現行学習指導要領における「数学A」の大項目である、場合の数と確率、整数の性質、図形の性質の三つをそれぞれ独立した大問として設定し、このうち2題を選択解答させる。
 - ・ 共通問題において、数学的な問題発見・解決の過程の全過程を問う問題は、大問もしくは中間1題程度とし、他の問題は、過程の一部を問うものにする。選択問題において、数学的な問題発見・解決の過程の全過程を問う問題は、解答に要する時間を十分検討した上で出題可能かどうかを全体構成の中で判断する。

過程の一部を問う問題については、これまでの大学入試においては、焦点化された問題を、一定の手順に従って処理したり論理的に考察したりして結論を得る資質・能力が問われることが多かったが、共通テストにおいては、共通問題、選択問題いずれにおいても、それらの資質・能力だけに限らず、事象を数学化し、問題解決のための構想を立てたり、思考の過程を振り返って考察したりする資質・能力なども試行調査と同様に問うように努め、問題全体の中で、それぞれの資質・能力をバランスよく問うようにする。
 - ・ 文章を読解するために要する時間を試行調査よりも軽減し、思考する時間の確保に努める。そのため、用いる題材は主として数学の事象とするが、日常生活や社会の事象などを題材とする問題を共通問題において最低1題は出題することとする。
 - ・ 幅広い学力層を識別するために、現行センター試験と同様に、結論に至る過程を設問や文章で段階的に示す問いを設定する場合もある。ただし、そのような場合においても、事象を数学化できるかどうかを問うために、問題文中で変数などをあえて設定しないなど、結論に至る過程の示し方を工夫して出題することがあり得る。

【数学Ⅱ・数学B】

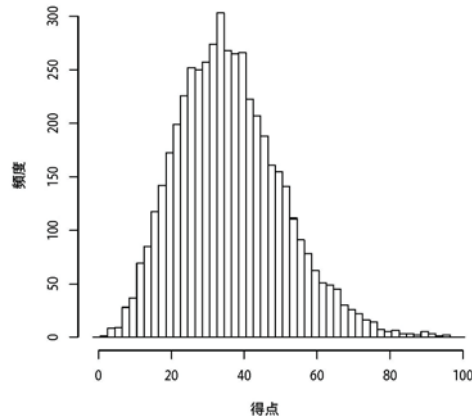
1. 得点分布等に基づく分析

《受検者数等》

全受検者数 4,935人
 高校3年生 4,110人 (83.3%)
 高校2年生 825人 (16.7%)

《得点の分布図等》

数学Ⅱ・数学B (100点満点)



平均得点率	36.06% (35.49%)
平均点	36.06点 (35.49点)
標準偏差	14.42
最高点	95点
最低点	2点

※ 平均得点率及び平均点の括弧内は高校3年生のみを対象。

《問題構成や設問数》

大問数 5題 (数学Ⅱ：2題 (必答)、
 数学B：3題から2題選択)
 設問数 マーク式 54問

《設問正答率幹葉図》

平均正答率区間	(設問数)	設問番号
95%～	(1)	5:(ア-イ)
90%～95%	(3)	1:カ, 2:ア, 2:イ
85%～90%	(5)	1:(キ-ク), 1:チ, 2:(ク-エ), 4:ア, 5:(ウ-エ)
80%～85%	(2)	1:(ア-イ), 4:オ
75%～80%	(0)	
70%～75%	(1)	1:ツ
65%～70%	(1)	4:(イ-エ)
60%～65%	(0)	
55%～60%	(2)	1:ソ, 1:テ
50%～55%	(1)	1:ナ
45%～50%	(3)	2:(ク-サ), 2:(シ-セ), 4:(カ-キ)
40%～45%	(5)	1:(ウ-エ), 1:オ, 1:(ク-セ), 2:(オ-キ), 2:ト
35%～40%	(4)	1:タ, 2:(タ-チ), 3:(ア-ウ), 4:(ク-コ)
30%～35%	(2)	1:ト, 2:(ツ-テ)
25%～30%	(5)	2:ナ, 2:ヌ, 3:エ, 4:(サ-シ), 5:(オ-カ)
20%～25%	(0)	
15%～20%	(4)	2:ソ, 4:(タ-ツ), 5:(サ-シ), 5:テ
10%～15%	(3)	3:(ク-ケ), 3:チ, 4:(ス-ソ)
5%～10%	(5)	3:タ, 3:ツ, 5:(キ-コ), 5:タ, 5:(チ-ツ)
<5%	(7)	1:ニ, 2:ニ, 3:(オ-キ), 3:(コ-サ), 3:(シ-ツ), 4:(テ-ヌ), 5:(ス-ソ)

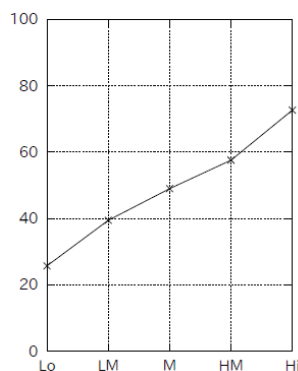
※ 設問番号の「1:オ」は、大問番号「1」、解答記号「オ」を示す。

平均正答率 44.89%

《大問の五分位図》

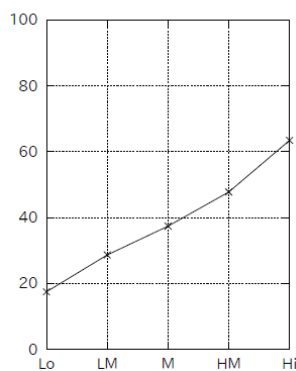
第1問

配点 30点、平均 48.98%



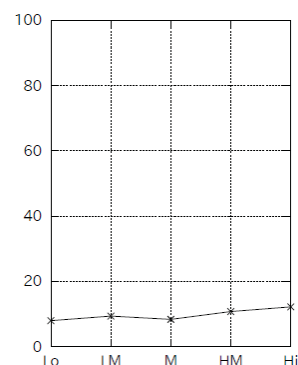
第2問

配点 30点、平均 39.06%



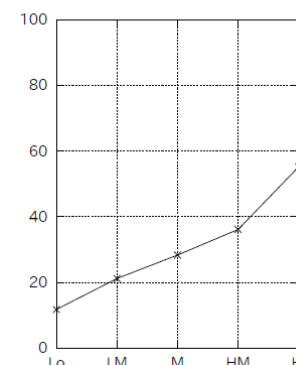
第3問 選択率19.39%

配点 20点、平均 9.13%



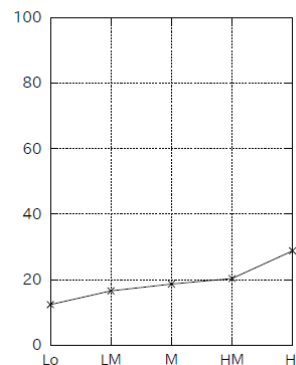
第4問 選択率94.43%

配点 20点、平均 31.21%



第5問 選択率86.18%

配点 20点、平均 19.75%



- 平均得点率と平均正答率はともに5割程度に達しなかった。設問毎の正答率では、5割を超えている問題が全体の約3割となっていることから、正答率が中～高程度の問題数がやや少なかったと考えられる。得点の分布においても、50点を超えている受検者は約1.5割で、低い方に偏っている。受検者数や目標平均得点率が異なるため一概に比較はできないものの、標準偏差14.42を、センター試験の過去3年間の標準偏差22.25～24.29と比較すると、得点分布の散らばりが小さい。従って、現状における学力層を識別するためには、正答率が中～高程度の問題を一定数含む様々な難易度の問題からなる試験問題とする必要がある。
- 各大問の五分位図からは、目標とする平均得点率（平均正答率）に影響を与えた大問が見受けられた。具体的には、第3問で、Lo群とHi群の得点率の差が10ポイント以内となっている。ただし、第3問～第5問は3問から2問を選択する問題であり、第3問は、選択した受検者層が結果に影響を与えている可能性がある。第5問は無解答率も高く思考に必要な時間が足りなくなったと考えられる。また、無解答率が5割を超える設問は54問中15問であり、それらはいずれも選択問題の後半の問題である。
- 平均得点率（平均正答率）、得点分布等を踏まえると、試行調査の受検者に相当する学力層を識別するためには、正答率が中～高程度の問題を一定数含む様々な難易度の問題からなる試験問題とする必要がある。
- 2年生の平均点が3年生を3.40点上回る結果となったが、今回、学校規模別の受検者数の調整を学年別には行わなかったことの影響があったものと考えられる。

2. 小問ごとの分析

- 各小問と、当該小問を除いた全問題との間のピアソンの積率相関係数を算出し、さらに、五分位図により分析を行った。
 - (1) Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の問題

このような問題は20問あり、第3問以外の全ての問題について、五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った（その他の①はその項目に記載）。なお、第3問（「確率分布と統計的推測」）については、次の(a)(b)のことから分析は記載していない。

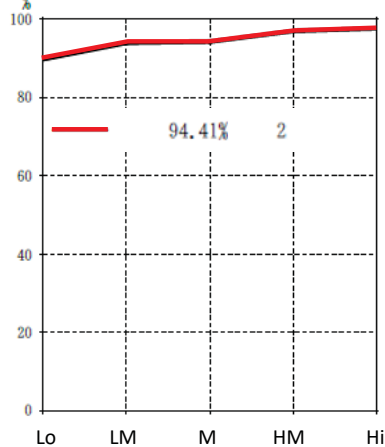
 - (a) 第3問～第5問は、3問から2問を選択する問題であるが、第3問の選択率は19.39%（昨年の「確率分布と統計的推測」の選択率は9.13%）である。第4問もしくは第5問のみを解答した受検者は第3問も選択したとみなされ、そのような受検者が19.39%の中に含まれている。
 - (b) 今回の試行調査で選択問題の分野の順序を学習指導要領の記載順に変更したため、第3問以外の解答が第3問の解答用紙に記入されている可能性が考えられること。
 - (2) その他
 - ① 当てはまる選択肢を全て選択する問題＜新しい出題形式＞
2問出題。五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。
 - ② グラフの概形から面積と定積分の関係を定性的に考察する問題
1問出題。五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。
 - ③ 具体的な事象を基に一般的に成り立つ性質を考察する問題
3問出題（その他の①はその項目に記載）。五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。

(1) Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の問題

第1問[2](1)(解答記号カ)

数値解答問題

正答率 94.41%
無解答率 1.56%

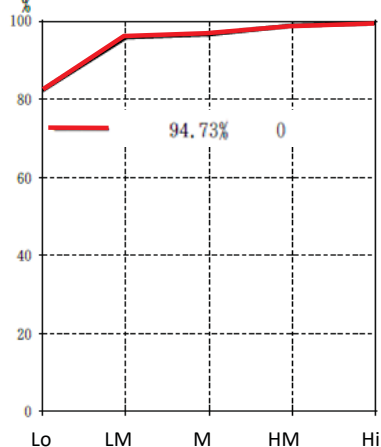


Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の理由として、例えば以下が考えられる。
・三次関数の導関数の次数を問う問題であり、正答率が94.41%、無解答率が1.56%であるなど、受検者にとっては難易度が低かった。

第2問1(i)(解答記号ア)

多肢選択 選択肢数4

正答率 94.73%
無解答率 0.93%

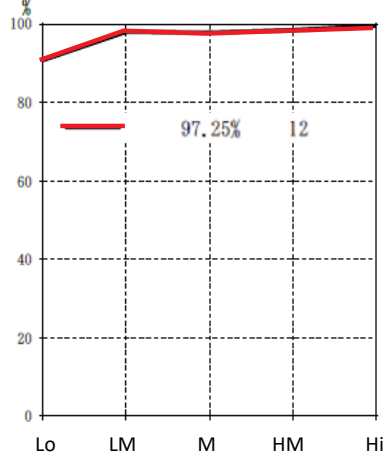


Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の理由として、例えば以下が考えられる。
・問題文に示された条件を不等式で表す問題であり、正答率が94.73%、無解答率が0.93%であるなど、受検者にとっては難易度が低かった。

第5問(1)(i)(解答記号アイ)

数値解答問題

正答率 97.25%
無解答率 0.24%

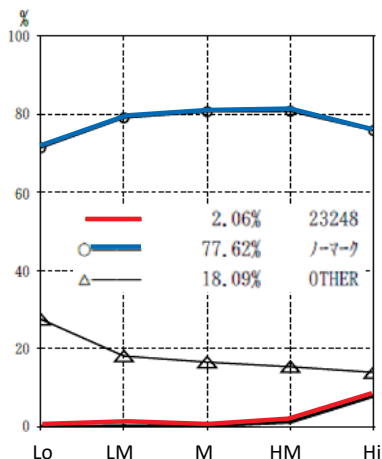


Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の理由として、例えば以下が考えられる。
・ベクトルの基本的知識を問う問題であり、正答率が97.25%、無解答率が0.24%であるなど、受検者にとっては難易度が低かった。

第4問(5)(解答記号テトナニヌ)

数値解答問題

正答率 2.06%
無解答率 77.62%

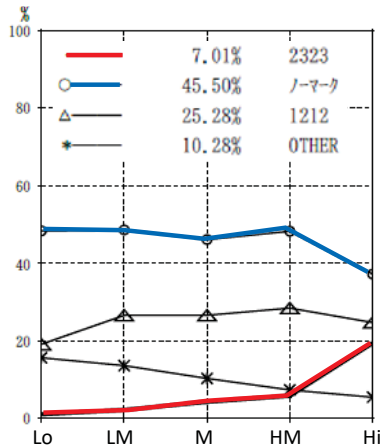


Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の理由として、例えば以下が考えられる。
・前問までの考察から二通りの方法のどちらかを用いて、より発展的な問題を考察する問題であるが、受検者にとって難易度が高かったり、取り組む時間が十分に取れなかったりした可能性がある。

第5問(1)(iii)
(解答記号キクケコ)

数値解答問題

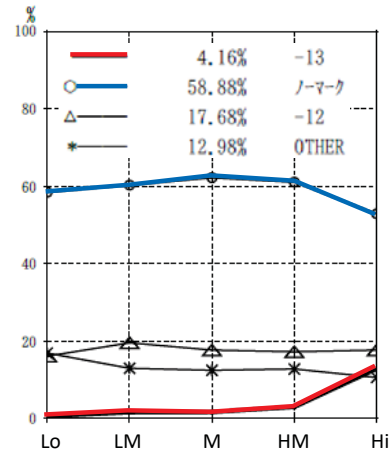
正答率 7.01%
無解答率 45.50%



第5問(1)(iv)
(解答記号スセソ)

数値解答問題

正答率 4.16%
無解答率 58.88%

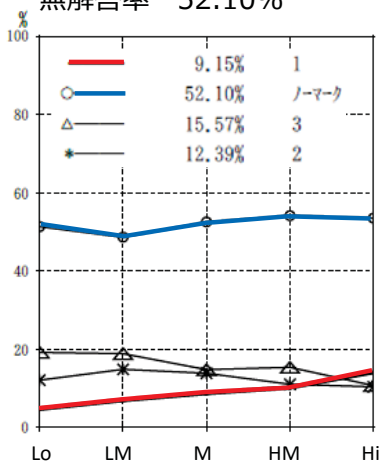


Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の理由として、例えば以下が考えられる。
・見慣れない形状の空間図形を題材としたため、空間における位置関係の把握ができるように図を提示するなど問題に工夫をしたが、問題を段階的に問う形式になっていなかったため、受検者にとっては難易度が高かった可能性がある。また、受検者にとって取り組む時間が十分に取れなかった可能性もある。

第5問(2)(i)
(解答記号タ)

多肢選択 選択肢数 5

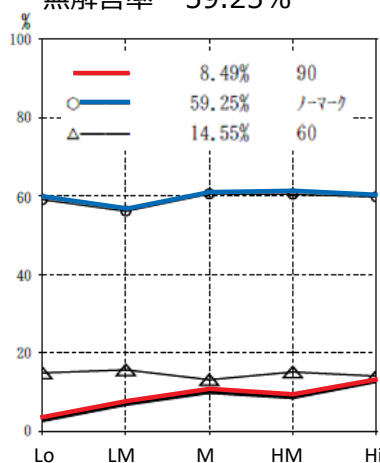
正答率 9.15%
無解答率 52.10%



第5問(2)(ii)
(解答記号チツ)

数値解答問題

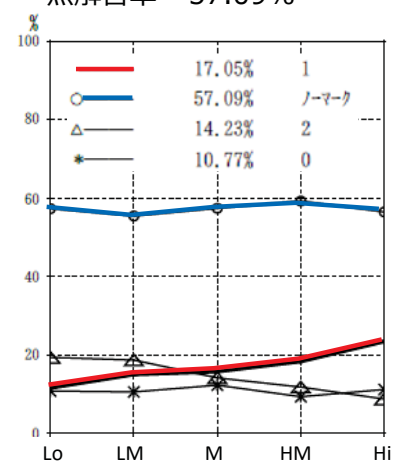
正答率 8.49%
無解答率 59.25%



第5問(2)(ii)
(解答記号テ)

多肢選択 選択肢数 3

正答率 17.05%
無解答率 57.09%



Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の理由として、例えば以下が考えられる。
・前問の図形を基に、形状が変化する空間図形を題材としている。図及び写真を提示するなど問題に工夫をしたが、形状が変化する空間図形における位置関係の把握が、受検者にとっては困難であったと考えられる。また、受検者にとって取り組む時間が十分に取れなかった可能性もある。

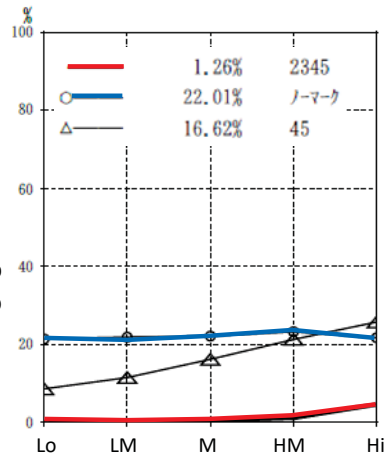
(2) その他

①当てはまる選択肢を全て選択する問題<新しい出題形式>

第1問[3](2)(iv) (解答記号二)

多肢選択
選択肢数 6
全て選ぶ
完答(正答四つ)

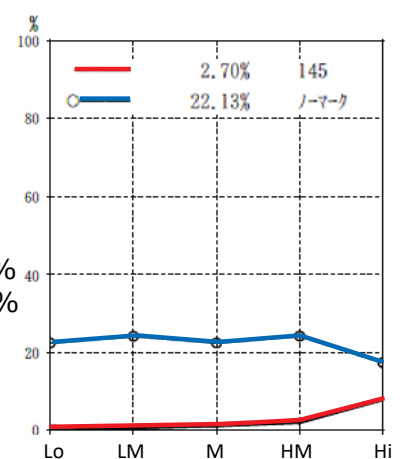
正答率 1.26%
無解答率 22.01%



第2問[2](1)(iii) (解答記号二)

多肢選択
選択肢数 6
全て選ぶ
完答(正答三つ)

正答率 2.70%
無解答率 22.13%



Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の理由として、例えば以下が考えられる。

- ・前問までの考察を振り返って、与えられたものさしで可能な計算について考察する問題である。対数の性質を理解していれば包括的に判断できる問題であるが、正答四つを過不足なく選ぶことは受検者にとって困難であった可能性がある。

Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の理由として、以下が考えられる。

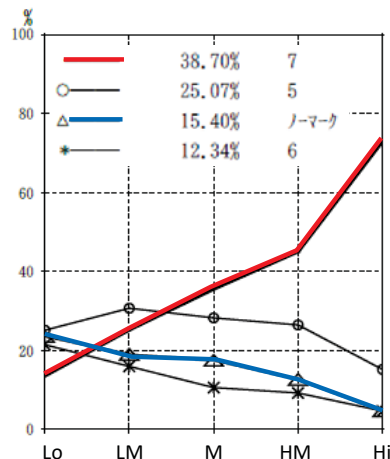
- ・軌跡と放物線の共有点の個数を考察する問題である。共有点の個数を判断する式が立てられれば包括的に判断できる問題であるが、立式できなかつたり、式を解釈できなかつたりした受検者が多かつたと考えられる。

②グラフの概形から面積と定積分の関係を定性的に考察する問題

第1問[2](3)(解答記号タ)

多肢選択
選択肢数 9

正答率 38.70%
無解答率 15.40%



Lo群とHi群の正答率の差が60ポイント程度である。

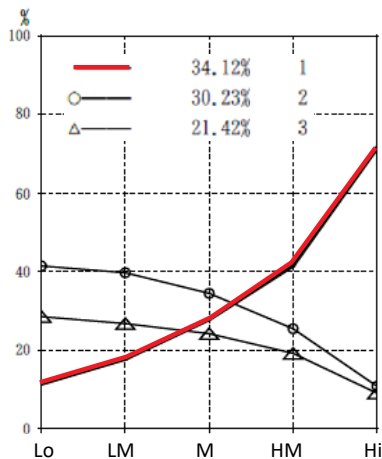
- ・三次関数の定積分を、三次関数のグラフとx軸とで囲まれた図形の面積で表す問題である。微分・積分の本質の理解を問う問題であり、受検者の学力の識別に寄与していると考えられる。

③具体的な事象を基に一般的に成り立つ性質を考察する問題

第1問[3](2)(ii)
(解答記号ト)

多肢選択
選択肢数 4

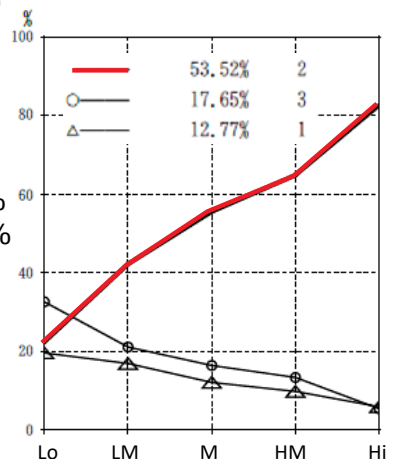
正答率 34.12%
無解答率 5.73%



第1問[3](2)(iii)
(解答記号ナ)

多肢選択
選択肢数 4

正答率 53.52%
無解答率 8.53%



Lo群とHi群の正答率の差が60ポイント程度である。

- ・対数ものさしの目盛りを合わせたとき、対数の性質を基に一致する目盛りの値の間の関係について考察する問題である。現行のセンター試験では出題されていないタイプの問題であったが、設問ごとの五分位図の傾向から考えると、受検者の学力の識別に寄与しているものと考えられる。

3. 有識者コメントの概要

大学関係者 5 名、高校関係者 3 名

○各問いの問題のねらいや、主に問いたい資質・能力が反映されていたかどうか

①評価すべき点

- ・数学的な見方・考え方ができるかを問う出題となっている。
- ・問いたいことを素直に問う良い問題であると思う。
- ・問題のねらいに合致している。難易度が高い問題もあるが、解決過程を振り返り、数学的な見方・考え方のよさを見いだす良問である。

②改善すべき点

- ・考える時間を保証できるような配慮が必要。
- ・出題の意図を強調するあまり、難易度が高くなることのないように配慮してほしい。

○科目の問題作成の方向性を踏まえ、題材の選定や問題の場面設定、出題形式等は適切だったかどうか

①評価すべき点

- ・日常生活や社会の問題における好事例を題材として取り上げたりして、数学化する力、活用する力など、様々な視点から問う良問である。
- ・全体的に興味深い題材を文脈の中で考えさせている良問が多く、数学的な興味・関心を高めるとともに論理的に思考する力や、振り返りを通して統合的・発展的に考える力を問う問題が多数出題されていてよい。
- ・受験生にとって比較的身近な日常生活や社会の事象を題材として扱い、それを数学化したり、数学的に解釈したり、表現・処理する力を問うている点が良い。日常生活に関連した問題を出題することにより、数学を学ぶ意義について理解を深めることに繋がるのではないかな。
- ・高等学校の授業改善を推進する問題であり、大いに歓迎したい。

②改善すべき点

- ・選択式解答の場合は仕方がない面があるが、解答の文字数は非常に大きなヒントになっている。少なくとも計算のミスをした場合に、それがわかることが多い。マークシートの使い方を複雑にしすぎるのもよくないと思うが、数値を答えさせる場合には、符号や桁数の情報が表に出ない方法をとるほうがよいと思う。
- ・問題の題材としてはとても面白いが、条件を理解するのに時間がかかる問題がある。

○各科目の問題構成、設問数、内容、難易度等のバランスは適切だったかどうか

①評価すべき点

- ・全体の問題の出題の分野は適切であると思う。
- ・設問数、難易度については、標準的であると思われる。

②改善すべき点

- ・正答率が低い問題については、もう少し丁寧に誘導した方がよかったと思う。
- ・試験時間に対し、設問数を減らすか難易度を落とした方がよいと思う。力作揃いであるがだけに受検者は息切れしそうになるかもしれない。少し力を抜いてもよいのではないか。

4. 共通テストの実施に向けた方向性

- 試行調査においては、高校2年生が約2割、3年生が約8割であること、11月に実施しており、受験本番に向けて学力がこれから伸びる時期であることを踏まえる必要があるものの、全体的に得点率が低く、平均正答率が5割を超える設問の数が54問中16問であった。また、無解答率が5割を超える設問は54問中15問であり、それらはいずれも選択問題の後半の問題である。
- 得点の分布図、設問正答率幹葉図、大問の五分位図、無解答率等を踏まえると、思考する時間が足りなかった可能性がある。この要因として、例えば、以下が考えられる。
 - ・問題文を読み解く量が多かった。
 - ・数学的な問題発見・解決の過程（作問のねらいとする主な「思考力・判断力・表現力」、及びそれらと出題形式との関係についてイメージ（素案）参照）の全過程を重視した問題などの工夫を各大問で行った。また、特定の資質・能力を問うために、あえて問題を段階的に問わない設問も設定し、思考の過程を明示しなかったため、受検生によっては考察に多くの時間を要した可能性がある。
 - ・解決過程を振り返って考察させる問題については、問題を数理的・数学的にとらえたり、構想・見通しを立てたり、焦点化した問題を解決したりする問題より正答率が低い傾向にあった。前問までの解決の過程を振り返って考察するという大問（もしくは中間）全体の出題意図が捉えられなかったことも要因のひとつと考えられる。
- 問題を段階的に問うのではなく、問いたい資質・能力を直接問う問題については、受検者層を踏まえると、やや難易度が高い傾向にあった。問題の設定を理解することや読む量と相まって、思考する時間が足りなかったのではないかと考えられる。
- 受検者自らが、問題発見・解決していくためには、日常事象を数学的にとらえたり、会話や問題文を単に読解するのではなく数学的にとらえた上で問題・課題に照らして必要な情報を整理し、その情報を活用することは重要である。「作問のねらいとする主な『思考力・判断力・表現力』、及びそれらと出題形式との関係についてのイメージ（素案）」のCに該当する資質・能力だけでなく、A、B、Dなどに該当する資質・能力を評価する観点から、試行調査のように、問いたい資質・能力を直接問う問題や数学的な問題発見・解決の全過程を重視した問題については、問題の難易度とのバランスにも十分配慮したうえで、引き続き出題し続けることが重要と考える。

- 以上の分析を踏まえ、共通テストに向けては、以下の基本方針に基づき問題作成を検討する。
 - ・ 大問構成については、試行調査および現行センター試験を踏襲し、共通問題を2題、選択問題3題とする。共通問題においては、現行学習指導要領における「数学Ⅱ」の内容を出題範囲とする。また、選択問題については、現行学習指導要領における「数学B」の大項目である、確率分布と統計的な推測、数列、ベクトルの三つをそれぞれ独立した大問として設定し、このうち2題を選択解答させる。
 - ・ 共通問題において、数学的な問題発見・解決の過程の全過程を問う問題は、大問もしくは中問1題程度とし、他の問題は、過程の一部を問うものにする。選択問題において、数学的な問題発見・解決の過程の全過程を問う問題は、解答に要する時間を十分検討した上で出題可能かどうかを全体構成の中で判断する。

過程の一部を問う問題については、これまでの大学入試においては、焦点化された問題を、一定の手順に従って処理したり論理的に考察したりして結論を得る資質・能力が問われることが多かったが、共通テストにおいては、共通問題、選択問題いずれにおいても、それらの資質・能力だけに限らず、事象を数学化し、問題解決のための構想を立てたり、思考の過程を振り返って考察したりする資質・能力なども試行調査と同様に問うように努め、問題全体の中で、それぞれの資質・能力をバランスよく問うようにする。
 - ・ 文章を読解するために要する時間を試行調査よりも軽減し、思考する時間の確保に努める。そのため、用いる題材は主として数学の事象とするが、日常生活や社会の事象などを題材とする問題も扱うよう努める。
 - ・ 幅広い学力層を識別するために、現行センター試験と同様に、結論に至る過程を設問や文章で段階的に示す問いを設定する場合もある。ただし、そのような場合においても、事象を数学化できるかどうかを問うために、問題文中で変数などをあえて設定しないなど、結論に至る過程の示し方を工夫して出題することがあり得る。

【世界史B】

1. 得点分布等に基づく分析

《受検者数等》

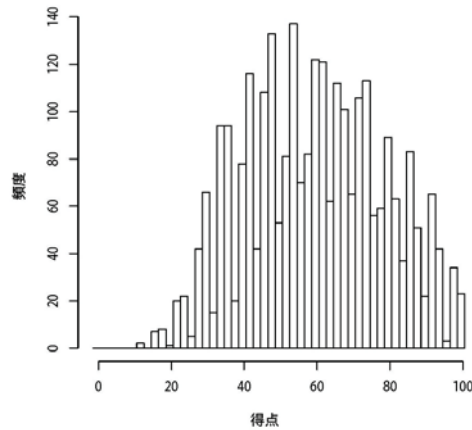
全受検者数 2,725人
高校3年生 2,151人 (78.9%)
高校2年生 574人 (21.1%)

《問題構成や設問数》

大問数 5題
設問数 マーク式 34問

《得点の分布図等》

世界史B (100点満点)



平均得点率	59.60% (62.78%)
平均点	59.60点 (62.78点)
標準偏差	18.90
最高点	100点
最低点	12点

※ 平均得点率及び平均点の括弧内は高校3年生のみを対象。

《設問正答率幹葉図》

平均正答率区間	(設問数)	設問番号	(部分正答等)
95%≧	(0)		
90%~95%	(0)		
85%~90%	(1)	10	
80%~85%	(1)	30	
75%~80%	(4)	7, 21, 24*, 32	
70%~75%	(0)		
65%~70%	(5)	4, 6, 9, 13, 26	
60%~65%	(6)	5, 11, 16, 19, 20, 28	
55%~60%	(2)	2, 17	
50%~55%	(7)	1, 3, 8, 14, 15, 29, 34	
45%~50%	(3)	22, (24,25)*, 31	24[1]
40%~45%	(3)	18, 23, 27	
35%~40%	(1)	33	
30%~35%	(1)	12	(24,25)[1,4]
25%~30%	(0)		24[5]
20%~25%	(0)		
15%~20%	(0)		(24,25)[5,1]
10%~15%	(0)		
5%~10%	(0)		
<5%	(0)		

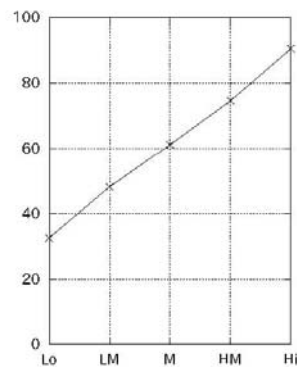
※ 設問番号は、解答番号を示す。
設問番号の後ろの[]内の文字列は選択肢を示す。
*は部分正答または正答の組合せが複数あるものを示す。

平均正答率 59.24%

《大問の五分位図》

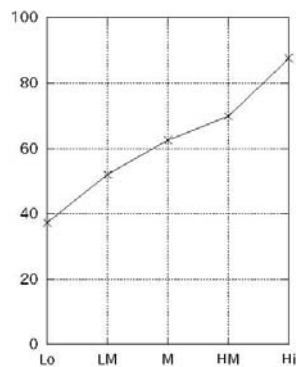
第1問

配点 24 点、平均 61.71%



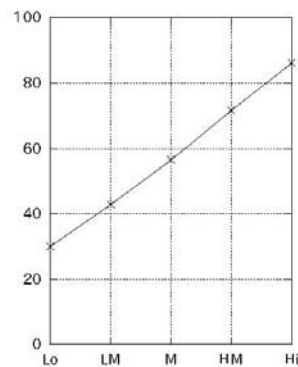
第2問

配点 23 点、平均 62.02%



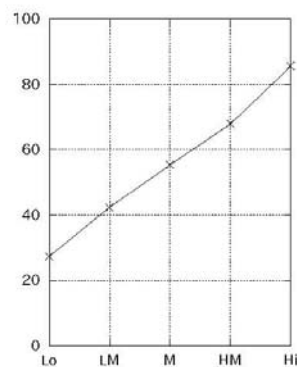
第3問

配点 18 点、平均 57.76%



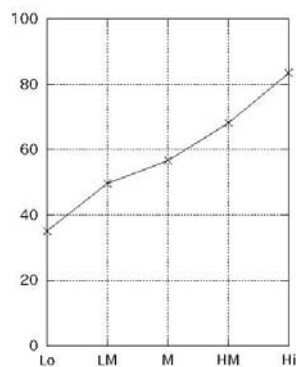
第4問

配点 17 点、平均 56.03%



第5問

配点 18 点、平均 58.94%



- 第1回試行調査の結果を踏まえ、第2回試行調査では、正答率や得点分布のバランスに配慮した各設問の難易度を検討するとともに、問いかけ方の工夫や問題の分量（文章量、使用する資料の種類等）、問題全体で問いたい知識・技能と思考力・判断力・表現力のバランスについて検討した。
問題の分量について言えば、設問数を減らしたほか、扱う資料や会話文について吟味し、結果として、問題冊子のページ数を41ページから31ページに縮減した。また、問題の場面設定については、授業において生徒が学習する場面という設定が、第1回試行調査では6問あったが、第2回試行調査では2問とし、他の場面とのバランスを図った。
- 平均得点率（平均正答率）は5割程度を超えた。得点の分布図を見ると、中央から得点の高い方にやや分布の偏りはあるが、標準偏差は18.90であり、センター試験の過去3年間の数値ほどではないまでも（20.31～22.80、受検者数等は試行調査と異なる）、得点の散らばりは適度にあった（ただし、配点がほぼ全て3点であったことから、特定の得点者数が少なくなっている）。各大問の五分位図からは、多様な学力層を識別していることが伺える。すべての大問のHi群において得点率が8割を超えており、このことが全体の得点率を高める要因になったものと考えられる。設問毎の正答率に関しても、9割を超える問題や3割を下回る問題はなく、個々の問題の難易度としては、概ね適切であった。なお、無解答率も全体的に低かった。また、全問を正解した受検者の割合は、他の教科・科目と比べて多かった（0.84%：2,725人中、23人）。

2. 小問ごとの分析

- 各小問と、当該小問を除いた全問題との間のピアソンの積率相関係数を算出し、さらに、五分位図により分析を行った。また、新たな出題形式等についても分析を行った。
- （1）Lo群とHi群の差が20ポイント以下の問題
五分位図におけるLo群とHi群の正答率の差が、20ポイント以下の問題はなかった。平成30年度試行調査について、識別性は確保できたと考える。
- （2）新しい出題形式等
 - ① 解答が前問の解答と連動し正答の組合せが複数ある問題
1問出題。五分位図、小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。
- （3）その他
以下の項目について、五分位図、小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。
 - ① 正答を選択した受検者の比率を、特定の誤答を選択した受検者の比率が上回った問題（1問）
 - ② Hi群の正答率が最も低かった問題
 - ③ 歴史的事象の本質的な意味を問う問題（1問）

(2) 新しい出題形式等

① 解答が前問の解答と連動し正答の組合せが複数ある問題

第4問A問2(1)、(2)
(解答番号24、25)

多肢選択

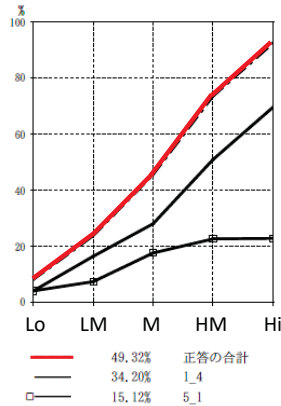
解答番号24の選択肢数 6

解答番号25の選択肢数 8

解答番号25の正答率 49.32%

正答 1_4 : 34.20%

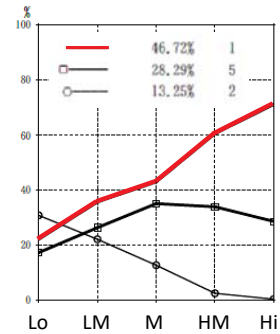
正答 5_1 : 15.12%



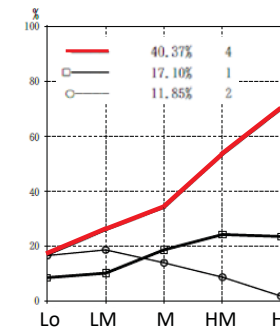
〈参考：各選択肢ごとの五分位図〉

○ 解答番号24

→ 正答率 75.01%



○ 解答番号25 (※)



※ 4と1の選択者には、正答としない者も含めている。

受検者は、解答番号24において風刺画から情報を読み取り、二つの正答の中から一つを選ぶ。さらに解答番号25では、前問で選択した内容に関わる三つの歴史的事象を八つの選択肢の中から識別し、それらを年代順に配列して解答する。なお、今回の試行調査では、複数の正答のいずれにも共通した要件となる選択肢を用意し、考察させるという新たな試みを取り入れており、例えば、識別する八つの選択肢のうちの一つは、解答番号24における二つの正答の双方に関わる歴史的事象である（「b ウィーン会議に参加した。」）。また、解答番号25については、前問と連動していなければ正答としなかった。

解答番号25の正答率は全体で5割程度であり、前問と連動する出題形式が、極端に難易度を上げることはなかったと思われる。一方、正答に至るまでの過程の複雑さ（識別と年代配列という、段階を踏んだ思考）は、LM群及びLo群の正答率を下げた要因として考えられる。

(3) その他

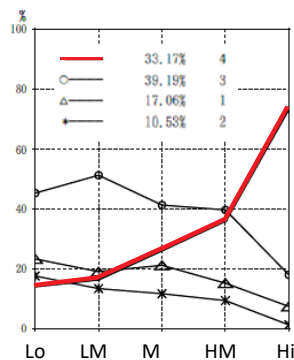
① 正答を選択した受検者の比率を、特定の誤答を選択した受検者の比率が上回った問題

第2問B問4
(解答番号12)

多肢選択

選択肢数 4

正答率 33.17%



② Hi群の正答率が最も低かった問題

第5問A問3
(解答番号31)

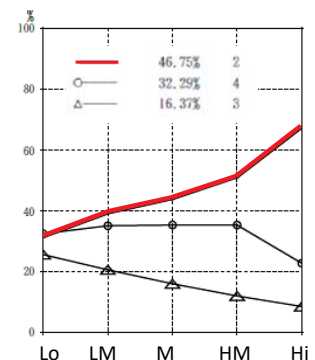
多肢選択

選択肢数 4

正答率 46.75%

Hi群の正答率

67.50%



文語体で書かれた初見の資料から必要な情報を読み取り、習得した知識を活用して、歴史的事象の展開について考察させることをねらいとした。近代のフィリピンを舞台とした、欧米列強による植民地争奪の展開を問うたが、全体の正答率は低く、Hi群を除く各群においては、特定の誤答（日本と清の組合せ）を選択した受検者の割合が、正答率を上回った。文語体の判読に不慣れであり、資料中に表されている国名にとらわれたことが、その要因として考えられる。文語体の資料に限らず、表面的ではない、資料全体の丁寧な読み取りについては、今後も求めていきたい。

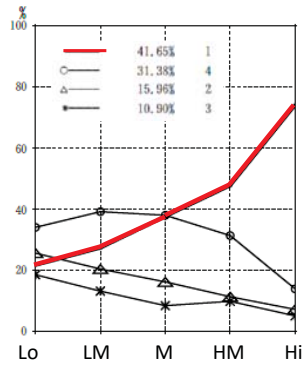
イギリスの産業革命について、複数の資料を結び付けて考察させ、経済状況の変化を述べたパネルの妥当性を判断させた。Hi群の正答率は、全ての問題の中で最も低かった。資料が意味するところを正確に把握し、数ある資料の中から、正答を導くためには何が適切であるかを判断するために、やや複雑な過程を要したことが、要因として考えられる。

③ 歴史的事象の本質的な意味を問う問題

第4問B問4
(解答番号27)

多肢選択
選択肢数 4

正答率 41.65%



同時代史的な視点から中国王朝を特定し、その王朝の時代に該当する歴史的事象について問う問題である。Hi群を除く受検者の多くが、正答を導き出すことができなかった要因としては、いずれの選択肢も、歴史的な用語を用いずに歴史的事象の特徴を表現したものであったことが考えられる。歴史的事象の本質的な意味を問うことについては、今後も求めていきたい。

3. 有識者のコメントの概要

大学関係者 5 名、高校関係者 3 名

○各問いの問題のねらいや、主に問いたい資質・能力が反映されていたかどうか

① 評価すべき点

- ・マークシート方式による解答という限界の中で、単なる歴史事項等の記憶による解答ではなく、思考力や判断力を問う、ないし推論する力を問うような問題を作ろうとする努力は、良く感じられた。
- ・問題を解くうえで必要な歴史的知識は、歴史の流れを大観する基礎基本に係るものが多い。トリヴィアルな知識の暗記の有無よりも、歴史に係る「思考力・判断力・表現力」を問うことに成功している。
- ・資料を読み解くという趣旨は達成されている。史料や風刺画は、設問に関連したものになっている。

② 改善すべき点

- ・「資料の読み取り→事実の判断（確定）→因果等に関わる歴史的事象の解釈」という流れを生徒が確実にたどっていくような問題が、思考力評価の問題の基本型である。この流れがどこかで切れても解答可能であれば、その問題構成では基本的に「史実の暗記・想起」を促す学習の改善にはつながらない。
- ・「歴史的意義」「根拠・理由」など、これまでのセンター試験では問うことができない思考力の問題をもう少し増やすべきではないか。
- ・歴史の多面的な解釈について検討する問題が、なくなってしまったのが残念である。前回のプレテストのなかで最も優れていると思われる問題の趣旨であり、今後の復活が望まれる。
- ・「主に問いたい資質・能力」の特に「思考力・判断力・表現力」と小問の概要が対応していない（ずれている）と判断される問題がいくつか見られる。

○科目の問題作成の方向性を踏まえ、題材の選定や問題の場面設定、出題形式等は適切だったかどうか

① 評価すべき点

- ・各国史を詳細・網羅的に学ぶことよりも、グローバル・ヒストリーの共時構造を捉えることと、各時代をレイヤーのように比較することが重視されている。地域相互の「つながり」を押さえる学習や、時代相互の「比較」を行う学習を求めている。
- ・特定の時代や地域に限定して出題するのではなく、歴史を全体的に、あるいは時系列的に大きく捉えた問題が多い。総じて、資料「問題作成の方向性」の歴史における説明を踏まえた作問がなされている。
- ・歴史の事象（＝用語）を知らずには、いかなる考察もできないことから、試験では、知識と考察の過程を、バランスよく確認することが求められる。いずれも意欲的な出題に結実していることを評価する。
- ・これまでの日本の歴史教育では、資料を読む学習がきわめて欠如していた。このように試験でメッセージを出すことによって、より資料を読んで歴史的事実に向ける学習が進むと思われる。歓迎したい。

- ・生徒の学習活動をモチーフに構成された問題は、「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」への授業改善を示唆しており、次期共通テストの問作の仕方として一層充実すべきである。
- ・グラフや数表を用いた問題は、これらのデータと歴史過程とを連関させて理解できるかを受検者に問う、という点で重要だ。単なる事項暗記のような学習では対応が難しい。
- ・選択肢の中に歴史用語をあえて入れず、その内容説明から生徒に考えさせようとする意図をうかがうことができ好印象である。

② 改善すべき点

- ・問題冒頭の説明文、ないしは資料類と、具体的な設問とが、必ずしも連動していないのではないかな。あるいは、すっきりとは対応していない（例えば、冒頭説明文を読まずとも設問に対応できてしまう）問題が、まだあるように思われた。
- ・世界史を通じて思考力を測るには、史料から仮説を立てたり、歴史事象の展開を考察したりすることが、最も適切だと思われる。今回の試験では、その比率は十分ではないように思われる。
- ・今回のような煩雑な出題形式では、歴史的な事実や思考力を問うているのか、それともそれ以外の一般的な文章読解力を問うているのか、判別できにくい。問題の出題形式はシンプルにすべきである。

○各科目の問題構成、設問数、内容、難易度等のバランスは適切だったかどうか

① 評価すべき点

- ・時代、地域については、まんべんなく問われており、その点で評価できる。
- ・難問、奇問の類はない。 ・ 設問数、内容も適切であると思われた。
- ・問題の難易度は前回のプレテストより、平易になったと思われる。問題自体は前回の方が、迫力があつたが、難易度は今年度くらいが妥当であろう。

② 改善すべき点

- ・それぞれに工夫された問題でバランスもよいが、設問数が多すぎるようにも思われる。全地域、全時代をカバーすることにこだわらず、史料を活用し集中的に「思考力」を確認する問題を出すこともあり得るのではないかな。
- ・難易度は適切であるとも言えようが、従前のセンター試験（いわばコンテンツ・ベースの試験）と類似し、生徒が違和感なく解答できたことも影響しての解答率とは言えないかな。真に思考（推論）型の問作をすると、平均点は下がってこよう。
- ・文化史に関連する出題が少ない。もちろん、文化史において、著者名の暗記を問うような出題になってしまつては本末転倒である。
- ・（連動式は）実質 5 点配点の問題となっており、他の問題と比べて、配点上のバランスを欠くように思われる。

4. 共通テストの実施に向けた方向性

試行調査を11月に実施していることから、一部の内容について未習であった受検者は、少なからずいたものと思われる。また、高校3年生の受検者の割合は約8割であり、第1回試行調査と比べると、全受検者中に占める割合は低かった（第1回試行調査において高校3年生の占める割合は、約9割であった）。総じて、第2回試行調査の平均正答率が低くなる要素はあつたが、実際の数値は目標とした5割を上回った。学習の成果が十分に発揮されている設問も見られ、例えば、グラフの読解に係る数問については、正答率の高さが顕著であった。また、問題全体を通して、些末な知識を問わないように心掛けたことも、正答率を押し上げる要因になったと考える。

共通テスト実施に向けた方向性として、問題の分量や出題形式及び場面設定については、無解答率を見る限り、今回の調査問題が一定の目安になるものと考ええる。一方、問題の難易度については、今回比較的正答率が高かったことを踏まえて検討していく。その際には、今後の学習のあり方をも見据え、例えば、資料を丁寧に読み取って歴史的事象の展開等を類推する問題や、歴史的事象の本質的な意味を問う問題、歴史の多様な解釈に係る問題等、深い学びに資すると思われる設問などを、難易度と設問数のバランスに配慮しながら、出題していくことを検討する。

【日本史 B】

1. 得点分布等に基づく分析

《受検者数等》

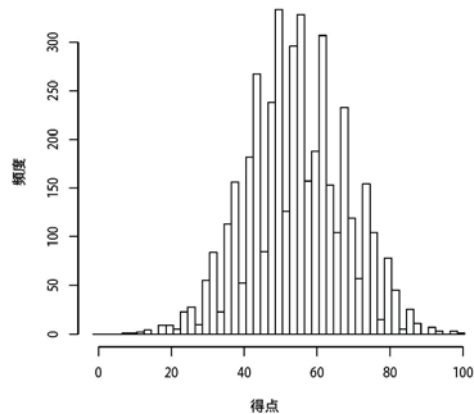
全受検者数 4,200人
 高校3年生 3,538人 (84.2%)
 高校2年生 662人 (15.8%)

《問題構成や設問数》

大問数 6題
 設問数 マーク式 33問

《得点の分布図等》

日本史 B (100点満点)



平均得点率	54.57% (55.19%)
平均点	54.57点 (55.19点)
標準偏差	13.40
最高点	100点
最低点	8点

※ 平均得点率及び平均点の括弧内は高校3年生のみを対象。

《設問正答率幹葉図》

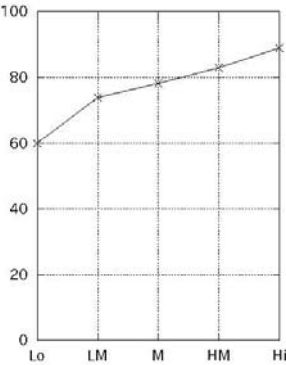
平均正答率区間	(設問数)	設問番号	(部分正答等)
95%≧	(2)	1, 4	
90%～95%	(1)	13	
85%～90%	(1)	5	
80%～85%	(2)	2, 15	
75%～80%	(2)	21, (35,36)*	
70%～75%	(1)	25	
65%～70%	(0)		
60%～65%	(2)	3, 22	
55%～60%	(2)	16, 32	
50%～55%	(1)	12	
45%～50%	(7)	8, 14, 23, 24, 26, 33, 34	
40%～45%	(1)	20	(35,36)[1,5]
35%～40%	(6)	6, 7, 17, 19, (27-28)[34]*, 30	(27-28)[3]
30%～35%	(1)	18	(35,36)[2,7]
25%～30%	(1)	29	
20%～25%	(1)	31	(27-28)[4]
15%～20%	(1)	9	
10%～15%	(0)		
5%～10%	(1)	(10-11)	
<5%	(0)		

※ 設問番号は、解答番号を示す。
 設問番号の後ろの[]内の文字列は選択肢を示す。
 *は部分正答または正答の組合せが複数あるものを示す。

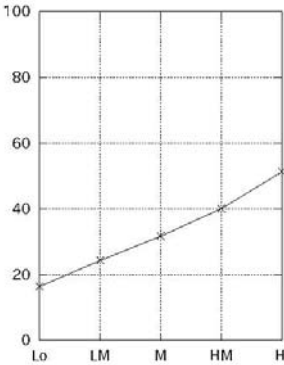
平均正答率 53.58%

《大問の五分位図》

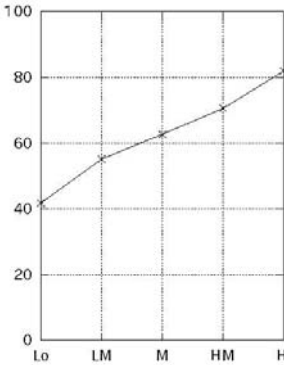
第1問
 配点 18 点、平均 76.84%



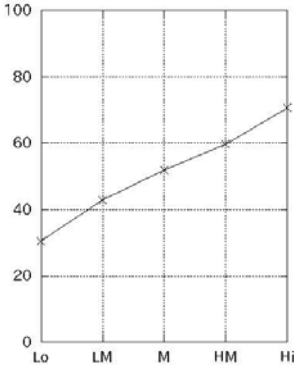
第2問
 配点 15 点、平均 32.81%



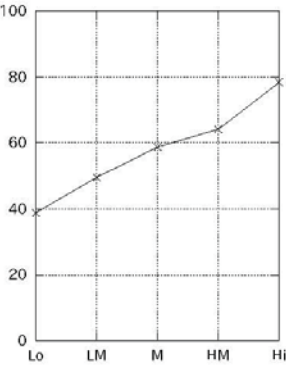
第3問
 配点 15 点、平均 62.48%



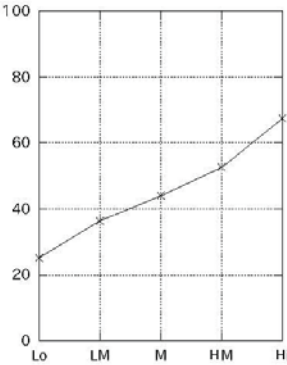
第4問
 配点 15 点、平均 51.14%



第5問
 配点 16 点、平均 58.03%



第6問
 配点 21 点、平均 45.17%



- 第1回試行調査の結果を踏まえ、第2回試行調査では、正答率や得点分布のバランスに配慮した各設問の難易度の検討、問いかけ方の工夫や問題の分量（文章量、使用する資料の種類等）や、問題全体で問いたい知識・技能と思考力・判断力・表現力のバランスを図りつつ、問題冊子のページ数を36ページから30ページに減じた。問題の場面設定では、授業において生徒が学習する場面の設定は、第1回試行調査においては多くあったが、第2回試行調査では2問として、問題作成方針を踏まえながら資料やデータ等を基に考察する場面とのバランスに配慮した。
- 平均得点率（平均正答率）は5割程度に達した。標準偏差は13.40であり、受検者数や目標平均得点率が異なるため、センター試験と一概に比較はできないものの、センター試験の過去3年間の標準偏差は概ね15～20であることから、試行調査における得点の散らばりは少し小さい（1問を除き全て3点であったことから、特定の得点の取得者数が少なくなっている）。なお、無解答率は全体的に低かった。
- 各大問の五分位図からは、多様な学力層を識別できていることが伺える。なお、各大問の得点率は大問間で極端な違いは認められないが、第1問と第2問については、Hi群とLo群の得点率の差が小さく、第1問は易化した大問、第2問はやや難度の高い大問となっている。設問毎の正答率では、90%以上の正答率の問題数が3問と多いこと、30%から50%の正答率の問題数が50%から70%の正答率の問題に比して多くなっている。これらのことから、得点分布は中央値での尖度が目立つ分布となっている。

2. 小問ごとの分析

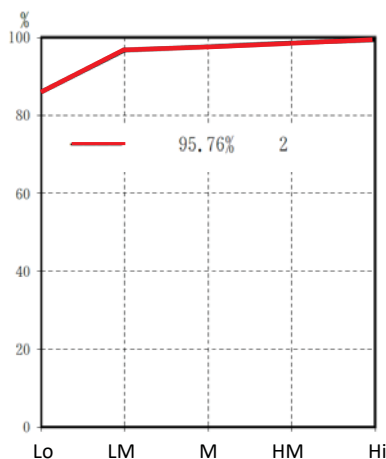
- 各小問と、当該小問を除いた全問題との間のピアソンの積率相関係数を算出し、さらに、五分位図により分析を行った。また、新たな出題形式等についても分析を行った。
 - (1) 五分位図におけるLo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の問題
5問あり、その全ての問題について、五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。
このうちの1問は(3)と関連するため(3)において説明する。
 - (2) 新しい出題形式等
 - ① 前問の問いの解答を踏まえて取り組む問題
1問出題。五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。
 - (3) その他
 - ① 正答率が非常に高い問題
1問あり、五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。
 - ② 正答率が非常に低い問題
2問あり、五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。
 - ③ 1問内で異なる資質・能力を問う問題
1問あり、五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。
 - ④ 思考過程を問うなど特徴のある問題例
以下の3問を取り上げ、五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。
 - ・ 資料から取り出した情報と歴史的事象を組み合わせた推論を必要とする問題
 - ・ 複数の資料から取り出した情報と身に付けた知識を関連付けて歴史的事象の影響を考察する問題
 - ・ 相異なる評価の根拠を考察し、歴史的事象の意味や意義を捉える問題

(1) 五分位図におけるLo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の問題

第1問問4
(解答番号4)

多肢選択
選択肢数4

正答率 95.76%



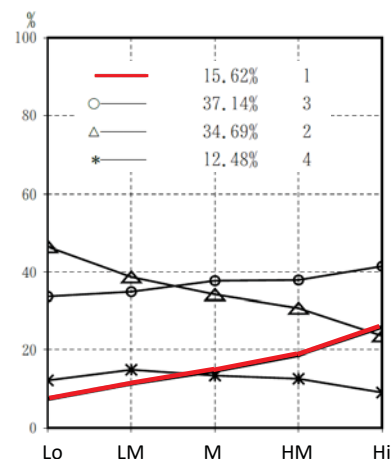
Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の理由として、以下が考えられる。

- 示された資料から情報を取り出し、津波碑が歴史の中で果たした意味や意義を解答する問題であるが、資料を平易にしたことにより比較的容易に正答を見出すことができる設定であり、正答率が高くなったと推測できる。等

第2問問2(2)
(解答番号9)

多肢選択
選択肢数4

正答率 15.62%



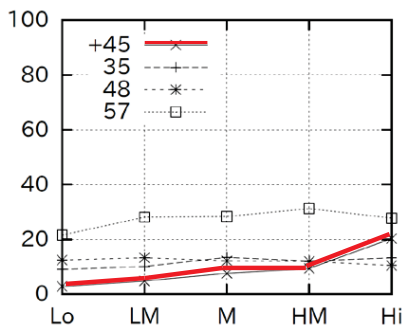
Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の理由として、以下が考えられる。

- 示された複数の資料から古代官道制度に関する情報を取り出し、律令国家の変遷と関連付けることを求めた問題であるが、年表と文献資料という異質な資料から情報を取り出しまとめ、長い時間幅で歴史的事象が変化する背景を推論する必要があったことで正答率が低くなったと推測できる。等

第2問問3
(解答番号10-11)

多肢選択
選択肢数9

正答率 9.05%



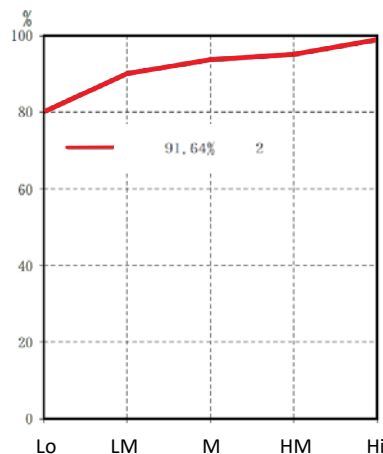
Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の理由として、以下が考えられる。

- 地理的条件や歴史の見方の多様性を踏まえて、中央政府と蝦夷の関係性をとらえる際の根拠となる情報や歴史的事象を考察する問題であるが、方位を逆転した地図という馴染みのない資料であったことや問題文の条件付けに基づいた解答であったこと。複数選択で完全解答を求めたことが考えられる。また、問題文の条件付けの複雑さや組み合わせる選択肢文の曖昧さがあったことも正答率が低くなった原因と推測できる。等

第3問問1
(解答番号13)

多肢選択
選択肢数4

正答率 91.64%



Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の理由として、以下が考えられる。

- 中世における海外からの影響を受けた場面を表した絵画資料を選択する問題であるが、選択肢の資料が教科書等で馴染みのある図版であることや、図版資料から取り出せる情報と問題文で求めていることが直接的に結びつくことから難易度の低い問題であったことが原因であると推測できる。等

(2) 新しい出題形式等

① 前問の問いの解答を踏まえて取り組む問題

第6問問7

(解答番号35,36)

多肢選択

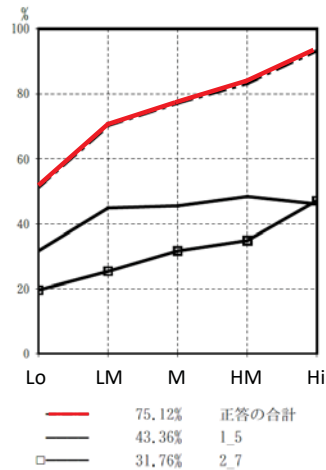
できごと(35) : 選択肢数 2

理由(36) : 選択肢数 6

正答率 75.12%

正答 1 - 5 : 43.36%

正答 2 - 7 : 31.76%



できごとが歴史に与えた影響を考える問題である。時代の転換となる画期となるできごとを複数提示することで、歴史事象の解釈は多様であることに気付かせる作問の工夫を行った。1 - 5、2 - 7の選択組合せが正答となり、Hi群で約95%、Lo群で約50%の正答率となり、その差は40ポイント以上ある。今回の問題では、選択したできごとの内容理解を重視した構造であったため、Hi群での高い正答率につながったと考えられる。第1回試行調査の同様の問題との結果比較や問いたい資質・能力と照らしての出題の在り方について更に工夫が必要と考えられる。

(3) その他

① 正答率が非常に高い問題

第1問問1・問2

(解答番号1,2)

多肢選択

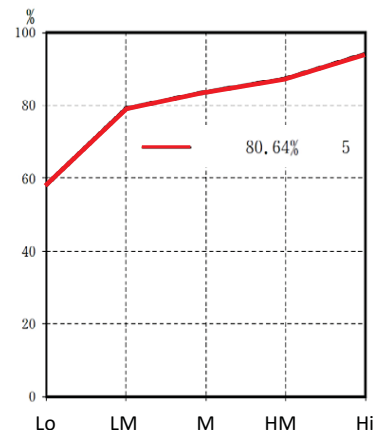
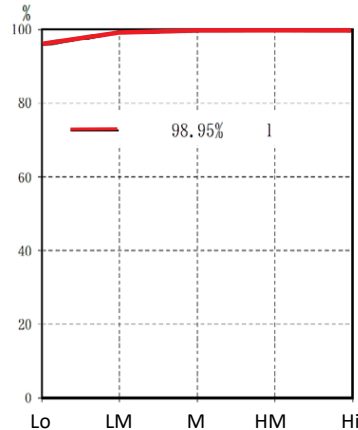
問1 : 選択肢数 4

問2 : 選択肢数 6

正答率

問1 : 98.95%

問2 : 80.64%



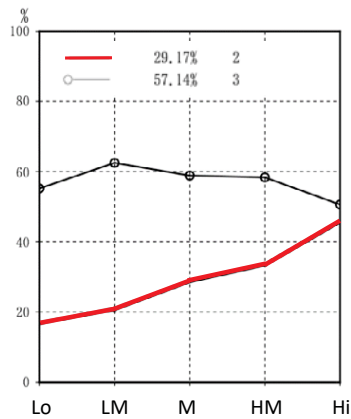
生徒が探究活動をすすめる上で、主題を設定し年表を作成する場面(問1)と年表を基に学習を進めていく場面(問2)を設定した。受検生は問1の解答を踏まえて問2の解答を行うため、特に問1については、選択肢の内容を平易にし、組合せも単純なものにした。結果としてほぼ全ての受検生が正答し、識別力が低い問題となった。問2は示された歴史事象の時期と主題を踏まえて解答する問題であり、問1の主題を捉えられなければ解答できない問題として設定した。正答率はHi群で約95%、Lo群で約60%であり、その正答率の差は20ポイント以上あるものの中下位群での正答率も高く識別力が低い問題となった。識別力の担保という点からも出題の可否について検討の余地がある。

② 正答率が非常に低い

第6問問1
(解答番号29)

多肢選択
選択肢数4

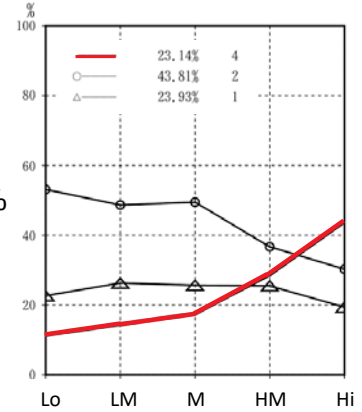
正答率 29.17%



第6問問3
(解答番号31)

多肢選択
選択肢数4

正答率 23.14%



問1は、単なる文学史的な知識ではなく、時代背景と関連付けて理解できているかを問うたものである。有識者からも「時代背景と結びつけて文化を理解するべきだ」というメッセージが込められた良問」と評価を受けている。Lo群とHi群の正答率の差は20ポイント以上あることから識別力は認められる。正答率が低くなった原因として、呈示した生徒の発表資料の内容を踏まえて解答する必要がある問題であること。また、Hi群の生徒でも誤答選択肢を選ぶ生徒が多いことから、選択肢に曖昧さがあったこと、問いかけの方法に曖昧さがあったことが受検生の解答に影響したと考えられる。個別具体的な歴史用語を使用せず、時代の特徴を説明した選択肢で構成する問題構成の出題に当たっては、問いかけ文、選択肢の文章の精査がさらに求められる。

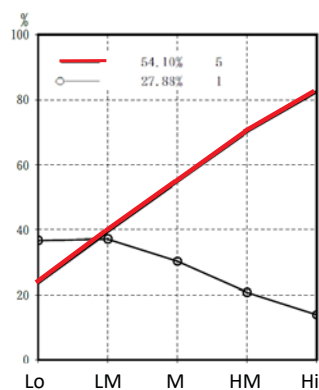
問3についても、同様の傾向が認められる。

③ 1問内で異なる資質・能力を問う問題

第2問問4
(解答番号12)

多肢選択
選択肢数6

正答率 54.10%



関所に関する資料を時系列に従い配列することと資料から取り出した情報を基に各時代の関所の機能を考察することという異なる資質・能力の問いを持った構成の問題である。受検生の解答状況から、機能については各学力層で捉えることができているが時系列に配列する部分で学力層間で差が生じており、正答率はHi群で約80%、Lo群で20%であり、識別力が高い問題となっている。

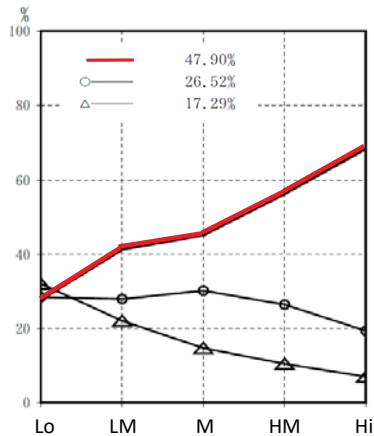
④ 思考過程を問うなど特徴のある問題例

- ・提示された情報と基礎的な知識を関連付け推論を必要とする問題

第5問B問4
(解答番号26)

多肢選択
選択肢数 4

正答率 47.90%



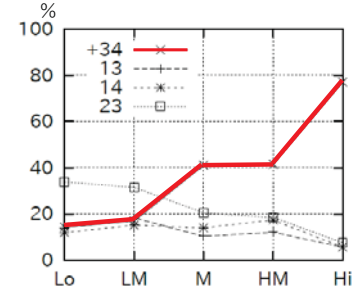
提示された絵画資料と解説メモから得られる情報をもとに、図が描かれた時期の状況を踏まえながら、絵画の製作意図を推論し、選択肢となる絵画資料を解答する問題である。中上位・上位の学力層と中位以下の学力層間で差が生じており、正答率はHi群で約70%、Lo群で30%であり、識別力のある問題となっている。

- ・複数の資料から取り出した情報と身に付けた知識を関連付けて歴史的事象の影響を考察する問題

第5問B問5
(解答番号27-28)

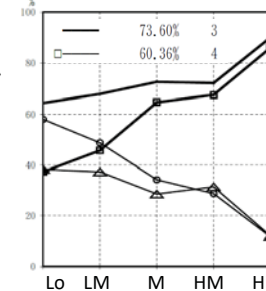
多肢選択
選択肢数 4

正答率 38.38%



〈参考：各選択肢ごとの選択率〉

選択肢 3 : 73.60%
選択肢 4 : 60.36%



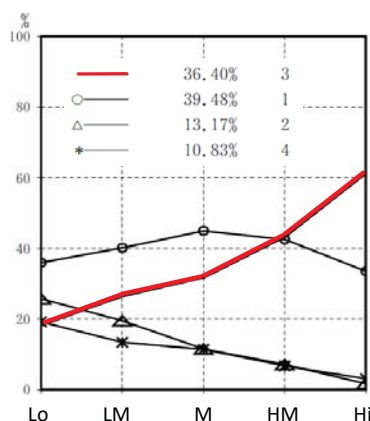
提示された複数の資料から取り出した情報をまとめ、歴史的事象が世界に与えた影響を考察する問題である。資料から取り出した情報と直接的に結びつく選択肢3の選択率は高く、Lo群でも60%以上となっている。資料から取り出した情報を解釈し知識と関連付けることが求められる選択肢4の選択率は、Hi群で約80%、Lo群で約40%であり、識別力のある問題となっている。

- ・相異なる評価の根拠を考察し、歴史的事象の意味や意義を捉える問題

第3問問4
(解答番号17)

多肢選択
選択肢数 4

正答率 36.40%



15世紀という時代に対する異なる評価の根拠となる歴史的事象の意味や意義を考察する問題である。選択肢の選択率からある評価の根拠となる歴史的事象は捉えられているが別の評価の根拠となる歴史的事象の選択で迷った状況が中上位の学力層でも見られる。Hi群で約60%、Lo群で約20%の正答率であり、最も高い学力層を識別する問題となっている。

3. 有識者コメントの概要 大学関係者5名、高校関係者3名

○各問いの問題のねらいや、主に問いたい資質・能力が反映されていたかどうか

①評価すべき点

- ・全問とも「問題のねらい」「主に問いたい資質・能力」、小問の概要に沿った内容となっている。
- ・時代の特徴や転換についてマクロな視点からとらえさせるものや、個別の事象を歴史の展開の中に位置づけさせるなど、歴史的な見方・考え方を働かせることを意識した問題が多く見られた。

②改善すべき点

- ・一層深い思考を促す設問や資料の工夫が求められてもよいように考える。思考力の種類だけではなく、層構造という視点も今後考えられるべきである。
- ・「知識・技能」より「思考力・判断力・表現力」を問うことを意図した出題が多いことは評価できるが、問題そのものは基本的な知識問題が多く、課題が残る。

○科目の問題作成の方向性を踏まえ、題材の選定や問題の場面設定、出題形式等は適切だったかどうか

①評価すべき点

- ・「主体的で対話的な深い学び」について、授業における生徒の具体的な学びのスタイルが想定された大問構成であり、指導の方向性や具体的な到達点について、示唆に富む内容となっている。
- ・①歴史がたえず異なった解釈（反論）を織り込んだ形で叙述されていること、しかし、②資料の恣意的な解釈はできないこと、を問題で具体的に示している。こうした姿勢で、生徒に歴史を学んでほしいというメッセージになっている。
- ・単に歴史用語を理解するだけではなく、時代状況全般の理解とつなげている点は、優れている。

②改善すべき点

- ・文字資料はできるだけ原文に近い表現で出題するよう意識されていたが、資料を活用する際に文語体への慣れを前提とするのか、現代語訳して読み取りへの障壁を除くのかは今後議論の余地がある。
- ・「思考・判断・表現」の問題のほとんどの解答形式が、史資料の正誤、史資料と意見の組み合わせになっており、より出題形式の多様化が必要である。

- ・選択肢にあいまいさをふくんでいる。生活史の次元では一元化出来ない歴史現象がまま、みられる。歴史学研究上の課題でもあるが、①社会風潮を理解すること、しかし、②選択肢として厳密化し問題化することには、まだ距離があるように思える。

- ・本来問うべき歴史的な見方・考え方を働かせられたかの判別ではなく、問題文の意図をくみ取るのに苦労したことで正答率が低くなったと思われる設問が存在した。

- ・資料は多く使用されているが、資料問題（資料から読み取った情報をもとに歴史的事象を考察する）では、「資料の読み取り」（資料を多角的多面的に読み取り、そこから得た情報をもとに考えさせる）をもっと丁寧にさせるべきである。

○各科目の問題構成、設問数、内容、難易度等のバランスは適切だったかどうか

①評価すべき点

- ・資料から読み取れることを踏まえて、出題における仮想的な読み取り者の結論（や意見）について答えさせる問題となっている。（資料を踏まえなければならない形式の問題となっている。）問題構成、設問数、内容、難易度等のバランスも適切であったと評価できる。
- ・設問数、内容の点では、資料読み取りに時間がかかると思われるが、制限時間内の解答に支障はない。

②改善すべき点

- ・個々の設問・選択肢・資料が大問テーマに縛られすぎている。全体的に雑多な印象があり、様々なテーマや資料などを盛り込みすぎているように感じる。もっと大問のテーマをシンプルにして設問や選択肢を工夫すべきである。
- ・問題文の文字量・情報量に比べて、選択肢は、それが少ないために正答へのアプローチが不十分なところが見られるという点がある。
- ・限られた紙面で歴史的意義を考察させるに際しては、一つの事象事例で、どこまで敷衍できるのか、留意する必要がある。

4. 共通テストの実施に向けた方向性

平均得点率（平均正答率）は当初の目標である5割程度を上回っており、問題構成、設問数、内容、難易度等の一定のバランスはとれていたと考えられる。しかしながら、共通テストに向けて以下の点で検討の余地がある。

今回の試行調査では、正答率が9割を超える小問が3問あったことから、呈示する資料や選択肢の内容を工夫することで、極端に易化した問題数を減じる必要がある。

多様な学力層を識別するために、正答率が中程度からやや高い問題を一定数含む様々な難易度の問題からなる試験問題とする必要がある。試行調査の結果から3割から5割程度の正答率となる問題が多いため、現行センター試験で最も多くなる5割から7割程度の正答率となる問題を増やす必要がある。呈示する資料、選択肢の内容を工夫することや問いかけ文の複雑さを解消すること、設問中に受験生の思考過程の手立てとなるような足場かけを適切に設けるなどの様々な工夫を行う必要がある。

以上のような点に配慮することで難易度の調整をはかりつつ、標準偏差が高くなるようにねらい、正答率や得点分布のバランスに一層配慮する。特に、5割から7割程度の正答率となる問題を多く設定することに留意し、様々な学力層を対象とする選抜試験となるよう企図していく。

【地理B】

1. 得点分布等に基づく分析

《受検者数等》

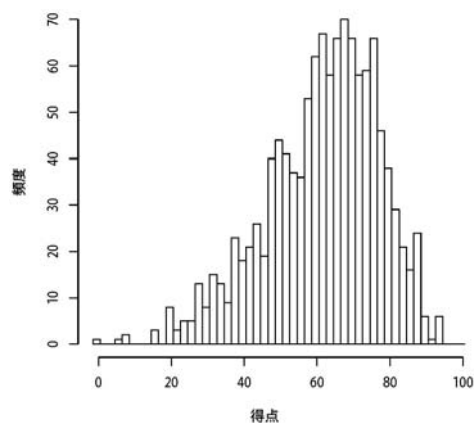
全受検者数 1,203人
 高校3年生 741人 (61.6%)
 高校2年生 462人 (38.4%)

《問題構成や設問数》

大問数 5題
 設問数 マーク式 30問

《得点の分布図等》

地理B (100点満点)



平均得点率 61.46% (62.72%)
 平均点 61.46点 (62.72点)
 標準偏差 15.51
 最高点 94点
 最低点 0点

※ 平均得点率及び平均点の括弧内は高校3年生のみを対象。

《設問正答率幹葉図》

平均正答率区間	(設問数)	設問番号	(部分正答等)
95%≤	(0)		
90%~95%	(1)	22	
85%~90%	(3)	1, 30, 32	
80%~85%	(1)	24	
75%~80%	(3)	4, 12, 16	
70%~75%	(3)	15, 17, 31	
65%~70%	(0)		
60%~65%	(4)	2, 8, 9, 18	
55%~60%	(5)	14, 23, (25-26)[37]*, 27, 29	
50%~55%	(1)	(20-21)[37]*	
45%~50%	(2)	5, 10	
40%~45%	(3)	6, 11, 19	
35%~40%	(0)		
30%~35%	(0)		
25%~30%	(3)	7, 13, 28	(20-21)[3]
20%~25%	(0)		(25-26)[3]
15%~20%	(0)		
10%~15%	(1)	3	
5%~10%	(0)		(20-21)[7], (25-26)[7]
<5%	(0)		

※ 設問番号は、解答番号を示す。

設問番号の後ろの[]内の文字列は選択肢を示す。

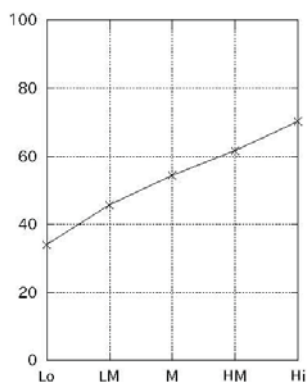
*は部分正答または正答の組合せが複数あるものを示す。

平均正答率 60.02%

《大問の五分位図》

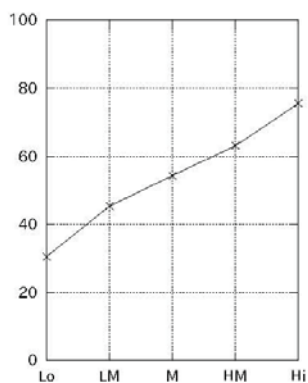
第1問

配点 20 点、平均 53.44%



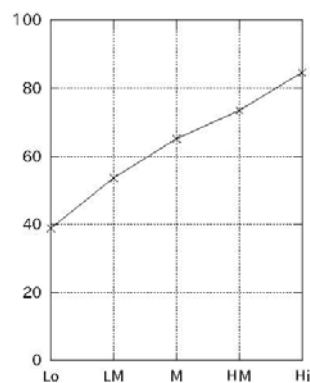
第2問

配点 20 点、平均 54.05%



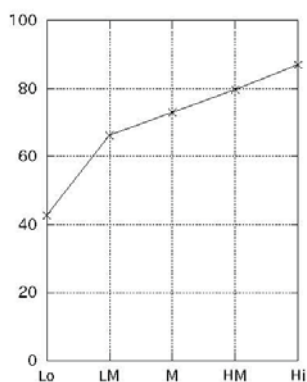
第3問

配点 20 点、平均 63.43%



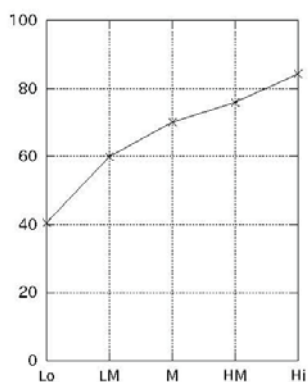
第4問

配点 20 点、平均 69.96%



第5問

配点 20 点、平均 66.45%

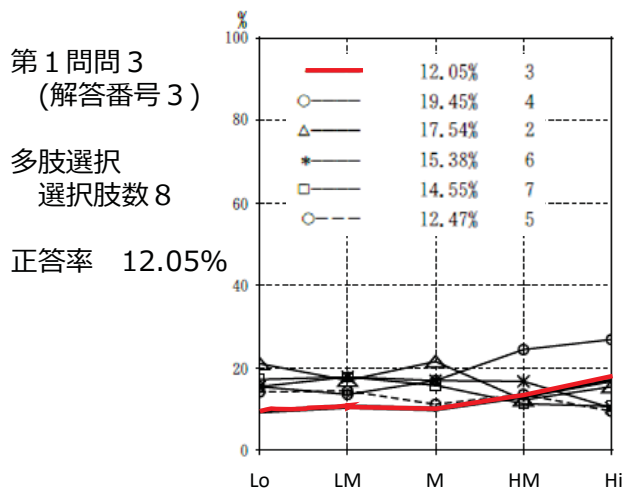


- 第1回試行調査の結果を踏まえ、第2回試行調査では、正答率や得点分布のバランスに配慮した各設問の難易度や、問いかけ方の工夫や問題の分量（文章量、使用する資料数）を検討し、問題全体で問いたい知識・技能と思考力・判断力・表現力のバランスを図りつつ、問題冊子のページ数を40ページから34ページに減じた。問題の場面設定では、授業において生徒が学習する場面の設定は、第1回試行調査では大問3問、中問1問の計4問であったが、第2回試行調査では大問2問として、問題作成方針を踏まえながら資料やデータ等をもとに考察する場面とのバランスに配慮した。
- 平均得点率（平均正答率）は5割程度を越えた。標準偏差は15.51であり、受検者数や目標平均得点率が異なるため、センター試験と一概に比較はできないものの、センター試験の過去3年間の標準偏差は14.11～16.33と、ほぼ同程度となっている。しかし、目標平均得点率が約5割であることを踏まえると、50点以下の受検者は約23%となっており、Lo群～M群の識別力がやや低かったと考えられる。なお、無解答率は全体的に低かった。各大問の五分位図からは、多様な学力層を識別できていることが伺えるが、M群で得点率が7割を超えている大問もあり、このことが全体の得点率を高める要因になったものと考えられる。設問ごとの正答率においても5割を超える正答率問題が全体の7割となっていることから、正答率が低～中程度の問題数が少なかったと考えられる。
- 以上を踏まえ、多様な学力層を識別するためには、正答率が8割以上の問題を減らしつつ3割～5割の問題を増やし、特定のところに偏ることなく、様々な難易度の問題を含む試験問題としていくことが必要である。

2. 小問ごとの分析

- 各小問と、当該小問を除いた全問題との間のピアソンの積率相関係数を算出し、さらに、五分位図により分析を行った。また、新たな出題形式等についても分析を行った。
- （1）五分位図におけるLo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の問題
2問あり、そのうち1問の五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。
- （2）その他
以下の項目について、五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。
 - ① 正答率が低かった問題（2問）
 - ② 正答率が高かった問題（1問）
 - ③ 高校における指導改善が望まれる問題（4問）
 - ・ GISを用いた問題
 - ・ 段階的な思考プロセスを問う問題
 - ・ 仮想立地に関する問題
 - ・ 模式図を活用した問題

(1) 五分位図におけるLo群とHi群の差が20ポイント以下の問題

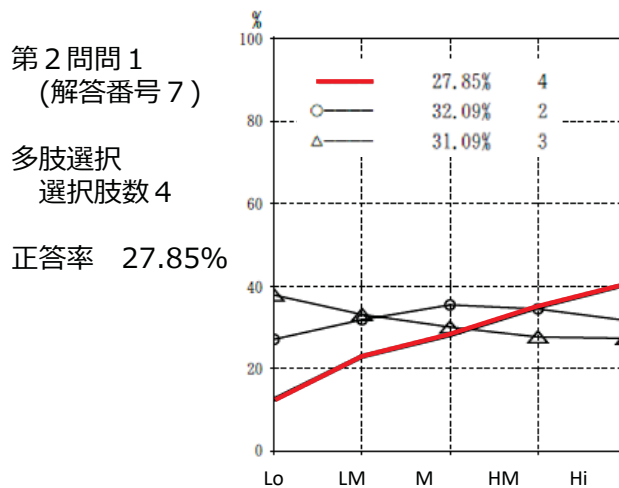


Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の理由として、以下が考えられる。

降水量の季節変化から、南アメリカ大陸の気候を考えさせる設問である。3つの下線の正誤を問う8択の問題で、かつ降水の要因と地点の位置との両方を正しく判断することを求めた。しかし、こうした設問の意図が十分に伝わらず、正答率および識別力の低さにつながったと考えられる。

(2) その他

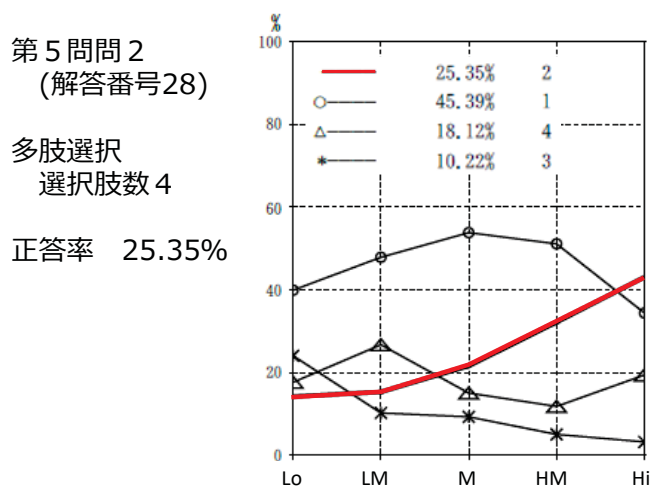
①正答率が低かった問題



Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以上あるものの、正答率および識別力はともに低い。

正答率が低くなった理由として、世界におけるエネルギー資源の偏在への理解を問うたが、「埋蔵量」や「可採年数」といった題材が、高校現場で一般に学習する生産量や供給量に比べてなじみが薄く、類推も難しかったと考えられる。

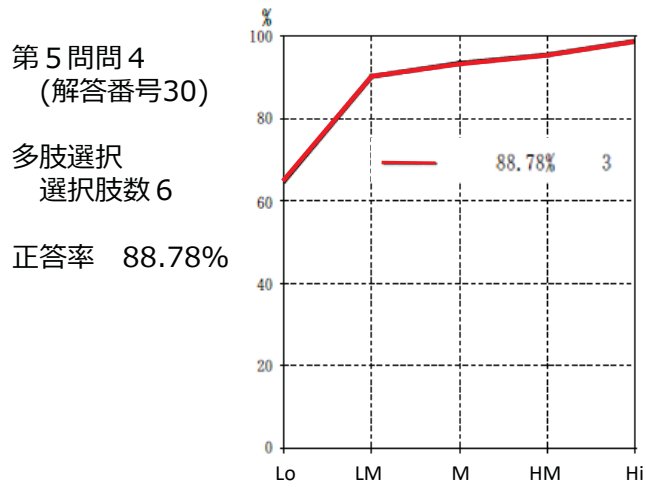
②正答率が高かった問題



正答率25.35%と2番目に低い問題で、Hi群以外では誤答の選択肢1を選択している。

地図を読み取る技能をベースに新旧地形図で地域の変遷を考察する力を問うた設問であった。

正答率が低くなった理由として、選択肢1のみ旧版地形図からの読み取りであったことや、旧版地形図の印刷がやや読みづかったこと、会話文と地図が表裏のページに印刷されていたことなどが考えられる。



地域調査の問題では、地域の課題を見出し、解決策を考えていくことが望まれる。そのため、収集できる資料から仮説を導き出し、地域課題について俯瞰的に思考する力を判別する設問を作成した。

正答率が高くなった理由としては、仮説と資料を結びつけることが容易であったことが推測できる。

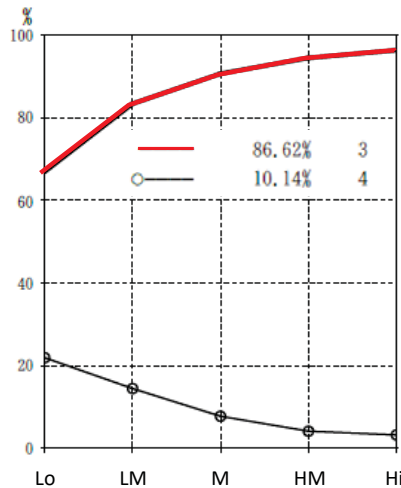
③高校における指導改善が望まれる問題

・GISを用いた問題

第1問問1 (解答番号1)

多肢選択
選択肢数4

正答率 86.62%



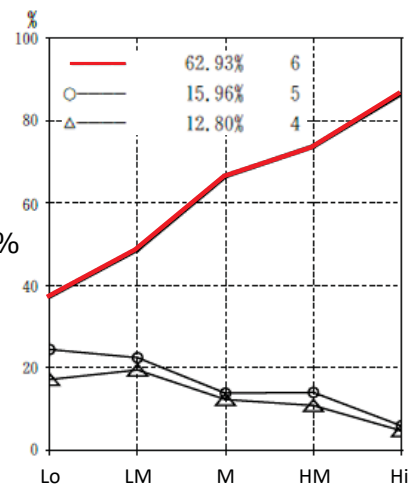
GIS（地理情報システム）の活用を意識して作問を行なった。この設問では、GISで作成した地形の陰影図と3D化した鳥瞰図を提示し、複数の資料を読み取り、多面的・多角的な視点から海岸地形の経過や成因を考察させている。
しかし、図の単純な読み取りと、文章を読み取ることで容易に正答を導けるものの組合せとなり、正答率が86.62%と高くなった。

・段階的な思考プロセスを問う問題

第1問問2 (解答番号2)

多肢選択
選択肢数6

正答率 62.93%



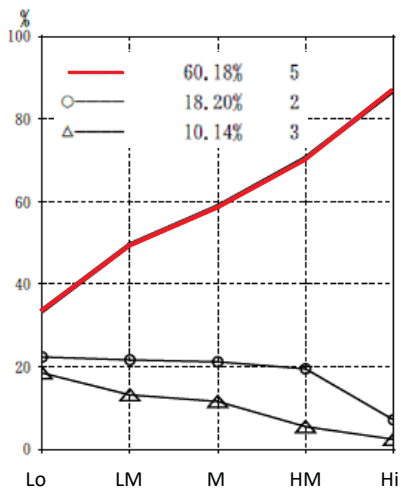
地理的事象についての深い思考力を問うために、世界全体でのプレート境界の位置についての知識から図が示す場所を考え、さらに、図中での地震の震源と火山との位置関係を考察することで正答に至る設問とした。
正答率が62.93%、Lo群とHi群の正答率の差が40ポイントを超えており、知識と考察という段階的な思考プロセスを問う問題として識別力が高く、有効であると考えられる。

・仮想立地に関する問題

第2問問3 (解答番号9)

多肢選択
選択肢数6

正答率 60.18%



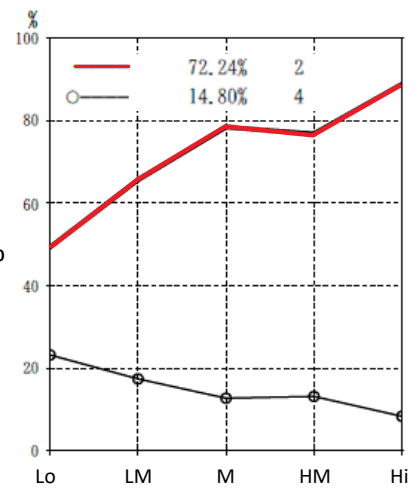
様々な条件を付した仮想地域を設定し、工業立地に関わる要因について概念的な理解ができているかを問うた設問である。正答率が60.18%であり、Lo群とHi群の差が50ポイントほどと識別力も高かった。
仮想地域を題材にした設問は、教科書の記述や用語など単純な知識・理解だけでは解答に結びつかず、学んだ知識を踏まえ思考力を活用して判別するものとなり、有効であると考えられる。

・模式図を活用した問題

第3問問5 (解答番号17)

多肢選択
選択肢数4

正答率 : 72.24%



資料（地図および表）を踏まえて、トウモロコシの正しい伝播経路を、原産地の歴史的背景や他の作物の伝播経路との関連性から推察する問題である。
原産地に関する知識や他の農産物の伝播経路からの類推が容易であったため正答率はやや高かったが、Lo群とHi群との差が40ポイントほどと識別力は有している。

3. 有識者コメントの概要 大学関係者 5 名、高校関係者 3 名

○各問いの問題のねらいや、主に問いたい資質・能力が反映されていたかどうか

①評価すべき点

- ・「今回の問題のねらい」で示されているような「主に問いたい資質・能力」が適切に問いにあらわれている。全体的に熟慮された設問であり、難易度のバランスは配慮されている。
- ・豊富な資料を多用しながら、受験生に多面的・多角的に考察させながら解答に至らせる問題が多い。
- ・主として知識・技能を問う問題では、現行大学入試センター試験における作問姿勢が受け継がれていて、一問一答の知識ではなく、事象についての深い理解や複数の知識を組み合わせることで正解に達するような工夫がされている。

②改善すべき点

- ・系統地理であろうが、地誌であろうが、資質・能力を問いたいのであれば、探究的な思考・判断のプロセスを組み込むべきではないか。形式的には「大問」として 1 つにまとまっているように見えるが、実際には、独立したこま切れの問いの寄せ集めになっている傾向にある。
- ・問題のねらいや、問いたい資質・能力を意識した作問となっているものの、正解とされる選択肢が極めて常識的であったり、文脈の中で「国語的」に判断できる問題が見られ、改善が必要である。
- ・知識や図表に基づいて考察できる問題が多い一方で、結果的に知識だけを聞く問題も少なくないように思われる。

○科目の問題作成の方向性を踏まえ、題材の選定や問題の場面設定、出題形式等は適切だったかどうか

①評価すべき点

- ・実空間、実際の景観や地域の実態を反映した題材が多く用いられている。
- ・GIS、リモートセンシングなどのデータと自然地理を連携させている点、現代社会の問題としての地球温暖化に関わり二酸化炭素排出量などの設問もあり基礎力のみならず応用力を問うている。観光と地域活性化を繋ぐ多角的視点で地域を見る目を問う設問なども評価できる。

- ・Google Earthは、センター試験では使用されてこなかったが、それを試行問題に登用した点について評価している。
- ・題材の設定や問題の場面設定は、具体的な思考の場面が豊富で実際の学習の場面をイメージさせる設定が多く工夫されていた。
- ・次期高等学校学習指導要領地理科目で求められる「主体的・対話的、深い学び」につながる学習活動であり、この点でも適切な場面設定である。

②改善すべき点

- ・学習指導要領に縛られている事情は理解できるが、生徒の探究学習を想定したリード文や問題文を読むのに時間がかかり、もっと簡素化してほしい。
- ・第 2 問冒頭の模式図は、横の関係性と縦の関係性がどこまで正確に示されているかわからないなど、モデル化した図としては工夫が必要だと思われる。
- ・第 4 問の地誌の問題では、オセアニアに関するテーマを設定した上で探究を行う過程を問題とすると統一感がでる。

○各科目の問題構成、設問数、内容、難易度等のバランスは適切だったかどうか

①評価すべき点

- ・全体的に熟慮された設問であり、難易度のバランスは配慮されている。
- ・設問数は適切である。難易度については、やや「易」な問題も目立つ。しかし、相対的には、時間内に解答できる量と質に収まっている。
- ・ローカル地域に関する出題については、地理的技能から空間的思考力まで幅広い問題構成になっている。
- ・問題構成、試験時間と設問数とのバランス、内容のバランス、いずれも概ね適切である。
- ・資料を活用する問題が多いため、設問数を現行のセンター試験より減らし適切に設定されている。

②改善すべき点

- ・考察に比べて、構想（選択、判断する）に関する資質・能力を評価する設問が少ない。
- ・どう考えて解答を導いたらいいのかわかりにくい難しい問題や常識的な知識を問う問題もある。

4. 共通テスト実施に向けた方向性

平均得点率（平均正答率）は目標の約5割を上回った。大学入学共通テストに向けては、今回の試行調査を11月に実施していることや、高校3年生の受検者が約62%であることなどにより、実際の大学入試に向けて学力が伸びる可能性があることを考慮しつつ、さらに正答率や得点分布のバランスに配慮した難易度の検討を行う。また、問いかけ方の工夫や問題の分量（文章量、使用する資料の種類等）、問題全体で問いたい知識・技能と思考力・判断力・表現力のバランスを検討する必要がある。

今回の試行調査では、8割以上の正答率の問題が5問あるが、3割～4割の正答率の問題がみられなかった。そのため、Lo～M群の識別力がやや低い試験となった。平均正答率が高かった要因として、有識者からは与えられた情報から容易に判断できる問題や、深い思考を必要とせずに解ける問題などについて指摘されている。そのため高等学校における学習を通して身に付けた知識・技能を踏まえ、思考力・判断力・表現力をはかる問題の作成を心掛け、正答率が極端に高い問題や低い問題をなくしていきたい。

場面設定をとりいれた「探究の過程を重視した問題」に関して、第2回試行調査では「学校の文化祭で生徒が発表するといった学習活動を想定した場面設定」という工夫を行った。しかし、有識者からはリード文や問題文を読むのに時間がかかる等といった指摘がなされている。大学入学共通テストに向けては、問題設定が複雑となったり、会話文等による文章量が増えたりすることがないように十分に配慮する必要がある。

【現代社会】

1. 得点分布等に基づく分析

《受検者数等》

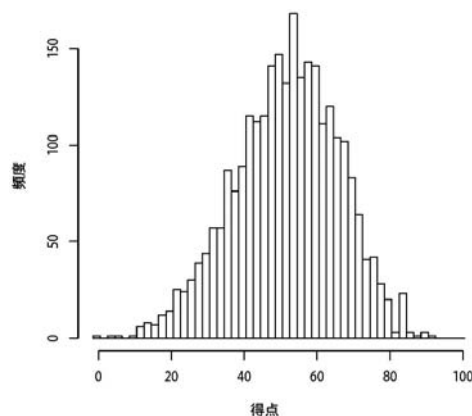
全受検者数 2,677人
 高校3年生 2,021人 (75.5%)
 高校2年生 656人 (24.5%)

《問題構成や設問数》

大問数 6題
 設問数 マーク式 31問

《得点の分布図等》

現代社会 (100点満点)



平均得点率 51.63% (51.77%)
 平均点 51.63点 (51.77点)
 標準偏差 14.32
 最高点 91点
 最低点 0点

※ 平均得点率及び平均点の括弧内は高校3年生のみを対象。

《設問正答率幹葉図》

平均正答率区間	(設問数)	設問番号	(部分正答等)
95%≧	(0)		
90%~95%	(0)		
85%~90%	(2)	1, 13	
80%~85%	(1)	(17,19-20)*	
75%~80%	(2)	16, 28	
70%~75%	(3)	3, 6, 31	
65%~70%	(2)	8, 33	(17,19-20)[2,23]
60%~65%	(3)	2, 5, 15	
55%~60%	(3)	(17,18)*, 23, 25	
50%~55%	(1)	26	
45%~50%	(2)	30, 32	
40%~45%	(0)		(17,18)[2,2]
35%~40%	(3)	11, 27, 29	
30%~35%	(2)	10, 21	
25%~30%	(3)	9, 12, 24	
20%~25%	(1)	22	
15%~20%	(1)	7	(17,18)[1,1]
10%~15%	(2)	4, 14	(17,19-20)[1,14]
5%~10%	(0)		
<5%	(0)		

※ 設問番号は、解答番号を示す。

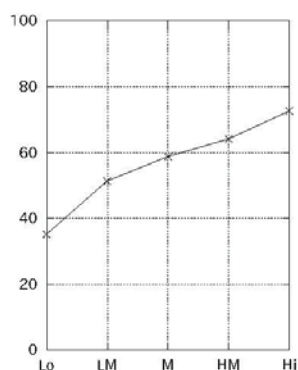
設問番号の後ろの[]内の文字列は選択肢を示す。

* は部分正答または正答の組合せが複数あるものを示す。

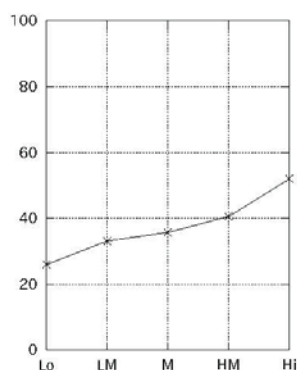
平均正答率 51.82%

《大問の五分位図》

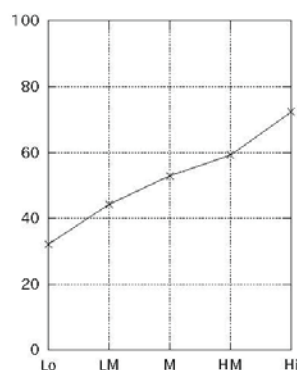
第1問
 配点 31点、平均 56.44%



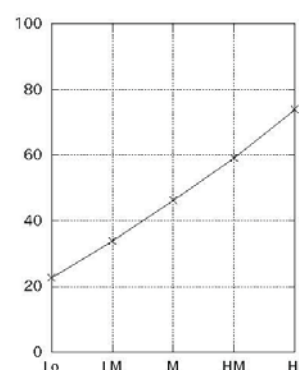
第2問
 配点 16点、平均 37.48%



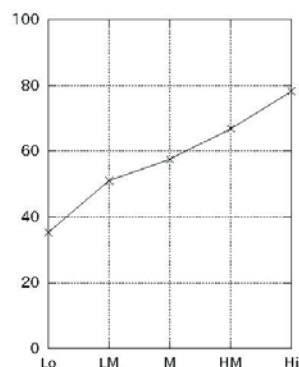
第3問
 配点 16点、平均 52.20%



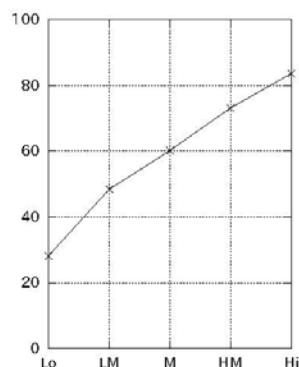
第4問
 配点 16点、平均 47.26%



第5問
 配点 13点、平均 57.85%



第6問
 配点 8点、平均 58.78%

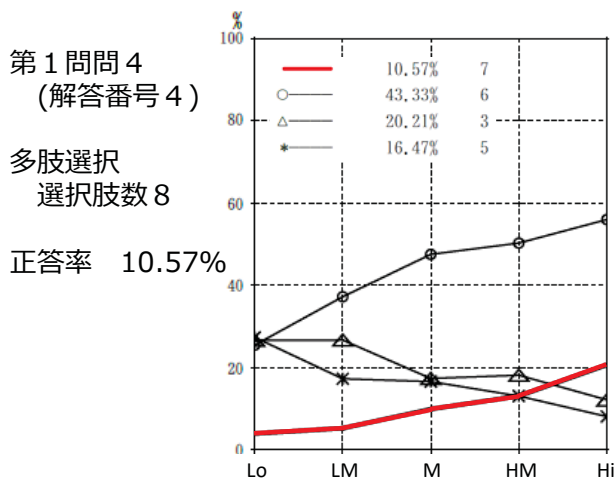


- 平均得点率は5割程度であり、問題の全体の難易度や配点（3～4点）については概ね妥当であったと考えられる。目標平均得点率が異なることもあり、センター試験と一概に比較はできないものの、標準偏差は14.32であり、センター試験の過去3年間の標準偏差16.60～17.72と比較すると、散らばりがやや小さかった。試験問題全体の難易度のバランスにさらに配慮する必要がある。
- 第1回試行調査の分析を踏まえ、設問数を23問から31問と増加させた。平均得点率が5割程度であったことや無解答率が低かったことから設問数は概ね適当であったと考えられる。
- 各大問の五分位図からは、多様な学力層を識別できていることが伺える。なお、第1問と第2問において、Hi群とLo群の差が他の大問と比べて差がやや小さくなっている。
- 無解答率は全体として高くなかった。第1回試行調査と比較して設問数を23問から31問と増加させたが、最大となる無解答率は3%未満であり、大きな変化はなかった。

2. 小問ごとの分析

- 各小問と、当該小問を除いた全問題との間のピアソンの積率相関係数を算出し、さらに、五分位図により分析を行った。また、新たな出題形式等についても分析を行った。
- （1）五分位図におけるLo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の問題
4問あり、五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。
- （2）新しい出題形式（解答が前問の解答と連動し正答の組み合わせが複数ある問題）
1問出題。五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。
- （3）その他
 - ①正答率が低い問題
 - ②資料の読み取りに基づいて思考力・判断力・表現力を問う問題
 - ③課題探究における思考力・判断力・表現力を問う問題

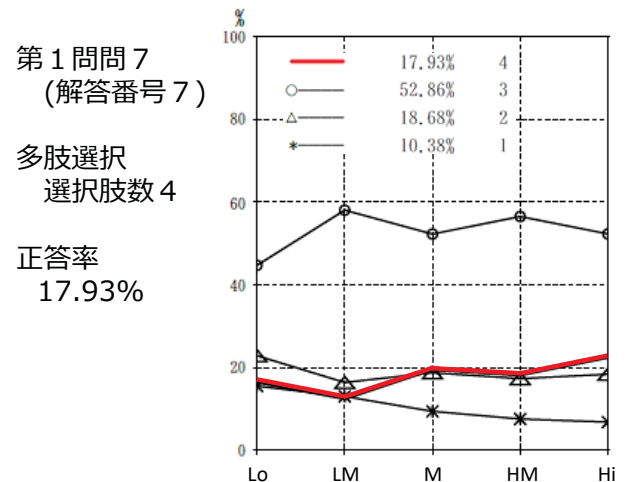
(1) 五分位図におけるLo群とHi群の差が20ポイント以下の問題



青年期の始まりに関する様々な考え方をもとに適切に説明したものかどうかを判断する問題である。

Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の理由として、以下が考えられる。

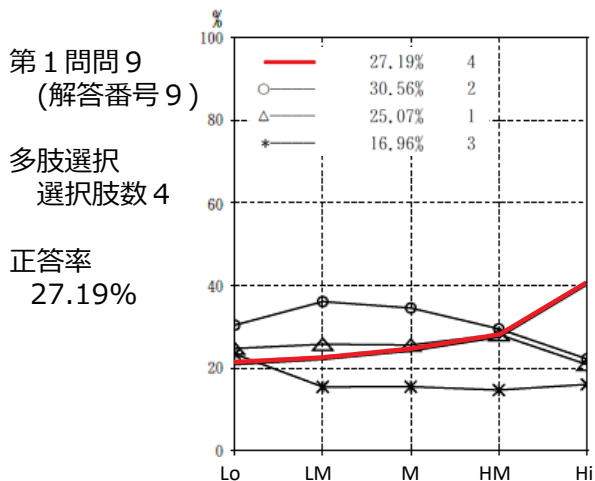
ア～ウの三つの文章について、その正誤を八つの選択肢から選ばせる出題形式や、ア～ウの三つの文章について、全て正しいとする正答の選択肢を選ばせる出題形式が影響した可能性がある。



資料で示されたラッセルの幸福についての考え方の特徴を考察する問題である。

Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の理由として、以下が考えられる。

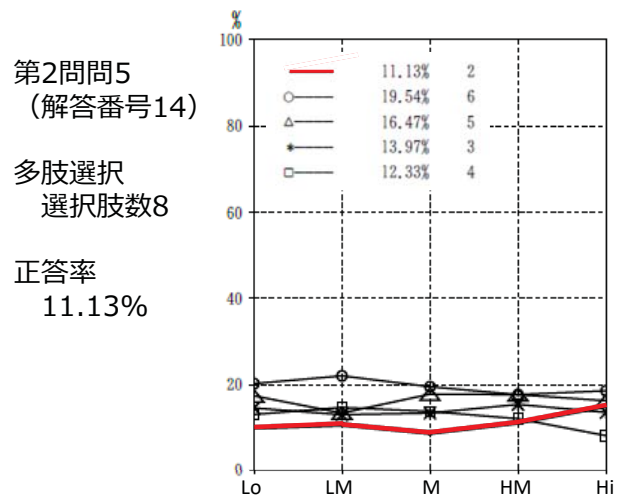
ラッセルの考え方をういて考察するという問題の構成について理解することが必要とされたため、受検者にとって新しい出題傾向となり、難易度が高かった可能性がある。



大衆社会の特徴を分析したアドルノの主張や思想の特徴をとらえる問題である。

Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の理由として、以下が考えられる。

権威主義的パーソナリティを説いたアドルノについての理解を必要としたことが影響した可能性がある。



国際関係に関する知識を前提として、国際経済と国際政治を中心に国際社会の動向をとらえる問題である。

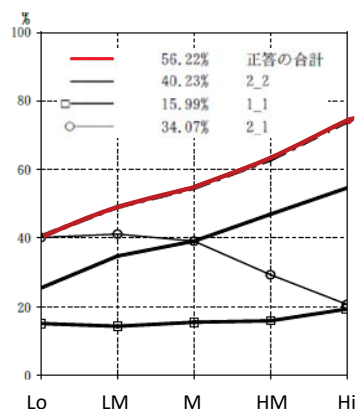
Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の理由として、以下が考えられる。

国際関係の学習が不十分な受検者が多かったことや、国際政治と国際経済の両方の動向を正確に把握しておく必要があったことが影響した可能性がある。

(2) 新しい出題形式等
解答が前問の解答と連動する問題

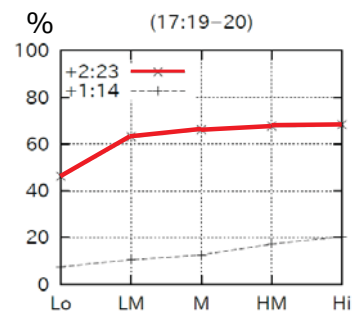
第3問問3(1)
(解答番号17,18)

多肢選択
選択肢数2
正答率 56.22%



第3問問3(2)
(解答番号17,19-20)

多肢選択
選択肢数4
正答率 82.11%



一院制と二院制のどちらが優れているか、という問いに自分が支持する立場を選び、その主張が現実の制度では、どこに採り入れられているかを解答する問題である。
正答となる1-1と2-2の組合せを選択した割合とみると、Lo群からHi群へ右肩上がりとなっており、かつLo群とHi群の正答率の差は20ポイント以上ある。

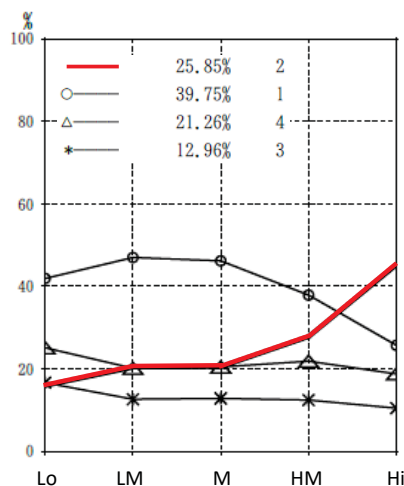
一院制と二院制のどちらが優れているか、という問いに自分が支持する立場を選び、その主張の根拠を選択する問題である。
正答率の合計は80%を越えている。

一院制が優れているという立場で解答した割合と二院制が優れているという立場で解答した割合には大きな差があった。一院制と二院制については、受検者が解答しやすい選択肢を選んだ可能性も考えられる。解答が前問の解答と連動する問題については、素材や選択肢の文言等について工夫改善が必要である。

(3) その他
①正答率が低い問題

第2問問3
(解答番号12)

多肢選択
選択肢数4
正答率 25.85%



中央省庁と公務員に関する法制度の現状をとらえる問題である。

Hi群で約45%、Lo群で約16%であり、その正答率の差は29ポイント程度である。

全体の正答率が低い理由として、「副大臣」という知識のみならず、それが「国会審議活性化法」の施行以降に設けられたという理解を必要としたことが影響した可能性がある。

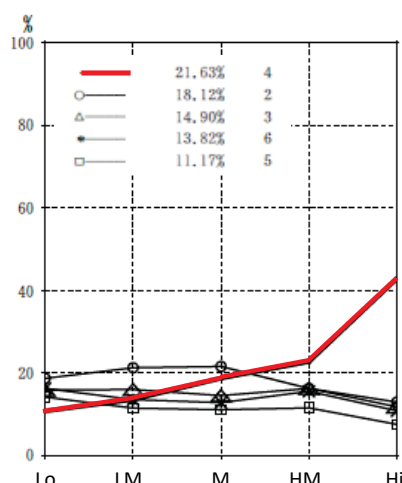
HM群からHi群にかけて正答率が上昇することから、上位群の識別には効果があったと考えられる。

②資料の読み取りに基づいて思考力・判断力・表現力を問う問題

第3問問5
(解答番号22)

多肢選択
選択肢数8

正答率
21.63%



在外国民の選挙権に関する判決についての知識を前提として、問題文で示された考え方の枠組みにあわせて判決文の一部である選択肢を並べ替える問題である。

論理的に一貫した判断を表現する力を問うものであり、判決文の暗記を求めるものではない。

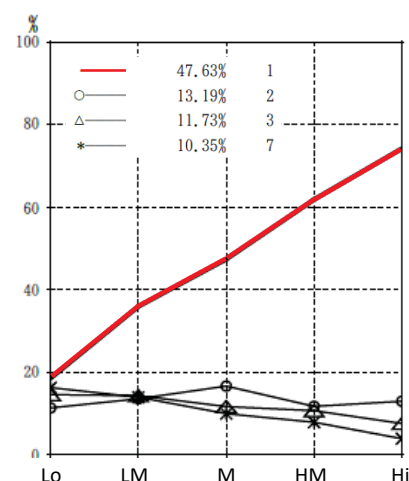
HM群からHi群にかけて正答率が上昇することから、上位群の識別には効果があったと考えられる。

③課題探究における思考力・判断力・表現力を問う問題

第6問問1
(解答番号32)

多肢選択
選択肢数9

正答率
47.63%



持続可能な発展や「共に生きる社会」の形成に参画するという観点から、「食」をめぐる社会問題を発見するために必要な資料を判断する問題である。

正答率は、Hi群で約75%、Lo群で約20%であり、その差は55ポイント程度であるため、十分な識別力のある問題である。

3. 有識者のコメントの概要

大学教員4名、高校教員等3名

○各問いの問題のねらいや、主に問いたい資質・能力が反映されていたかどうか

①評価すべき点

- ・全体として、思考力・判断力・表現力等を問うという問題のねらいを反映した良問が多い。
- ・概念や理論を活用して意味をとらえる問題では、思考力や判断力のベースとなる基本的な知識をしっかり学習してきた受検者が解きやすい問題になっている。

②改善すべき点

- ・全体として文字数が多いため、問題のねらいに基づき、提示する資料等を精選する必要がある。

○科目の問題作成の方向性を踏まえ、題材の選定や問題の場面設定、出題形式等は適切だったかどうか

①評価すべき点

- ・学校新聞を題材とした場面設定や、課題探究的な活動を題材とした場面設定は、受検者に主体的に考えることを促すとともに、高校の授業改善へのメッセージとなっている。

②改善すべき点

- ・日常生活や社会生活に関連する場面設定においては、場面設定の認知について、受検者に過度な負荷をかけることのないようにする必要がある。

○各科目の問題構成、設問数、内容、難易度等のバランスは適切だったかどうか

①評価すべき点

- ・設問数、出題分野、難易度について、バランスのとれた適切な出題となっている。

②改善すべき点

- ・単純な出題形式になっている知識・技能を問う問題については、出題の在り方をさらに工夫改善する必要がある。

4. 共通テストの実施に向けた方向性

- 今回の試行調査において、問題構成、設問数、内容、難易度等の一定のバランスはとれていたと考えられる。
- 大学入学共通テストの問題作成に向け、多様な学力層を識別するため、正答率が中程度の設問を増やすなど、試験問題全体の難易度のバランスについて引き続き配慮し検討していく。その際、問いかけ方や問題の分量（設問数、文章量、使用する資料の種類等）、身につけた知識・技能を活用して思考力・判断力・表現力等を問う問題を出題するなど、問いたい知識・技能と思考力・判断力・表現力の問題全体のバランスを工夫する。また、説得的に論証を展開する方法を理解し、表現する力を問う出題の工夫を行うことが望ましい。特に、学校の授業等における生徒の学習活動を想定した場面を設定する場合には、問題設定が過度に複雑になったり、文章量が増えたりすることがないように留意する。

【倫理】

1. 得点分布等に基づく分析

《受検者数等》

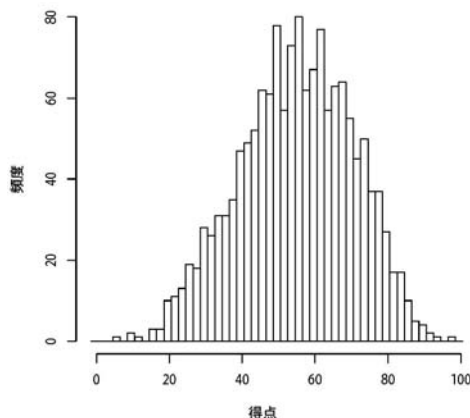
全受検者数 1,489人
 高校3年生 1,264人 (84.9%)
 高校2年生 225人 (15.1%)

《問題構成や設問数》

大問数 4題
 設問数 マーク式 29問

《得点の分布図等》

倫理 (100点満点)



平均得点率 54.85% (55.89%)
 平均点 54.85点 (55.89点)
 標準偏差 15.58
 最高点 97点
 最低点 6点

※ 平均得点率及び平均点の括弧内は高校3年生のみを対象。

《設問正答率幹葉図》

平均正答率区間	(設問数)	設問番号	(部分正答等)
95%≧	(0)		
90%～95%	(0)		
85%～90%	(1)	1	
80%～85%	(0)		
75%～80%	(3)	2, 6, 20	
70%～75%	(3)	3, 19, 35	
65%～70%	(2)	21, 25	
60%～65%	(1)	33	
55%～60%	(3)	(7,8-10)*, (12,13)*, 34	
50%～55%	(2)	14, 22	
45%～50%	(5)	4, (15-16)[14]*, (27-28), 31, (37-38)[14]*	(15-16)[4] (7,8-10)[4,23] (23-24)[2], (23-24)[3]
40%～45%	(0)		
35%～40%	(2)	17, 18	
30%～35%	(2)	26, 32	
25%～30%	(3)	5, (29-30), 36	
20%～25%	(2)	11, (23-24)[23]*	(12,13)[3,1] (12,13)[4,2], (37-38)[1], (37-38)[4]
15%～20%	(0)		
10%～15%	(0)		
5%～10%	(0)		
<5%	(0)		(7,8-10)[3,214], (12,13)[2,4] (7,8-10)[1,13], (12,13)[1,3], (15-16)[1] (7,8-10)[2,342]

※ 設問番号は、解答番号を示す。

設問番号の後ろの[]内の文字列は選択肢を示す。

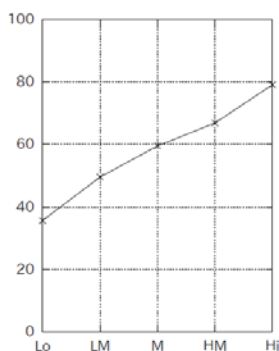
* は部分正答または正答の組合せが複数あるものを示す。

平均正答率 52.32%

《大問の五分位図》

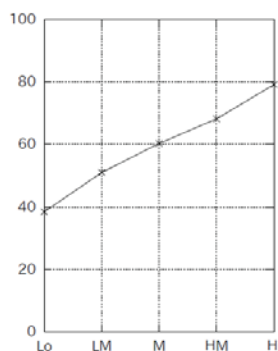
第1問

配点 34点、平均 58.21%



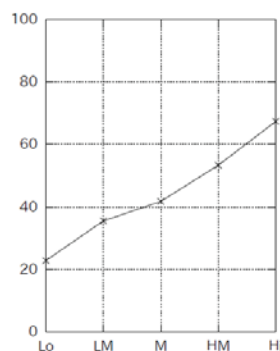
第2問

配点 24点、平均 59.51%



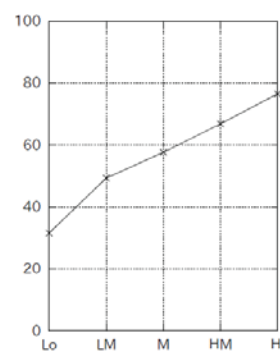
第3問

配点 24点、平均 44.26%



第4問

配点 18点、平均 56.44%



- 平均得点率は5割程度であり、問題の難易度や配点（2点～4点）については概ね妥当であったと考えられる。目標平均得点率が異なるため、センター試験と一概に比較はできないものの、標準偏差は15.58であり、センター試験の過去3年間の標準偏差15.42～16.05と比較すると、得点分布の散らばりは妥当なものと考えられる。
- 各大問の五分位図からは、多様な学力層を識別していることが伺える。なお、いずれの大問においてもHi群の得点率が8割未満となっているが、全ての大問についてHi群とLo群の得点率の差は40ポイントを超えており、問題全体としてはバランスがとれていると考えられる。
- 無解答率は全体として高くなかった。

2. 小問ごとの分析

- 各小問と、当該小問を除いた全問題との間のピアソンの積率相関係数を算出し、さらに、五分位図により分析を行った。また、新たな出題形式等についても分析を行った。

- (1) 五分位図におけるLo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の問題なし
- (2) 新しい出題形式（解答が前問の解答と連動し正答の組み合わせが複数ある問題）2問出題。五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。
- (3) その他
 - ① 正答率が低い問題
 - ② 当てはまる選択肢を全て選択する問題
 - ③ 課題探究的な学習を題材とした問題

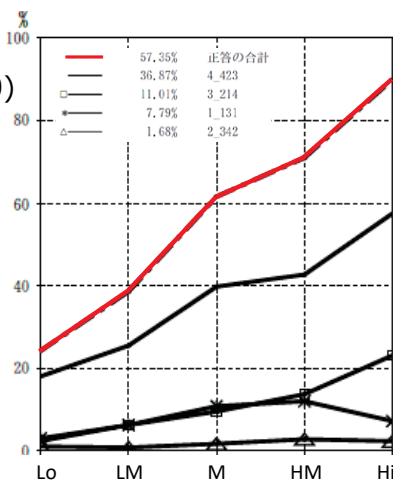
(2) 新しい出題形式

解答が前問の解答と連動し正答の組み合わせが複数ある問題

第1問C問7
(解答番号7-10)

多肢選択
選択肢数4

正答率 57.35%



天国、空、非攻、梵我一如について、思想の特色や背景などの相互の関連性について考察する問題である。

Hi群で約90%、Lo群で約25%であり、その正答率の差は65ポイント程度である。

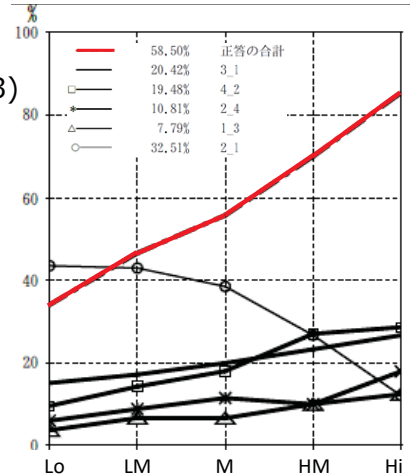
四つの正解パターンがあったが、それぞれのパターンの選択率の差は50ポイント程度である。各選択肢の難易度が高いものと易しいものがあった可能性があり、適切な難易度の組合せを工夫する必要がある。

解答が前問の解答と連動する問題については、作問のねらいを踏まえた出題の仕方や選択肢の文言を工夫する必要があると考えられる。

第1問C問9
(解答番号12-13)

多肢選択
選択肢数4

正答率 58.50%



愛に着目して、選択肢に示された考え方をとらえ、その考え方と資料との関連性について考察する問題である。

Hi群で約85%、Lo群で約35%であり、その正答率の差は50ポイント程度である。

四つの正解パターンがあったが、それぞれのパターンの選択率の差は37ポイント程度である。各選択肢の難易度が高いものと易しいものがあった可能性があり、適切な難易度の組合せを工夫する必要がある。

解答が前問の解答と連動する問題については、作問のねらいを踏まえた出題の仕方や選択肢の文言を工夫する必要があると考えられる。

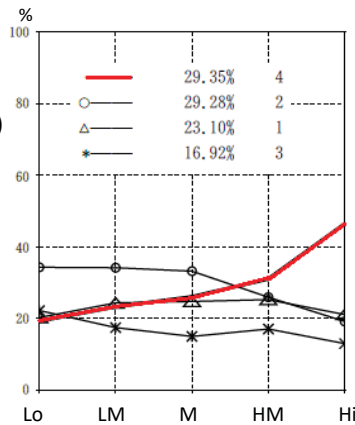
(3) その他

①正答率が低い問題

第4問B問4
(解答番号36)

多肢選択
選択肢数4

正答率
29.35%



社会生活や日常生活における科学技術の活用についての倫理的課題をとらえ、その解決に向けて考察する問題である。

Hi群で約46%、Lo群で約19%であり、その正答率の差は27ポイント程度である。

全体の正答率が低い理由として、課題探究の成果発表のための原稿の文章量が多く、問題の場面設定の認知にかかる負荷がやや大きかった可能性が考えられる。

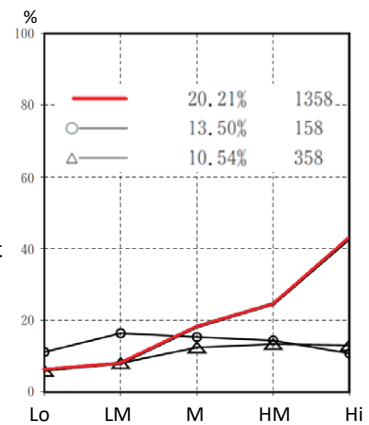
HM群からHi群にかけて正答率が上昇することから、上位層の識別には効果があったと考えられる。

②当てはまる選択肢を全て選択する問題

第1問C問8
(解答番号11)

多肢選択
選択肢数8
全て選ぶ 完答
(正答四つ)

正答率 20.21%



ユダヤ教、キリスト教、イスラームの三つの宗教に共通する特色をとらえる問題である。

Hi群で約43%、Lo群で約6%であり、その正答率の差は37ポイント程度である。

全体の正答率が低い理由として、適切な選択肢を過不足無く四つ選んだ場合の正答率は20.21%であるが、正解を構成する選択肢ごとの正答率では、Lo群においても50%を超えている選択肢もあり、「当てはまるものを全て選べ」という新しい出題形式に加え、選択肢八つのうち四つを選択するという形式も結果に影響した可能性がある。

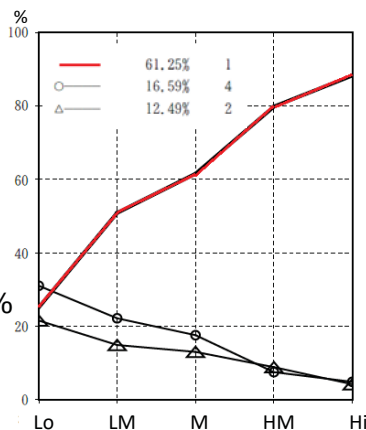
(3) その他

③課題探究的な学習を題材とした問題

第4問A問1
(解答番号33)

多肢選択
選択肢数4

正答率 61.25%



第4問Aは、生命倫理に関する課題探究を始める場面を設定し、生命観についての理解と、探究する課題と関連する概念や理論について論理的に思考する力を問うものである。

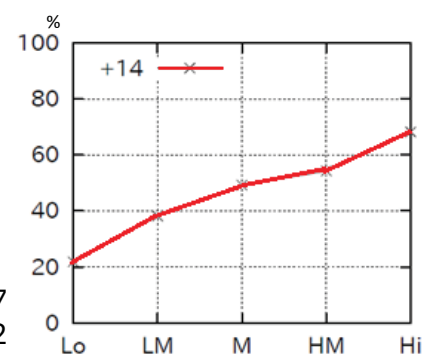
問1は、ロックの所有権の考え方について考察する力を判別する問題である。

正答率は、Hi群で約90%、Lo群で約25%であり、その差は65ポイント程度であるため、十分な識別力のある問題である。

第4問B問5
(解答番号37-38)

多肢選択
選択肢数5

正答率 全て正答46.47
部分正答38.22



第4問Bは、生命倫理に関する課題探究の成果をまとめて発表する場面を設定し、習得した倫理的な見方や考え方を活用して、論理的かつ多面的・多角的に考察する力、考察した過程や結果を理由や根拠に基づいてまとめる力を問うものである。

問5は、所有と自己決定の考え方をめぐる諸側面の理解を踏まえ、環境倫理における倫理的諸課題をとらえる際に留意すべき視点と関連づけて考察する力を判別する問題である。

正答率は、Hi群で約70%、Lo群で約20%であり、その差は50ポイント程度であるため、十分な識別力のある問題である。

3. 有識者のコメントの概要
大学教員4名、高校教員等3名

○各問いの問題のねらいや、主に問いたい資質・能力が反映されていたかどうか

①評価すべき点

- ・全体として、問題のねらいに基づいた良問が多い。
- ・原典資料や会話文等を手掛かりとして、先哲を含む他者との対話を通して、倫理的諸課題を深く吟味させる出題は、今後の高校における授業改善に大きな示唆を与えるものである。
- ・単純な知識を問うだけではなく、思想や概念の本質的理解や思考力・判断力・表現力等を問う問題が多い。

②改善すべき点

- ・思考力・判断力・表現力等を問う場面設定に工夫は見られるものの、個々の選択肢の文言については問題のねらいに基づいて、単純な知識のみを問うことがないよう、更に工夫改善する必要がある。

○科目の問題作成の方向性を踏まえ、題材の選定や問題の場面設定、出題形式等は適切だったかどうか

①評価すべき点

- ・日常生活における会話や、授業における学習活動、課題探究など具体的な場面を想定して、問題解決のプロセスを自ら選択しながら解答させることで、思考力・判断力・表現力等を適切に問うとともに、探究した過程や結果を適切にまとめる力や探究を深めていく力を問おうと創意工夫している。

②改善すべき点

- ・題材の選定や問題の場面設定、出題形式等については、出題のねらいや問いたい資質・能力に基づき、必要性を十分に考慮し、使用する資料やデータを精選し、適切な情報量で出題する必要がある。

○各科目の問題構成、設問数、内容、難易度等のバランスは適切だったかどうか

①評価すべき点

- ・全体として知識・技能を問う問題と、思考力・判断力・表現力等を問う問題がバランス良く出題されている。

②改善すべき点

- ・人名や言葉、思想などについて、重複して出題する際には、相互に影響がないよう留意する必要がある。

4. 共通テストの実施に向けた方向性

- 全体として概ね目標としていた難易度等であったと考えられる。
- 共通テストの問題作成に向け、今回の試行調査は11月に実施していることや、高校3年生の受検者が約85%であることなどにより、実際の大学入試に向けて学力が伸びる可能性があることを考慮しつつ、問いかけ方や選択肢の文言、問題の分量（文章量、使用する資料の種類等）を工夫する。特に、学校の授業等における生徒の学習活動を想定した場面を設定する場合には、問題設定が過度に複雑になったり、文章量が増えたりすることがないように留意する。

【政治・経済】

1. 得点分布等に基づく分析

《受検者数等》

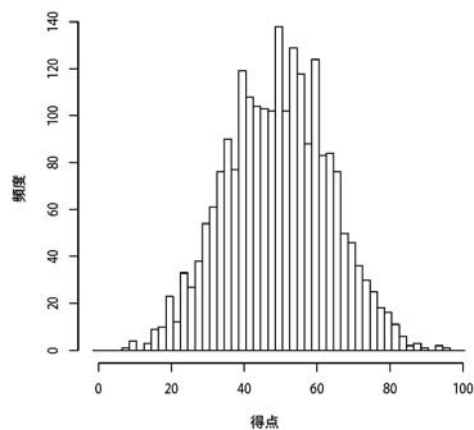
全受検者数 2,243人
 高校3年生 2,128人 (94.9%)
 高校2年生 115人 (5.1%)

《問題構成や設問数》

大問数 4題
 設問数 マーク式 30問

《得点の分布図等》

政治・経済 (100点満点)



平均得点率 49.27% (49.29%)
 平均点 49.27点 (49.29点)
 標準偏差 14.22
 最高点 96点
 最低点 7点

※ 平均得点率及び平均点の括弧内は高校3年生のみを対象。

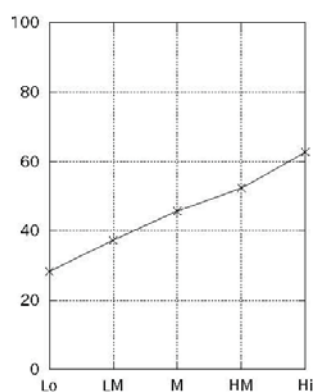
《設問正答率幹葉図》

平均正答率区間	(設問数)	設問番号
95%≧	(0)	
90%~95%	(0)	
85%~90%	(0)	
80%~85%	(1)	9
75%~80%	(3)	3, 4, 14
70%~75%	(0)	
65%~70%	(3)	15, 21, 22
60%~65%	(3)	10, 19, 23
55%~60%	(2)	1, 13
50%~55%	(3)	7, 20, 29
45%~50%	(2)	11, 27
40%~45%	(2)	24, 25
35%~40%	(2)	17, 18
30%~35%	(5)	2, 8, 12, 16, 28
25%~30%	(2)	26, 30
20%~25%	(1)	5
15%~20%	(0)	
10%~15%	(1)	6
5%~10%	(0)	
<5%	(0)	

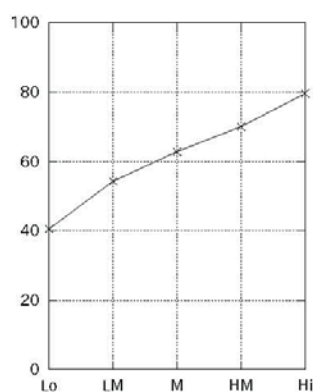
※ 設問番号は、解答番号を示す。

平均正答率 49.62%

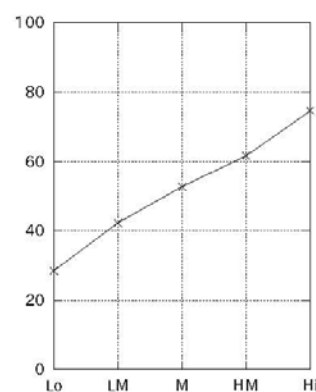
第1問
 配点 27点、平均 45.30%



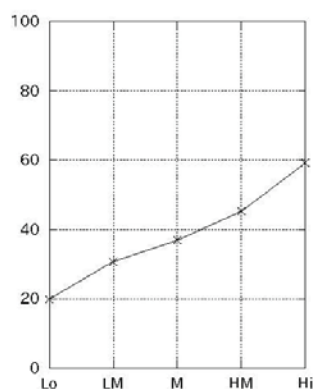
第2問
 配点 23点、平均 61.49%



第3問
 配点 27点、平均 52.01%



第4問
 配点 23点、平均 38.48%



- 平均得点率は49.27%で、5割程度に達しており、問題の難易度や配点（3～4点）については概ね妥当であったと考えられる。
- 目標平均得点率が異なるため、センター試験と一概に比較はできないものの、標準偏差は14.22であり、センター試験の過去3年間の標準偏差16.35～17.87と比較すると、得点分布の散らばりがやや小さい。
- 設問正答率幹葉図では、平均正答率が30%以上35%未満の問題が他の階層より多くなっている一方で、正答率が中程度の問題が少なくなっている。
- 各大問の五分位図からは、多様な学力層を識別できていることが伺える。なお、第1問において、Lo群とHi群の差が他の大問と比べて差がやや小さくなっている。

2. 小問ごとの分析

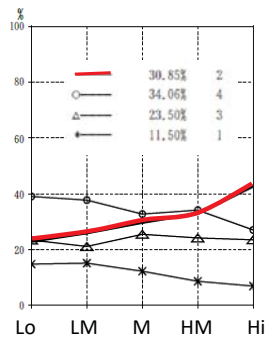
- 各小問と、当該小問を除いた全問題との間のピアソンの積率相関係数を算出し、さらに、五分位図により分析を行った。
 - （1）五分位図におけるLo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の問題
4問あり、五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。
 - （2）新しい出題形式等
出題なし
 - （3）その他
 - ① 正答率が低い問題
 - ② 資料の読み取りに基づいて、思考力・判断力・表現力を問う問題
 - ③ 課題の解決に向けて概念をモデル化する問題

(1) 五分位図におけるLo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の問題

第1問A問2
(解答番号2)

多肢選択
選択肢数4

正答率 30.85%

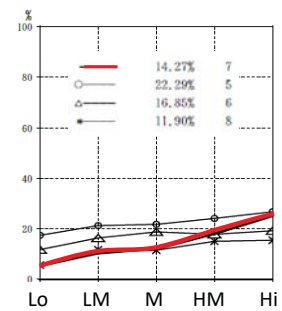


正答率の差が19.80ポイントであり、やや識別力に課題があった。条約の締結に必要な国会の承認の仕組みについて馴染みが薄かった可能性や、法律案の衆議院での再可決を通常の議決と混同したことが、選択肢の解答状況から推測される。

第1問B問6
(解答番号6)

多肢選択
選択肢数8

正答率 14.27%

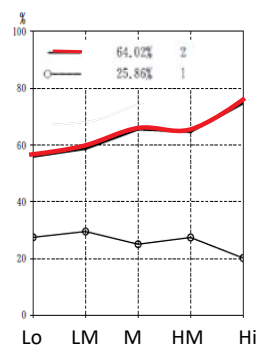


正答率が14.27%と低く、また、正答率の差が19.78ポイントであり、やや識別力に課題があった。地方自治体に関する複数の資料を読み取り、その特徴を考察する出題形式に戸惑ったことが推測される。誤答選択肢をみると【資料2】と【資料3】の判別に困難があった。

第2問問2
(解答番号10)

多肢選択
選択肢数4

正答率 64.02%

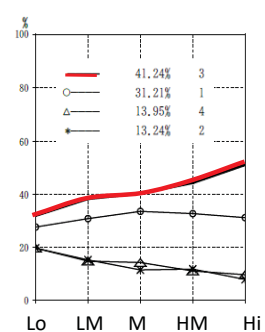


正答率の差が18.77ポイントであり、やや識別力に課題があった。労働基本権が実質的に保障している憲法上の権利について答える問題であったが、Lo群でも正答率が5割を超えていた。出題形式や選択肢を工夫するなどの検討が必要である。

第4問A問2
(解答番号25)

多肢選択
選択肢数4

正答率 41.24%



正答率の差が19.14ポイントであり、やや識別力に課題があった。また、Hi群の正答率も5割程度であり、やや難易度が高かった。国際経済の基本的な知識を基に、国際金融のトリレンマについて解説された資料を読み解く問題であったが、選択肢の表現を工夫するなどの検討が必要である。

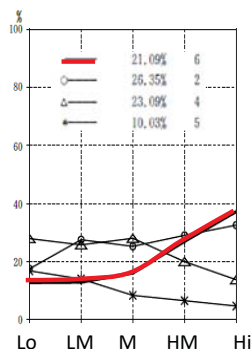
(3) その他

① 正答率が低い問題

第1問B問5
(解答番号5)

多肢選択
選択肢数7

正答率 21.09%



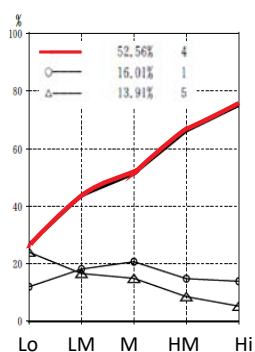
「政治・経済」の複数の分野で学んだ知識を生かして、与えられた資料を読み取る問題である。分野横断的な出題であることと、当てはまる選択肢を全て選択する問題形式だったため、正答率が低かったが、Lo群とHi群の正答率の差は20ポイント以上であり、一定の識別力はあったと考えられる。複数の分野にまたがる課題について問う場合には、出題の在り方に留意する必要がある。

② 資料の読み取りに基づいて、思考力・判断力・表現力を問う問題

第3問問5
(解答番号20)

多肢選択
選択肢数7

正答率 52.56%

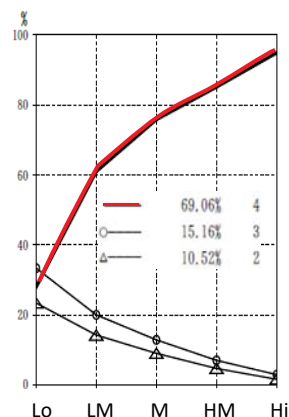


国の経済活動を測る指標を使って、そこから読み取れるものを判断する、統計の利活用に関する問題である。正答率はLo群からHi群に右肩上がりになっており、識別力も十分であった。

第3問問6
(解答番号21)

多肢選択
選択肢数4

正答率 69.06%

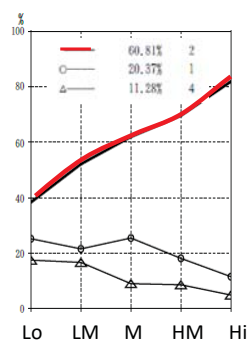


架空の国のジニ係数の変化や所得税率表を基に、社会の在り方について考察する問題である。正答率はLo群からHi群に右肩上がりになっており、識別力も十分であった。特にLo群からLM群での傾きが大きくなっており、Lo群からLM群での識別に寄与したと考えられる。

第3問問8
(解答番号23)

多肢選択
選択肢数 4

正答率 60.81%

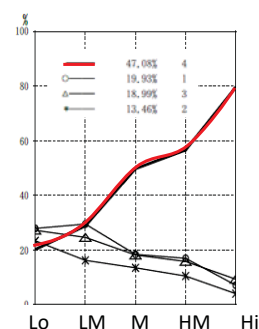


日本の年少人口、生産年齢人口、老年人口の推移を示す複数の資料から、日本の将来について考察する問題である。正答率はLo群からHi群に右肩上がりになっており、識別力も十分であった。

第4問B問4
(解答番号27)

多肢選択
選択肢数 4

正答率 47.08%

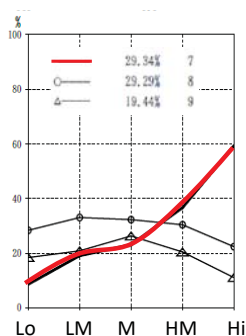


為替相場に関する資料を考察し、現代における経済事象の因果関係について考察する問題である。Lo群からHi群に右肩上がりになっているため、識別力は十分であった。

第4問B問7
(解答番号30)

多肢選択
選択肢数 9

正答率 29.34%



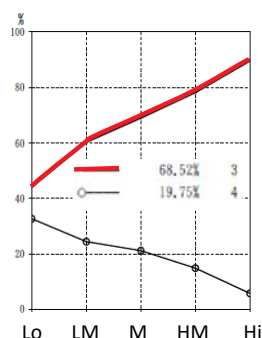
ODAに関する資料を考察し、主張の根拠となる資料を選択する問題である。正答率が29.34%であり、やや低くなっているが、Hi群の正答率はほぼ6割であり、M群からHi群の識別に寄与したと考えられる。資料を考察し、ある主張の根拠となるものを選択・判断させる場合には、出題の在り方について留意する必要がある。

③ 課題の解決に向けて概念をモデル化する問題

第2問問7
(解答番号15)

多肢選択
選択肢数 4

正答率
68.52%



汚染物資の規制についての考え方をモデル化した選択肢から、社会的コストが最も小さくなる政策を判断する問題である。正答率はLo群からHi群に右肩上がりになっており、識別力も十分であった。

3. 有識者コメントの概要

大学教員 4 名、高校関係者 3 名

○ 出題のねらいや、主に問いたい資質・能力が反映されていたかどうか

① 評価すべき点

- ・全体として、「作問のねらい」に沿った出題であり、基礎的・基本的な知識や概念を基に、「思考力・判断力・表現力」を問う工夫がされている問題が多い。
- ・統計資料や原典資料を用いて、「社会的な見方や考え方」を引き出し、その理解や課題への活用を問う問題が多い。
- ・複数の資料や対立する概念を参照させ、「思考力・判断力・表現力」を問うような問題が多い。

② 改善すべき点

- ・資料を総合的に選択・判断させるのではなく、個々の資料から選択・判断させるような問題になってしまっている問題が見受けられた。
- ・一問一答式の学習法のみで解答を導きだすことができる問題が含まれる。

○ 科目の問題作成の方向性を踏まえ、題材の選定や問題の場面設定、出題形式等は適切だったかどうか

① 評価すべき点

- ・原典資料や多様な資料を取り入れたことや、アクティブ・ラーニングを想定した場面設定の問題が増えたことで、「主体的・対話的で深い学び」の実現にむけて、今後の高等学校での授業改善へのメッセージとなるような出題が見られた。
- ・判断が分かれる社会的な課題に対し、特定の立場に立ったと仮定した上で、その立場の根拠を問う問題や、その立場に立った場合に選択が予想される政策や行為を問う問題は、「思考力・判断力・表現力」を問う問題として有効である。

② 改善すべき点

- ・「思考力・判断力・表現力」を問おうとする意識が強く出るあまり、問題文等が必要以上に複雑になってしまっている問題が見られる。
- ・各大問をまとめる役割を果たすリード文や資料と設問の関連性が薄いものが見られる。

○ 各科目の問題構成、設問数、内容、難易度等のバランスは適切だったかどうか

① 評価すべき点

- ・学習指導要領で示された「政治・経済」の内容から幅広く出題されている。
- ・現行のセンター試験より設問数が減ったが、解答に必要な資料が増えたため、適切な量だったと考えられる。

② 改善すべき点

- ・大問ごとで、「知識・技能」を問う問題と、主に「思考力・判断力・表現力」を問う問題の数にばらつきが見られるので、大問ごとのバランスについて検討が必要である。

4. 共通テストの実施に向けた方向性

- 平均得点率は概ね5割程度であり、また、無解答率も低かったことから、問題数や難易度、配点等は概ね妥当であったと考えられる。

- 第2回試行調査では、受検者のほとんどが高校3年生であるが試行調査の実施時期が11月であることから、「政治・経済」の学習に未習の項目がある状態で試行調査に臨んだ生徒が存在し、実際に共通テストを実施する際に想定される正答率よりも低かった可能性がある。また、センター試験と比べ、分散がやや小さかった。共通テストに向けての問題作成では、これらの点に留意して、難易度の設定が必要である。

- 共通テストに向けた問題作成では、問いたい「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」の問題全体におけるバランスや、問題の分量（問数、文章量、使用する資料の種類等）を引き続き工夫する。また、正答率や得点分布に配慮し、多様な学力層を識別する問題を含む試験問題としていくとともに、主に同教科他科目の試行調査における成果を取り入れ、出題のねらいに照らして適切な出題方式を工夫する。ただし、学校の授業等における生徒の学習活動を想定した場面設定において、問題設定が複雑となったり、会話文等により文章量が増えたりすることがないように留意する。

【物理基礎】

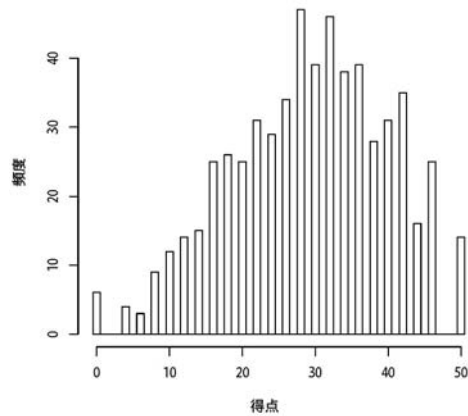
1. 得点分布等に基づく分析

《受検者数等》

全受検者数 591人
 高校3年生 279人 (47.2%)
 高校2年生 312人 (52.8%)

《得点の分布図等》

物理基礎 (50点満点)



平均得点率	58.26% (58.04%)
平均点	29.13点 (29.02点)
標準偏差	10.81
最高点	50点
最低点	0点

※ 平均得点率及び平均点の括弧内は高校3年生のみを対象。

《問題構成や設問数》

大問数 3題
 設問数 マーク式 14問

《設問正答率幹葉図》

平均正答率区間	(設問数)	設問番号	(部分正答等)
95%≧	(0)		
90%～95%	(0)		
85%～90%	(1)	(4-5)	
80%～85%	(0)		
75%～80%	(1)	8	
70%～75%	(2)	7, 15	
65%～70%	(1)	13	
60%～65%	(0)		
55%～60%	(0)		
50%～55%	(3)	1, 2, 14	
45%～50%	(1)	12	
40%～45%	(0)		
35%～40%	(2)	3[3]*, 6	
30%～35%	(2)	9, 11	
25%～30%	(0)		3[1]
20%～25%	(1)	10	
15%～20%	(0)		
10%～15%	(0)		
5%～10%	(0)		3[4], 3[7]
<5%	(0)		

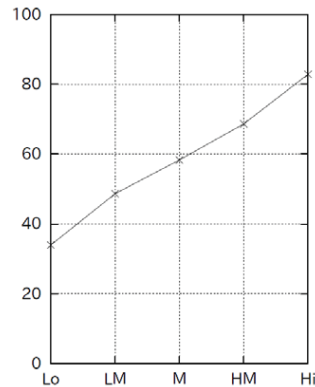
※ 設問番号は、解答番号を示す。
 設問番号の後ろの[]内の文字列は選択肢を示す。
 * は部分正答または正答の組合せが複数あるものを示す。

平均正答率 53.64%

《大問の五分位図》

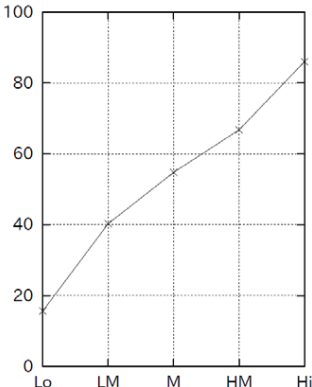
第1問

配点 20 点、平均 58.54%



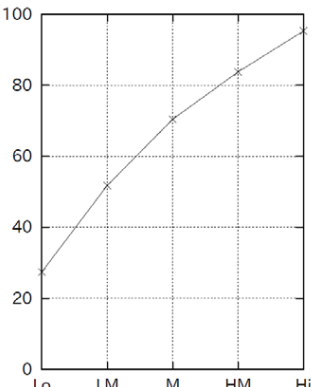
第2問

配点 18 点、平均 52.87%



第3問

配点 12 点、平均 65.88%



- 平均得点率（平均正答率）は、5割程度に達した。得点の分布図については、満点の者が全受検者の約2%、25点を超過している者が約66%いることから、少し高い方に偏っているが、設問正答幹葉図は、5割台の設問を中心に難易度の高いものから低いものまでバランスよく分布しており、問題の難易度は概ね妥当であったと考えられる。目標平均得点率が異なるため一概に比較はできないものの、今回の標準偏差10.81は過去3年間のセンター試験10.27～12.81の範囲内にあり、得点分布の散らばりは同程度と考えられる。
- 前回調査「物理」では、全体的な無解答率の高さと後半に向けて高まる傾向から、解答時間に対する問題量の多さが考えられた。今回は、数値計算を要する問題を精選するなどした結果、全ての設問の無解答率が2%未満となった。解答時間に対する問題の量は妥当だったと考えられる。
- 各大問の五分位図からは、多様な学力層を識別していることが伺える。Lo群とHi群の得点率の差は、第1問は40ポイント程度、第2問と第3問は60ポイント程度となっており、識別力が確保されている。なお、全ての大問のHi群において得点率が8割を超えており、このことが全体の得点率を高める要因になったものと考えられる。
- 2年生の平均点が3年生を0.21点上回る結果となったが、今回、学校規模別の受検者数の調整を学年別には行わなかったことの影響があったものと考えられる。

2. 小問ごとの分析

- 各小問と、当該小問を除いた全問題との間のピアソンの積率相関係数を算出し、さらに、五分位図により分析を行った。また、新たな出題形式等についても分析を行った。

(1) 五分位図におけるLo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の問題。
該当する問題はなかった。

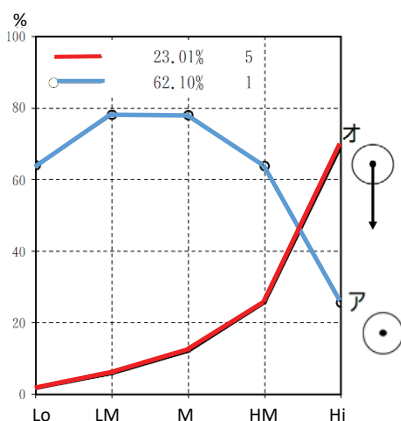
(2) 正答率が低い設問
正答率が唯一、20%台となった問題（第2問B問3 解答番号10）と関連する2問（解答番号9,11）

(3) 新しい出題形式等
① 生徒の学習場面の設定
② 日常生活からの課題
③ グラフの読解

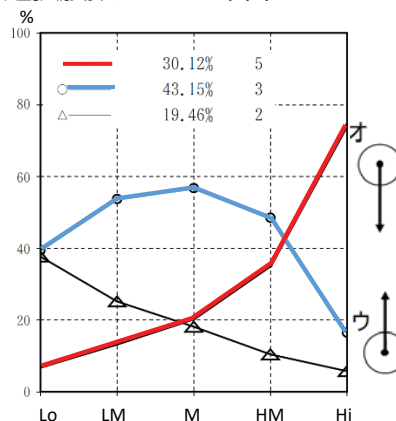
(2) 正答率が低い設問

〈正答率が最も低い設問〉

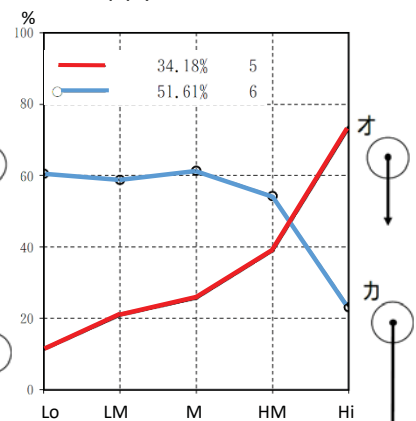
第2問B問3 (解答番号10)
選択肢数6 正答率 23.01%



第2問B問3 (解答番号9)
選択肢数6 正答率 30.12%



(解答番号11)
正答率 34.18%



重力が地球と異なる惑星上で、鉛直上向きに投げ上げられ、最高点に達した瞬間の物体にはたらく力の大きさと向きを特定する。

正答率はLo群で1.75%、Hi群で69.42%と差が20ポイント以上あるので、識別力は有していると考えられるものの、正答率が唯一20%台の、最も難易度が高かったと思われる問題。

投げ上げられた物体には、常に重力がはたらくので正答はオだが、最高点では力が0になるとする誤答アがLo群からHM群まで6割以上の高い値で推移し、Hi群でも25.62%みられる。

解答番号10と同じ設定で、9は上昇中、11は下降中の物体にはたらく力について特定する。これらも識別力は有していると考えられるものの、正答率は35%を下回る。

正答は下向き矢印オだが、上昇中は上向き矢印ウ、下降中は下向きの長い矢印力とする誤答が多い。

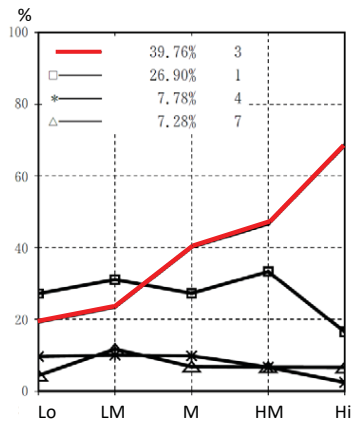
速度と力の区別ができていないことや、経験に基づく誤概念による誤答が考えられ、授業を通じた定着が図られにくい内容であることが考えられる。

(3) 新しい出題形式等

①生徒の学習場面の設定

第1問問2 (解答番号3)

選択肢数8 正答率 39.76%



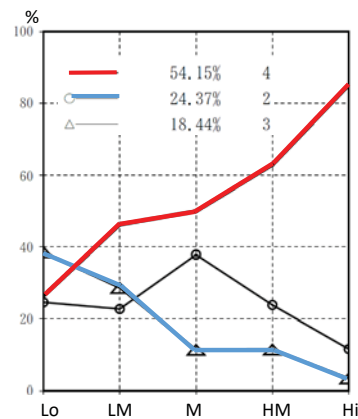
気温変化と管楽器の音の変化についての生徒の会話に沿って、気温が変化した際の音速の変化と熱膨張がもたらす楽器の音の変化を比較分析する。

正答の組み合わせに対して、一つだけ誤った3通りの誤答に部分点を与えた。「管の長さが縮むから基本振動数が小さくなる」とした誤答①が正答に次いで多く、Lo群からHM群にかけて3割前後の一定割合でみられる。波長と振動数の関係を考慮せず、「縮む」から「小さくなる」と短絡的に結びつけている可能性がある。

②日常生活からの課題

第1問問1 (解答番号2)

選択肢数4 正答率 54.15%



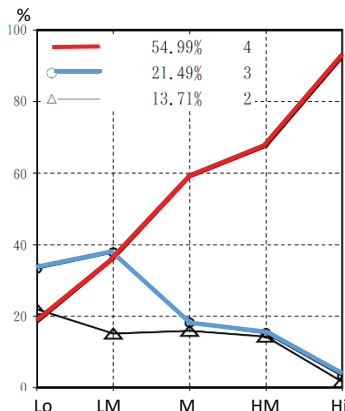
力士と高校生の押し合いを題材に、両者にはたらく力の大小や、両者が押し合ったまま動かないときに成り立つ力の関係を適切に判断する。

ここでは高校生が水平方向に動かなかった理由を問うたが、正答④「力がつりあっていた」54.15%に対して、誤答②「高校生にはたらく摩擦力>力士から押される力」は24.37%、誤答③「作用反作用の関係…」は18.44%と、ともに少なくない。

③グラフの読解

第3問問2 (解答番号14)

選択肢数5 正答率 54.99%



ケーキ生地にはたらく電流の時間変化を記録したグラフを分析し、必要な情報を抽出して、ケーキ生地が5分間に消費した電力量を求める。

電力量=電流×電圧×時間であり、正答④は1A×100V×(5×60)秒=30000Jで求められる。

誤答③500は、時間を秒単位にしなかったものの、誤答②100は、時間を掛けなかったものである。

計算でつまづいた者も含め、これらを選択した約9割の受検者は、グラフから電流値を読み取ることは正しくできたと考えられる。

3. 有識者コメントの概要 大学関係者 6 名、高校関係者 3 名

○各問いの問題のねらいや、主に問いたい資質・能力が反映されていたかどうか

①評価すべき点

- ・物理学の概念は、物理学を深く学んでいない人にとっては日常的感覚と一致しない場合も多く、これは初等物理教育の指導上の特徴でもある。学生がこの問題点を克服するには、従来型講義より主体的・対話的で深い学びが有効であることが知られている。従って、素朴誤概念が検出されうる問題は表面的に見える以上に主体的・対話的で深い学びの成果が反映される質問でありうる。
- ・第2問Aは、授業中に実際に行われる実験を扱っており、平均の速さや加速度についての知識を基に、数的処理能力も見ることができる。Bについては、問3の投げ上げられた物体に働く力において、多くの生徒が経験的に持つ素朴概念を踏まえた出題がなされている点が評価できる。「投げ上げ運動と物体に働く力の関係について」の正しい物理概念の獲得状況を的確に測定できると思われる。
- ・第3問は、実験結果を基に、計算処理、考察をさせていて、科学的に探究する能力を総合的に問うことのできる問題となっている。

②改善すべき点

- ・第1問の間3、問4については、「日常生活で経験される現象や事例を通して」となっているにもかかわらず、日常生活との関連性が希薄であり「問題のねらい」が実現されているとは言い難い。

○科目の問題作成の方向性を踏まえ、題材の選定や問題の場面設定、出題形式等は適切だったかどうか

①評価すべき点

- ・問題作成の方向性として、「知識の理解の質を問う問題」とあるが、第1問の間1、第3問の間3など、多くの生徒が有する誤概念を踏まえた出題となっており、表面的な知識に留まっている生徒と深い理解に達している生徒とを識別できる出題をしている点が評価できる。
- ・第1問の間2 気柱の固有振動を扱うとき、気温が変わるとどうなるかと生徒に尋ねると、まさに、この2つの意見がでてくる。生徒たちの教えあいの場面から実験へとつながる流れは、高校での授業形態に合っている。

- ・実験結果を基にして処理・考察するという、科学的な探究能力を見ることができる良問が多い。
- ・出題形式については、従前のように数的処理を行う問題を維持しつつも、論理的に考えさせる問題が多数であり、問題作成の方向性に照らして適切である。

②改善すべき点

- ・第1問の間3など、一部の設問で正答率が非常に高い。選択を迷う誤答選択肢が少ないことが一因と思われる。強力な誤答の選択肢を持たない問いは、選択肢を増やすことで偶然による正解を減らすべきである。

○各科目の問題構成、設問数、内容、難易度等のバランスは適切だったかどうか

①評価すべき点

- ・力学・波・熱・電磁気の各分野からバランスよく出題されている。
- ・設問数および難易度は概ね適切であった。
- ・全体的に公式の暗記では解けない物理概念の理解を問う問題が多い。

②改善すべき点

- ・部分点の採用による評価能力向上は、さらに推し進めることが可能である。

4. 共通テストの実施に向けた方向性

- 試行調査の問題量並びに各設問の難易度は概ね妥当と考えられ、共通テストに向けて問題構成や基本的な考え方は、試行調査を原則踏襲する。ただし難易度については、11月実施の試行調査であることを踏まえ、受検者のこの時期以降の学力の伸びをにらみながら検討する必要がある。
- 正答率が低かった「投げ上げられた物体にはたらく力を問う問題」は、過去からの各種調査でも理解度の低さを指摘されてきたものである。物理の基本でありながら定着が図られにくい内容については、高等学校における授業改善に役立てる意味も含め、今後も問題を作成する方向で検討していく。

【化学基礎】

1. 得点分布等に基づく分析

《受検者数等》

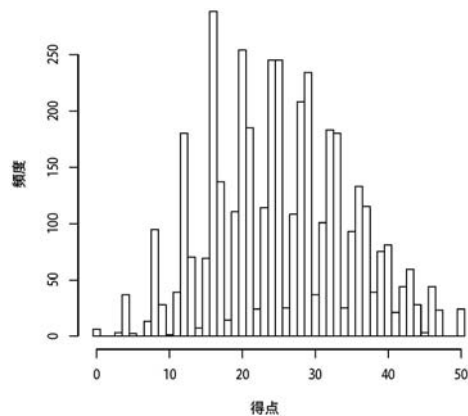
全受検者数 4,049人
 高校3年生 3,207人 (79.2%)
 高校2年生 842人 (20.8%)

《問題構成や設問数》

大問数 3題
 設問数 マーク式 13問

《得点の分布図等》

化学基礎 (50点満点)



平均得点率	50.99% (50.41%)
平均点	25.50点 (25.20点)
標準偏差	9.58
最高点	50点
最低点	0点

※ 平均得点率及び平均点の括弧内は高校3年生のみを対象。

《設問正答率幹葉図》

平均正答率区間	設問数	設問番号
95%≤	(0)	
90%～95%	(1)	5
85%～90%	(0)	
80%～85%	(0)	
75%～80%	(1)	4
70%～75%	(0)	
65%～70%	(0)	
60%～65%	(3)	1, 2, 3
55%～60%	(1)	9
50%～55%	(0)	
45%～50%	(1)	10
40%～45%	(1)	13
35%～40%	(1)	12
30%～35%	(0)	
25%～30%	(2)	6, 11
20%～25%	(1)	8
15%～20%	(1)	7
10%～15%	(0)	
5%～10%	(0)	
<5%	(0)	

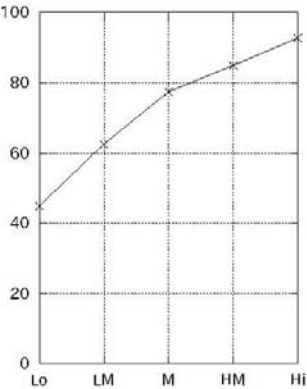
※ 設問番号は、解答番号を示す。

平均正答率 49.20%

《大問の五分位図》

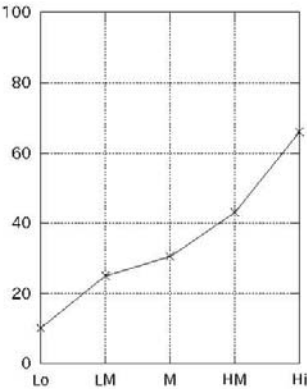
第1問

配点 20 点、平均 72.00%



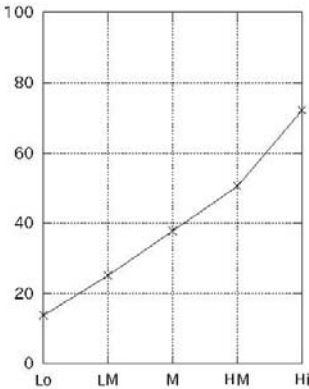
第2問

配点 15 点、平均 34.54%



第3問

配点 15 点、平均 39.44%



- 平均得点率（平均正答率）は、5割程度に達した。受検者数や目標平均得点率が異なるため、センター試験と一概に比較はできないものの、標準偏差は9.58であり、センター試験の過去3年間の標準偏差10.49～10.87と比較すると、得点分布の散らばりがやや小さいがほぼ同程度といえる。このことは、設問正答率幹葉図や各大問の五分位図からも伺える。なお、無解答率も全体的に低かった。
- 各大問の五分位図からは、多様な学力層を識別していることが伺える。なお、第1問は、基本的な知識・技能を問う問題が他の大問よりも多く含まれていたため得点率が高く、Lo群とHi群の得点率の差が他の大問と比べて小さくなったと考えられる。
- 2年生の平均点が3年生を1.42点上回る結果となったが、今回、学校規模別の受検者数の調整を学年別には行わなかったことの影響があったものと考えられる。

2. 小問ごとの分析

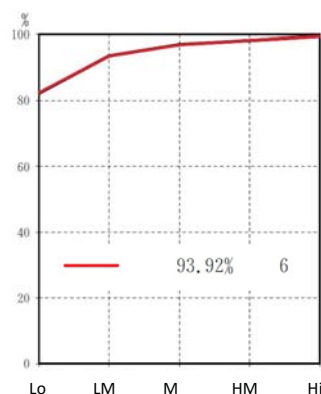
- 各小問と、当該小問を除いた全問題との間のピアソンの積率相関係数を算出し、さらに、五分位図により分析を行った。また、新たな出題形式等についても分析を行った。
- (1) 五分位図におけるLo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の問題
1問あり、五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。
- (2) その他
 - ①資料を理解し、課題を推論し考察する問題
 - ②実験操作の意味を理解し、考察する問題

(1) 五分位図におけるLo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の問題

第1問B問5
(解答番号5)

多肢選択 選択肢数6

正答率 93.92%



2010年度センター試験理科総合A（本試験）の問題を一部改題したものであり、身近に使われている鉄・銅・アルミニウムの用途に関する問題である。

正答率は全問中で最も高く、全ての群で正答率は8割よりも高くなった。題材となった鉄・銅・アルミニウムは日常でもよく使われている金属であり、中学校の理科でも学習するため、受検者にとって解きやすい問題であった。

日常生活や社会における物質の利用や役割を学ぶことは、大切なことであるが、識別力を高めるための作問の工夫が必要である。

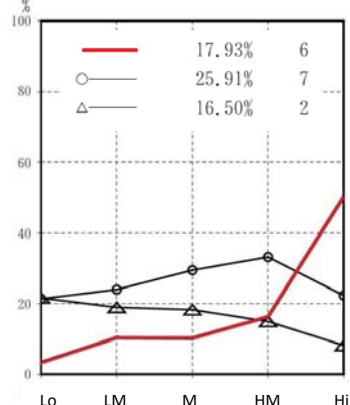
(2) その他

①資料を理解し、課題を推論し考察する問題

第2問問2 (解答番号7)

多肢選択 選択肢数9

正答率 17.93%



酸化数の出し方に関する初見の資料の理解を基に、エタノール中の炭素原子の酸化数を求める問題である。

全問題の中で正答率は最も低く、5割に達したHi群以外は各群で2割以下となった。また誤答として②をマークしている受検者が多いが、これは資料を理解しないで、化合物では水素原子の酸化数を+1、酸素原子の酸化数を-2とするという既知の考え方のみで答えたものと考えられる。

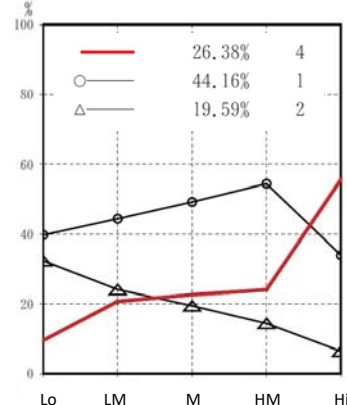
この問2では解答番号8で、続けて酢酸中の炭素原子の酸化数を尋ねているが、正答率、五分位図の形状が解答番号7と同じであったことから、識別力の点では一つの設問にすることが適当であったと考えられる。

②実験操作の意味を理解し、考察する問題

第3問問2 (解答番号11)

多肢選択 選択肢数4

正答率 26.38%



中和滴定の実験において、滴下量が大きくなった場合の理由を実験操作から考察する問題である。

正答率は全ての群において6割以下となった。また、誤答の①をマークする受検者の割合がLo群の4割からHM群まで次第に増えていくという特徴が見られる。これは、実験操作としてホールピペットは共洗いが必要で、コニカルビーカーは純水でぬれたままで使うことができると単純に覚えているが、それぞれのことがどういう意味をもっているということまで理解できていない可能性がある。単に実験を経験させるのではなく、探究活動の過程を踏まえ、実験操作の意味、得られた結果の見通しなどを確認しながら進める授業展開が必要と考えられる。

3. 有識者コメントの概要

大学関係者6名、高校関係者3名

○各問いの出題のねらいや、主に問いたい資質・能力が反映されていたかどうか

①評価すべき点

- 生徒の探究活動や具体的な観察・実験場面を取り上げ、それに沿いながら求められる資質・能力を問う問題構成となっている。

②改善すべき点

- 幅広い資質・能力をバランスよく問うてほしい。「自然の事物・現象の基本的な概念を基に、見いだした課題について原理・法則に従って推論することができる」が正答率3割以下となっており、難易度に幅を持たせてほしい。

○科目の問題作成の方向性を踏まえ、題材の選定や問題の場面設定、出題形式等は適切だったかどうか

①評価すべき点

- 日常生活や社会とのつながりを意識した問題設定となっている。

②改善すべき点

- 複数の問題の答えの組合せで解答させる形式は、一つ間違えた受検生と全くできていない受検生が同じ点数になるところに課題があるのではないかと。

○各科目の問題構成、設問数、内容、難易度等のバランスは適切だったかどうか

①評価すべき点

- 最初に説明を丁寧にし、考える素材を十分に提供されている。設問数は適切で、内容は多くの資質・能力に対応している。全体の難易度も適切である。

②改善すべき点

- 全ての問いに対して、リード文が長すぎると感じた。30分を想定するともう少し簡潔でよい。

4. 共通テストの実施に向けた方向性

- 思考力・判断力・表現力を問う問題を主として、深い理解を伴う知識に関する問題や過去のセンター試験の問題のバランスを考慮して作問に当たり、平均正答率は5割程度となった。大学入学共通テストに向けて、試行調査問題と同様に、日常生活や社会に関連した科学的な事物・現象に関する題材を取り上げ、問題の分量と共に思考力・判断力・表現力を問う問題と知識・技能を問う問題との出題数のバランス、各設問の難易度、問題数などを総合的に検討していく。

【生物基礎】

1. 得点分布等に基づく分析

《受検者数等》

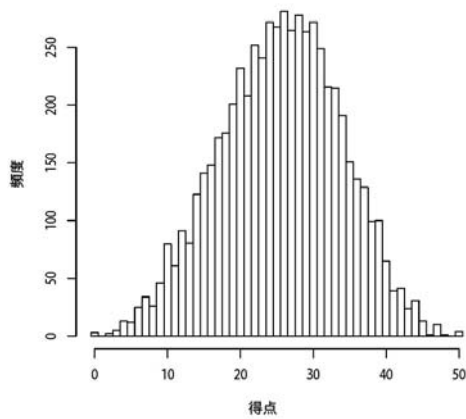
全受検者数 5,988人
高校3年生 4,943人 (82.5%)
高校2年生 1,045人 (17.5%)

《問題構成や設問数》

大問数 3題
設問数 マーク式 16問

《得点の分布図等》

生物基礎 (50点満点)



平均得点率	51.02% (51.21%)
平均点	25.51点 (25.60点)
標準偏差	8.28
最高点	50点
最低点	0点

※ 平均得点率及び平均点の括弧内は高校3年生のみを対象。

《設問正答率幹葉図》

平均正答率区間	設問数	設問番号	(部分正答等)
95%≤	(0)		
90%~95%	(0)		
85%~90%	(0)		
80%~85%	(1)	11	
75%~80%	(1)	12	
70%~75%	(1)	(14-15)[27]*	
65%~70%	(1)	6	
60%~65%	(1)	1	
55%~60%	(2)	4, 16	
50%~55%	(1)	5	
45%~50%	(0)		
40%~45%	(1)	7	
35%~40%	(3)	3, (17-18)[14]*, 19	(8-9)[1], (17-18)[4]
30%~35%	(0)		
25%~30%	(2)	2, 10	
20%~25%	(0)		
15%~20%	(0)		
10%~15%	(1)	(8-9)[13]*	(8-9)[3], (14-15)[2] (17-18)[1]
5%~10%	(0)		
<5%	(1)	13	(14-15)[7]

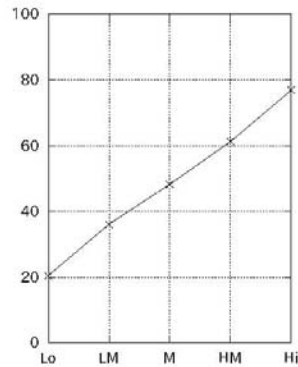
※ 設問番号は、解答番号を示す。
設問番号の後ろの[]内の文字列は選択肢を示す。
* は部分正答または正答の組合せが複数あるものを示す。

平均正答率 47.53%

《大問の五分位図》

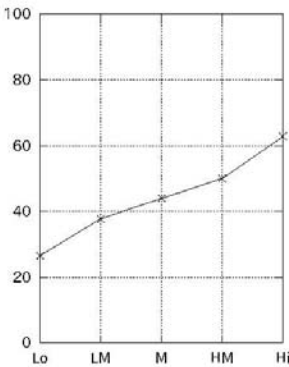
第1問

配点17点、平均48.96%
(A 41.56% / B 59.54%)



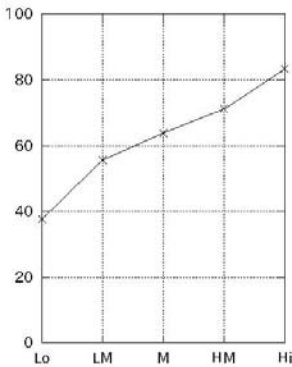
第2問

配点19点、平均44.43%
(A 34.43% / B 55.51%)



第3問

配点14点、平均62.49%
(A 73.98% / B 51.00%)



- 本調査の作問については、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月21日）において、「教材で扱われる用語が膨大となっていることが指摘される中で、科目のねらいを実現するため、主要な概念につながる重要用語を中心に整理する」とされたことを踏まえ、生物基礎においても、思考力・判断力・表現力等を重視した問題を含む構成とした。
- 平均得点率（平均正答率）は5割程度に達した。生物基礎では全設問の半数を、概念的な知識を活用する問題や複数の深い理解を伴う知識を統合する問題などで構成したことで、正答率が20%未満の設問は2問となった。また、標準偏差は8.28で、過去3年間のセンター試験の標準偏差9.24～10.65と比較するとやや低くなっているが、これは正答率85%以上の設問がなかったことが要因の一つと考えられる。なお、今回の調査の問題に対しては、11月時点の受検者でも十分に対応することができたと考えられる。これらを踏まえ、共通テストにおける問題の難易度等の構成や部分点の設定を含めた配点などについて決定していく必要がある。
- 大問の五分位図からは、多様な学力層を識別していることが伺える。なお、第2問については、Lo群とHi群における得点率の差が最も小さくなっている。これは極端に得点率が低い設問があったことが一つの要因と考えられる。
- 設問別無解答率については、第3問Bの問4が約3%で最も高く、複数の概念化した知識を整理・統合して思考・判断等を行うことが求められたため、受検者が解答を断念した可能性が高いが、全体的には低かったことから、今回の調査において、試験時間に対する問題数や文章量等については受検者にとって十分に対応できるものであったと考えられる。

2. 小問ごとの分析

- 本調査の受検者については、高校3年生の割合は約83%であった。11月に本調査を実施しており、高校3年生は実際の大学入試に向けて学力が伸びる可能性がある時期であること、高校2年生で生物基礎を履修する受検者にとっては多くの未習の内容があることから、実際に試験が実施される高校3年の1月よりも今回の調査の正答率が低くなっている可能性が高いことを十分に考慮しつつ、極端に正答率が低かった設問や、正答率の低かった教科書の単元の内容に留意して、平均得点率が5割を超えたという結果を踏まえ、各設問の分析を進めた。
- 各設問の正答率※部分正答を除くと、当該の設問を除いた全設問の平均正答率との間のピアソンの積率相関係数を算出し、更に五分位図により分析を行った。また、新たな出題形式等についても分析を行った。
 - （1）五分位図におけるLo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の問題（複数の解答がある設問では完全正解の場合の正答率で抽出）
 - * 1問あり、この1問について、五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。
 - （2）新しい出題形式等
 - ① 探究活動を通じて、複数の情報を整理・統合して思考・判断等させる問題
 - （3）その他
 - ① 中・高等学校で獲得した知識を統合・再構築し、それを活用して判断させる問題

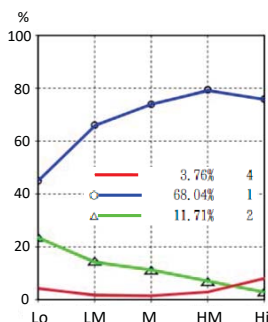
(1) 五分位図におけるLo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の問題

- 必要な情報を抽出・整理し、概念的知識を活用して判断させる問題

第2問B問6
(解答番号13)

多肢選択
選択肢数6
(グラフ選択)

正答率 3.76%



ヒトの血清療法について、免疫に係る理解を基に、再度血清を注射したときに体内で起こる抗体産生に伴う抗体量の変化と日数を考察する問題である。極端な正答率の低さは、血清を一度注射し、数日後に再度注射するという設定を、受検者が十分に把握できなかったことが要因の一つと考えられる。また、誤答の選択肢①が約7割という結果からは、2回注射するという情報だけで既習の二次応答についてのグラフを選んだ可能性が高い。

知識の深い理解とその活用についての新テストの趣旨に沿った問題であり、これまでの学習の在り方を変革することが求められており、同様の問題を継続して出題する必要がある。ただし、識別力を上げるためには必要な情報を更に示すなどの工夫が必要である。

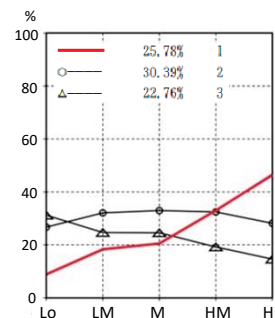
(2) 新しい出題形式等

- ① 探究活動を通じて、複数の情報を整理・統合して思考・判断等させる問題

第1問A問2
(解答番号2)

多肢選択
選択肢数6

正答率 25.78%



顕微鏡で観察したオオカナダモの葉の断面について、観察方法に関する理解を基に、会話文中の内容から、細胞の重なりや細胞の大きさを統合的に判断する問題である。顕微鏡の操作方法と、中学校理科で学習しているレンズの焦点・虚像等についての理解を統合し、新たな知識として概念化することが必要であるため、受検者にとって新しい出題傾向の難しい問題である可能性がある。

新テストの趣旨に沿った問題で探究活動の場面を想定しており、教科書に記載されている実験に主体的に取り組んだり、これまで獲得してきた知識と統合したりすることなどが求められる。ただし、識別力を上げるためには必要な情報を更に示すなどの工夫が必要である。

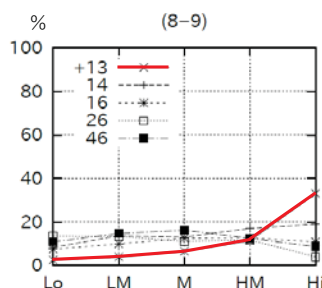
(3) その他

- ① 中・高等学校で獲得した知識を統合・再構築し、それを活用して判断させる問題

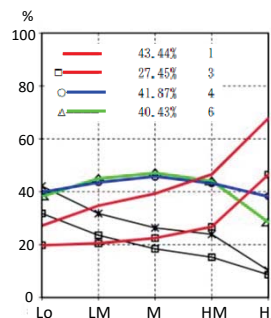
第2問A問2
(解答番号8・9)

多肢選択
選択肢数6
二つ選べ

正答率 11.82%
(完全正解の場合)



〈参考：各選択肢ごとの選択率〉



ヒトの肝臓について、中学校や高等学校で学習して概念化された循環系・肝臓等の働きに係る理解を基に、その構造と流れる体液の種類やその流路等を考察する問題である。肝動脈を流れる血液は酸素を多く含み、小腸から養分を多く含んだ血液が流れ込んで、肝静脈を通して血液が心臓に向かうことなどについては中学校での既習事項であり、それらを踏まえて高等学校で学習した知識とともに再構築して理解を深めることが求められているため、受検者にとって難しい問題である可能性がある。

新テストの趣旨に沿った問題であり、同様の問題を継続して出題する必要がある。ただし、識別力を上げるためには必要な情報を更に示すなどの工夫が必要である。

3. 有識者コメントの概要

大学関係者 4 名、高校関係者 3 名

○各問いの問題のねらいや、主に問いたい資質・能力が反映されていたかどうか

①評価すべき点

- ・全体として、各問いの問題のねらいや、主に問いたい資質・能力が反映されていた。
- ・基本的な概念、思考力、実験観察から見いだすことを重視しようとする姿勢が見られる。

②改善すべき点

- ・グラフの読解と計算を組み合わせることで思考力が必要となる問題だが、その分野に関する本質的な理解がなくても解けてしまうので、更に工夫が求められる。

○科目の問題作成の方向性を踏まえ、題材の選定や問題の場面設定、出題形式等は適切だったかどうか

①評価すべき点

- ・科目の問題作成の方向性を踏まえ、題材の選定や問題の場面設定、出題形式等は適切であった。
- ・学習内容を単に記憶するだけでなく、深く理解して活用できることが大切だということを、高校生が実感できる問題であった。

②改善すべき点

- ・複数の内容や要素を一度に問おうとすると、難易度が高くなってしまいうので工夫が必要である。
- ・問題文が複雑で最初の 3 行では問われている内容が分からなかったのも、ここに考えるためのヒントを加え、問われていることが何かを把握できるように改善すると良い。

○各科目の問題構成、設問数、内容、難易度等のバランスは適切だったかどうか

①評価すべき点

- ・学習指導要領をよく踏まえ、バランスの良い問題構成になっている。

②改善すべき点

- ・考えるためのヒントを加えたり、選択肢を例えば 4 つに減じて違いを更に明確にするとよい。
- ・詳細な知識がないと、与えられた情報だけでは考察しにくい問題があり、更に工夫が必要である。

4. 共通テストの実施に向けた方向性

○ 以上の分析を踏まえ、2020年度の共通テストの実施に向けては、以下に基づき問題作成に当たる。

- ・問題の分量（文字数や資料の数など）、問題全体の構成、全設問数などについては、試行調査における設定を目安とすることとする。なお、出題範囲は、これまでのセンター試験と同様に学習指導要領に示された三つの大項目の内容を網羅することとする。
- ・深い理解を伴う知識を問う問題については、生物用語を直接的に問うような問題とならないよう工夫することとする。
- ・思考力・判断力等を問う問題で、解答に至る過程で複数の思考・判断を要することで難易度が比較的高くなる場合には、段階的に部分点を設定したりするなどの工夫を行うこととする。また、探究活動や授業の場面を取り上げる新しい傾向の問題などについては、高大接続改革の趣旨を踏まえ、継続的に作成していくこととする。

【地学基礎】

1. 得点分布等に基づく分析

《受検者数等》

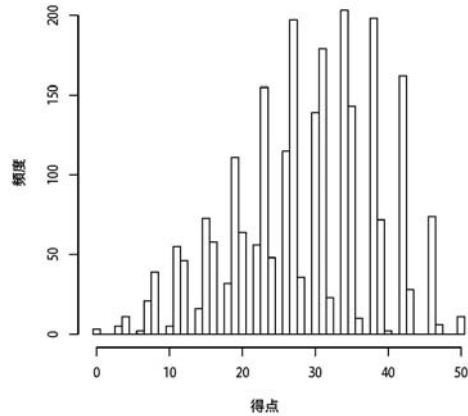
全受検者数 2,398人
 高校3年生 2,113人 (88.1%)
 高校2年生 285人 (11.9%)

《問題構成や設問数》

大問数 3題
 設問数 マーク式 13問

《得点の分布図等》

地学基礎 (50点満点)



平均得点率	57.21% (57.74%)
平均点	28.60点 (28.87点)
標準偏差	9.78
最高点	50点
最低点	0点

※ 平均得点率及び平均点の括弧内は高校3年生のみを対象。

《設問正答率幹葉図》

平均正答率区間	(設問数)	設問番号
95%≤	(0)	
90%~95%	(0)	
85%~90%	(1)	1
80%~85%	(0)	
75%~80%	(1)	11
70%~75%	(1)	7
65%~70%	(2)	4, (5-6)
60%~65%	(1)	8
55%~60%	(3)	2, 12, 13
50%~55%	(0)	
45%~50%	(2)	10, 14
40%~45%	(0)	
35%~40%	(1)	9
30%~35%	(0)	
25%~30%	(0)	
20%~25%	(0)	
15%~20%	(0)	
10%~15%	(1)	3
5%~10%	(0)	
<5%	(0)	

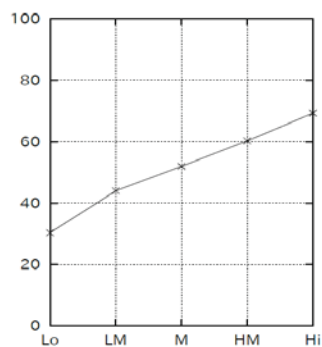
※ 設問番号は、解答番号を示す。

平均正答率 57.47%

《大問の五分位図》

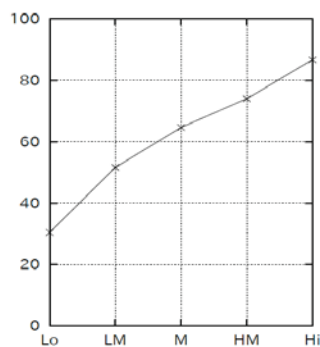
第1問

配点 12 点、平均 51.50%



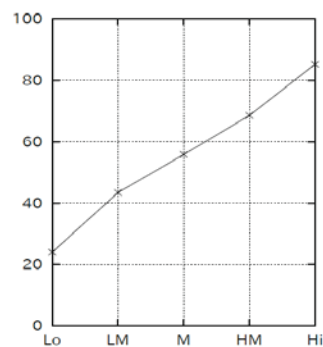
第2問

配点 19 点、平均 62.01%



第3問

配点 19 点、平均 56.01%



- 平均得点率（平均正答率）は5割程度に達した。得点の分布図は、右によっており、高得点の受検者が相当数存在することが分かる。楕円の歯状の得点分布が得られているのは、4点の配点の小問がほとんどのためである。標準偏差は9.78であり、目標平均得点率が異なるため、センター試験と一概に比較はできないものの、センター試験の過去3年間の標準偏差10.16～10.55と比較すると、得点分布の散らばりがわずかではあるが小さいものの一定の得点の分布は確保できていると考えられる。
- 各大問の五分位図からは、多様な学力層を識別できていることが伺える。なお、第1問の得点率の変化がやや小さい。これは、第1問が三つの小問から構成されており、このうち1問の得点率が極端に低かったため、大問の得点率の変化がやや小さく、Lo群とHi群との間の差が約40ポイント程度となっている。第2問および第3問では、Lo群とHi群の間ではいずれも得点率の差が55ポイント以上ある。
- また、設問ごとの正答率では、8割以上の問題が1問で、5割以下の問題が4問であることから、問題の難易度は概ね妥当であったと考えられる。

2. 小問ごとの分析

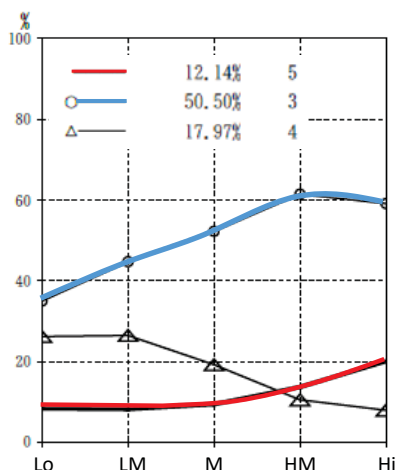
- 各小問と、当該小問を除いた全問題との間のピアソンの積率相関係数を算出し、さらに、五分位図により分析を行った。
 - (1) 五分位図におけるLo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の問題
 - 第1問B問3が該当するため、この1問について、五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。
 - (2) その他
 - 初見の資料に基づく問題
 - ※初見の資料を呈示して検討を加えることにより、解答を求める問題を複数出題したが、出題の方向性は類似であっても素材により正答率に大きく差が生じた。第2問B問2、第2問C問5はいずれも教科書に記述されているままの知識ではなく、呈示された資料に基づいて推論を行う設問であるが、正答率はかなり異なった。

(1) 五分位図におけるLo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の問題

第1問B問3
(解答番号3)

多肢選択
選択肢数6

正答率 12.14%



Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の理由としては、以下が考えられる。

選択肢の数は6であるが、正答率は12.14%であり、ランダム解答時の正答率より低い。ほぼ半数の受検者が選択肢3を解答している。Hi群においても正答選択肢5の選択率は20.07%である一方、誤答選択肢3は59.13%が解答している。科目得点との相関係数はほぼ0であり、他の設問と比べて著しく低い。この設問は、地球の大気における酸素濃度の急激な増加の時期とその理由を問うものである。原因としては、大気中の酸素濃度の変化の時期の理解に課題があったものと考えられる。

(2) その他

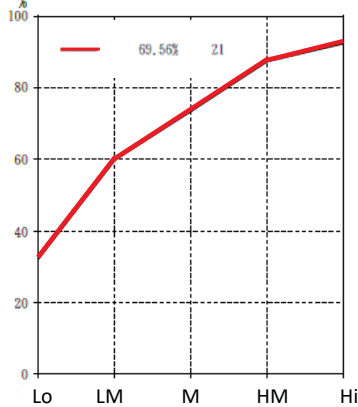
①初見の資料に基づく問題

第2問B問2

(解答番号5・6)

多肢選択
選択肢数 4

正答率 69.56%



第2問B問2は、未固結堆積物の観察結果を説明した図を示し、その状況から図中に現れる泥、礫、砂の要素の堆積順などについての記述を選択するものである。正答率は69.56%であり、Hi群では9割以上の正答率に達した。二つの選択からなる組み合わせ解答であるが、これらは四つの共通の選択肢から選ぶ。これらの選択肢のうちひとつは、礫、砂、泥が順に堆積したこと、もう一つは、それらが層状に分布していることを記述しており、比較的容易にこの資料の状況とは異なると判断できる。

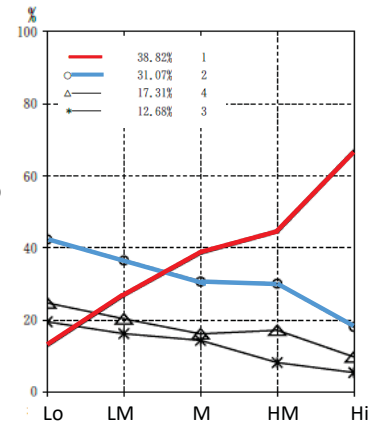
①初見の資料に基づく問題

第2問C問5

(解答番号9)

多肢選択
選択肢数 4

正答率 38.82%



第2問C問5は、台風の風向きによる歴史的記述から台風の進路についての推論を行うものである。台風の中心付近での風の方角についての知識とともに、時間的な記述から方向の推移についての状況を把握する必要がある。こちらの問題では正答率は全体で38.82%であるが、Hi群では66.73%に達している。HM群の正答率が44.59%であるので、Hi群をよく識別する問題であったことが分かる。

同じく初見の資料から推論による解答を求めるものであるが、解答に必要とされる推論の複雑さの違いが、これらの正答率に反映されたと思われる。

3. 有識者のコメント

大学関係者 5 名、高校関係者 3 名

(1) 各問いの問題のねらいや、主に問いたい資質・能力が反映されていたかどうか

①評価すべき点

- ・理科の問題のねらいとする「思考力・判断力・表現力」を問う問題として適切であった。
- ・従来型の試験問題に比べ、思考力・判断力が重視された作問がなされており高く評価できる。また、作問内容はバランスも良く、問題のねらいは十分に反映されており評価できる。

②改善すべき点

- ・第1問について、他の大問と同様に、図や表を読み解いて解答するような思考力・判断力を必要とする問題を入れてはどうか。

(2) 科目の問題作成の方向性を踏まえ、題材の選定や問題の場面設定、出題形式等は適切だったかどうか

①評価すべき点

- ・第1問問2について、まとめたものの誤りを指摘することは、探究の過程を進めていく上で、自分が見出した結果や考察が妥当なものかななどの検証につながるため、重要であり評価できる。
- ・第2問Bについて、自然災害に関する問題であり、日常生活との関連があることや、探究的な内容であることが評価できる。特に、スケッチや過去の記録を用いて、必要な情報を見いださせ、思考させていることが評価できる。
- ・第2問Cの問5は、台風の風向、地形との関係を読み解かないと正解にたどり着けない思考力・判断力が必要な問題となっている。受検生の教科書的知識だけでなく、科学的な素養を見ることが出来るこのような問題は継続的に出題していただきたい。
- ・第3問Aの問題はたいへん面白く、かつ工夫された問題である。今回の題材のように、おそらく教科書には掲載されていない題材を、問題全体で1問程度入れるという方向性は、今後も推奨していただきたい。

(2) 科目の問題作成の方向性を踏まえ、題材の選定や問題の場面設定、出題形式等は適切だったかどうか

②改善すべき点

- ・地学基礎では、受検生が思考力・判断力を問う問題に時間が割けるように、1割から2割程度は、従来のような主に知識を問う問題でもいいのではないかと。
- ・第3問Bの問4は知識を問うにしても、兆と億の違いを聞くやや細かい内容を問う問題であると感じられた。もっと基本的な宇宙構造の知識を問う問題でも良かったのではないかと。

(3) 各科目の問題構成、設問数、内容、難易度等のバランスは適切だったかどうか

①評価すべき点

- ・2つの基礎を付した科目を選択させて60分で解答させるという理科①の出題方法を考えると、今回の試行調査の問題構成、設問数、内容、難易度等のバランスは適当であったと考えられる。
- ・思考力・判断力問う問題について、問題構成、設問数、内容、難易度等のバランスは適切であったと考えられる。

②改善すべき点

- ・受検時間の関係からやむを得ないと思うが、問題数が少なく、各設問がどうしても細切れ感が生じてしまっているように感じる。

4. 共通テストの実施に向けた方向性

- 今回実施した試行調査において概ねバランスが取れていたと考えられる。共通テストに向けては、今回の試行調査は11月に実施していることや、高校3年生の受検者が約88%であることなどにより、実際の大学入試に向けて学力が伸びる可能性があることから、問題の難易度は考慮しつつも、問題全体の構成などについては、試行調査を目安とする。なお、思考力・判断力等を問う問題で、解答に至る過程で複数の思考・判断等を要することで難易度が比較的高くなる場合には、段階的に部分点を設定したりするなどの工夫を行うように努めることとする。

【物理】

1. 得点分布等に基づく分析

《受検者数等》

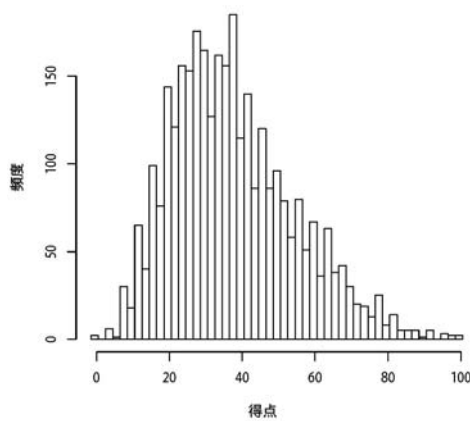
全受検者数 3,196人
高校3年生 2,611人 (81.7%)
高校2年生 585人 (18.3%)

《問題構成や設問数》

大問数 4題
設問数 マーク式 23問

《得点の分布図等》

物理 (100点満点)



平均得点率	37.47% (38.54%)
平均点	37.47点 (38.54点)
標準偏差	16.71
最高点	100点
最低点	0点

※ 平均得点率及び平均点の括弧内は高校3年生のみを対象。

《設問正答率幹葉図》

平均正答率区間	(設問数)	設問番号	(部分正答等)
95%≧	(0)		
90%~95%	(0)		
85%~90%	(1)	4:1	
80%~85%	(0)		
75%~80%	(2)	1:1, 2:4	
70%~75%	(0)		
65%~70%	(0)		
60%~65%	(0)		
55%~60%	(3)	2:1, 3:2, 3:3	
50%~55%	(1)	3:1	
45%~50%	(1)	1:2	
40%~45%	(0)		
35%~40%	(4)	2:2*, 2:3, 2:5, 3:4	
30%~35%	(1)	3:5	2:2[8]
25%~30%	(3)	1:4, 4:2, 4:3[5]*	
20%~25%	(2)	2:6, 4:4	
15%~20%	(2)	1:3, 4:5	4:3[4]
10%~15%	(1)	1:7	
5%~10%	(2)	1:(5-6), 1:(8-10)	2:(1, 2)[2.5]
<5%	(0)		

※ 設問番号の「2:1」は、大問番号「2」、解答番号「1」を示す。

設問番号の後ろの[]内の文字列は選択肢を示す。

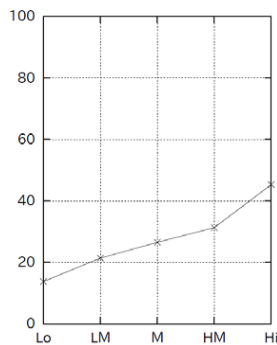
*は部分正答または正答の組合せが複数あるものを示す。

平均正答率 38.86%

《大問の五分位図》

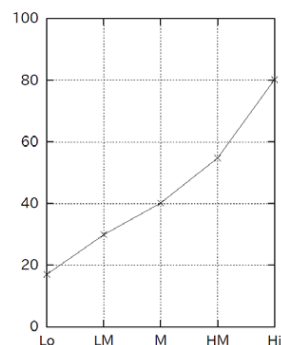
第1問

配点 30 点、平均 27.47%



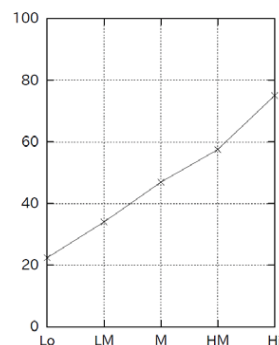
第2問

配点 28 点、平均 44.01%



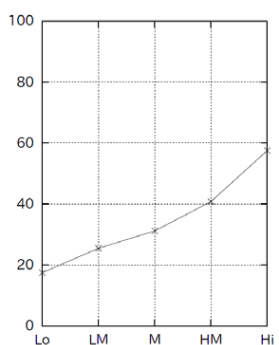
第3問

配点 20 点、平均 46.85%



第4問

配点 22 点、平均 34.24%



○ 第1回試行調査の無解答率が全体的に高かったことを踏まえ、今回は数値計算を要する問題を精選するなどした結果、無解答率は全体的に低かった。無解答率が最も高かった第1問の問5(13.49%)は、調査を行った11月では未習であることを認識した上で、1月であれば解答可能な、基本的な知識の理解を問う問題として出題したものである。

○ 平均得点率(平均正答率)は5割に達しなかった。設問正答率幹葉図より、正答率が中～高程度の問題が少なかったと考えられる。満点の者は2名いるものの50点を超える受検者は全受検者の約21%にとどまり、得点分布は低い方に偏っている。目標平均得点率が異なるため一概に比較はできないものの、今回の標準偏差を、過去3年間のセンター試験22.45～23.68と比較すると16.71と小さいが、これは平均得点率が低かったためと考えられる。

- 各大問の五分位図からは、目標とする平均得点率（平均正答率）に影響を与えた大問が見受けられた。具体的には、様々な分野・領域から小問単位で知識の理解を問う第1問の得点率が、Hi群でも5割未満となっている。これは、当てはまる選択肢を全て選択する問題、数値を当てはめる問題といった新しい出題形式も影響したものと考えられる。

2. 小問ごとの分析

- 各小問と、当該小問を除いた全問題との間のピアソンの積率相関係数を算出し、さらに、五分位図により分析を行った。また、新たな出題形式等についても分析を行った。

（1）五分位図におけるLo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の問題

1問あり、この1問について、五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。

（2）受検者に対して難易度が高かったと考えられる問題

五分位図で、Hi群の設問別正答率が6割以下のものを抽出したところ、23問のうち9問が該当。

これらのうち、問題の読み取りに課題が見られた第1問問2、表面的判断による解答が見られた第1問問3（解答番号4）、思考の過程につまずきが見られた第4問B問3、必要な数値処理をしないで解答したと思われる第4問B問4の4問については、五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。

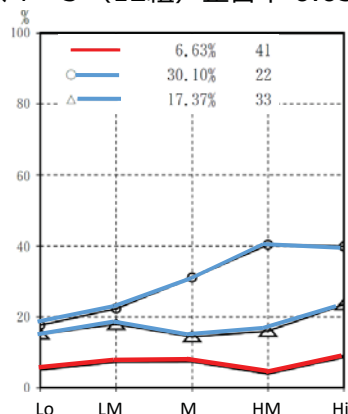
（3）新しい出題形式等

- ① 数値を当てはめさせる問題
- ② 当てはまる選択肢を全て選択する問題

（1）五分位図におけるLo群とHi群の差が20ポイント以下の問題

第1問問3（解答番号5・6）

選択肢数4×3（12組）正答率 6.63%

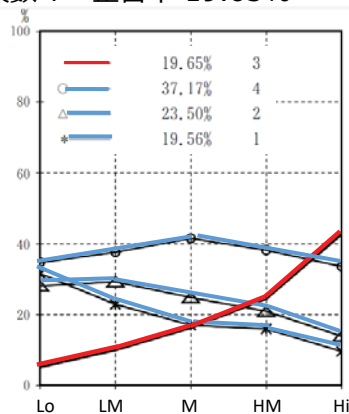


断熱材でできたシリンダー内にピストンで閉じ込められた理想気体を、ピストンの穴からシリンダー内に解放した際の温度変化とその原因を考察する。正答率は、Hi群で8.80%と低く、Lo群との差が20ポイント以下であることから、難易度が高く識別力が低い問題であったと考えられる。複数の知識を組み合わせ、気体にされた仕事をもとに判断すべき問題だが、「断熱材でできた」という表現から単純に「断熱膨張」を選ぶ傾向が見られた。より深い思考を要求したが、2次試験で出題されるような難易度の問題となった可能性が高い。

（2）受検者に対して難易度が高かったと考えられる問題

第1問問2（解答番号3）

選択肢数4 正答率 19.65%

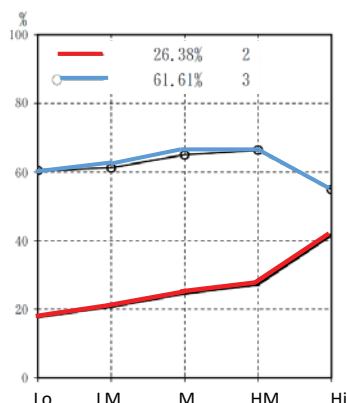


大気のない惑星を舞台に、宇宙船が水平に等速直線運動するために、燃焼ガスを噴射すべき方向を特定する。正答率はHi群でも42.88%と低いことから、難易度が高かったと考えられる。

惑星上での等速直線運動という場面設定で、投下された物資については重力を考慮し正しく答えているのに、宇宙船に対しては「宇宙船」という名称ゆえ重力がはたらかないものと思い込んだ可能性が否定できない。問題文から必要な情報を正確に把握することに課題があったものと考えられる。

(2) 受検者に対して難易度が高かったと考えられる問題

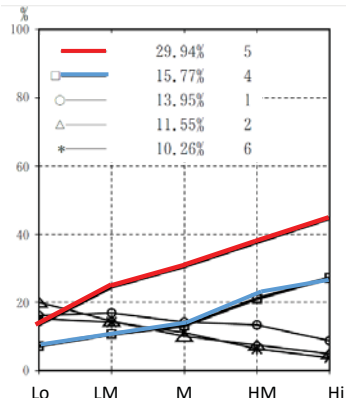
第1問問3 (解答番号4)
選択肢数5 正答率 26.38%



断熱材でできたシリンダー内にピストンで閉じ込められた理想気体について、成り立つ式を求める。正答率はHi群でも41.76%と低いことから、難易度が高かったと考えられる。

気体の状態方程式に圧力や体積の式を組み合わせ正答に至る問題だが、見覚えのある、気体の内部エネルギーの式を反射的に選んだと思われる誤答③が、五分位図ではLo群からHM群まで6割以上と多い。

第4問B問3 (解答番号3)
選択肢数8 正答率 29.94%



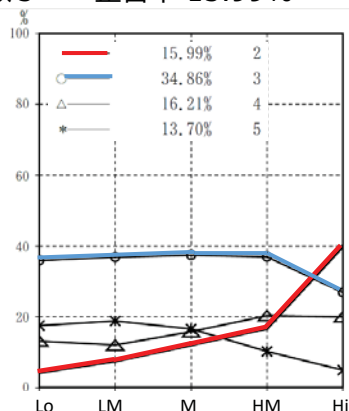
アクリルパイプ内を落下する磁石が作る起電力を下端のコイルで測定する実験で、落下する磁石の極性を過程を追いつながり特定する。正答率はHi群でも44.64%と低いことから、難易度が高かったと考えられる。

五分位図では、正答⑤に対して全て逆となる選択肢④が、ともに右上がりになっている。④は、問題冒頭の「Aの電位がBより高い」の理解についてのみ誤り、その後のレンツの法則などに関わる問いには正しく答えているものと考えられるので、部分点を与えている。

(3) 新しい出題形式等

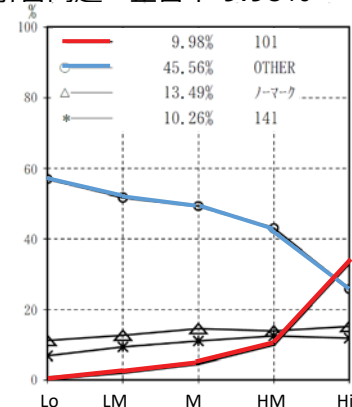
① 数値を当てはめさせる問題

第4問B問4 (解答番号5)
選択肢数5 正答率 15.99%



パイプ内を落下する磁石が作る起電力を下端のコイルで測定する実験で、落下地点の高さを半分にしたとき、起電力の山と谷の時間差の変化を特定する。正答率はHi群でも40.00%と低いことから、難易度が高かったと考えられる。また、無解答率が9.61%と高く最後の問題なので、無解答の受検者は時間が足りなかった可能性がある。誤答③「ほとんど変わらない」が、34.86%と正答の倍以上と多く、数的処理に基づく考察に課題があったものと考えられる。

第1問問5 (解答番号8～10)
数値解答問題 正答率 9.98%



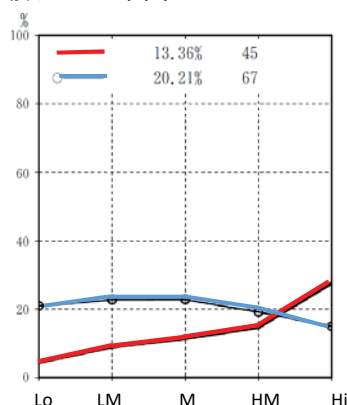
ボーア模型についての理解を基に、水素原子中の電子が $n = 2$ の軌道から $n = 1$ に落ちる際に放出される光子のエネルギーの値を求める。

教科書の最後の分野からの出題であり、必要な式は問題中に示すなどの配慮をし、1月の共通テストなら十分な正答率となるような、基本的な知識の理解を問う問題とした。11月実施の本調査では、多くの学校で未習だった可能性が高く、数値を当てはめさせる解答形式とも相まって、正答率はHi群でも33.28%と低く、無解答率は13.49%と最も高かった。

②当てはまる選択肢を全て選択する問題

第1問問4 (解答番号7)

選択肢数7 正答率 13.36%



凸レンズの上半分を隠して、レンズの左側にある物体の先端部分から出た光が、レンズ右側のどの点に届くかを特定する。(答の数を指定せず、全て選ばせる形式。) 正答率はHi群でも27.68%と低いことから、難易度が高かったと考えられる。

凸レンズについて、代表的な3本の光の進路に加え、4本目が正しく描けるかがポイントとなった。正答の④⑤に対し、誤答は⑥⑦や⑤⑥⑦、④⑤⑥⑦が多かった。

3. 有識者コメントの概要

大学関係者6名、高校関係者3名

○各問いの問題のねらいや、主に問いたい資質・能力が反映されていたかどうか

①評価すべき点

- ・グラフや表などから読み取れる情報を基に、学習した知識を活用して、考察したり数的処理をしたりするという、科学的に探究する力をバランスよくみることのできる良問となっている。
- ・余分な情報もある中から、要・不要を判断して取捨選択するような問題が多く、実際の探究活動に必要な思考力を問うことができる。

②改善すべき点

- ・複数の原理を使い、論理を積み重ねていく複雑な問題も物理学の特徴である。個々のプロセスは機械的であっても、多段階の式変形や計算は重要な能力である。しかし、短時間で結果が得られる問いが増え、時間をかける問いが減った。
- ・第4問については、比透磁率という用語を解答させる点が疑問である。消去法で推論できるものの、用語を暗記する必要があるというメッセージになりかねない。用語を問う場合、物理の広範囲に活用される本質的な用語に限定するよう改善すべきである。

○科目の問題作成の方向性を踏まえ、題材の選定や問題の場面設定、出題形式等は適切だったかどうか

①評価すべき点

- ・数値をあてはめさせる問題は、偶然の正答を防ぎ、正確な計算力を要求する点で適切である。
- ・第1問問4のような正解に至る過程が複数ありうる問いは、能動的思考、あるいは発想を要する問題として評価できる。
- ・第2問の問3では、「授業において生徒が学習する場面」と「資料やデータ等をもとに考察する場面」を兼ね備えた場面設定を行い、生徒の会話を通じて物理的状況を把握させ、近似的な考え方を誘導して課題を解決させる設問となっている点が高く評価できる。

②改善すべき点

- ・物理基礎と比較して、「授業において生徒が学習する場面、社会生活や日常生活の中から課題を発見し解決方法を構想する場面」を設定した設問が少ない点に改善の余地がある。
- ・強力な誤答の選択肢を持たない問いは、選択肢を増やすことで偶然による正解を減らすべきである。

○各科目の問題構成、設問数、内容、難易度等のバランスは適切だったかどうか

①評価すべき点

- ・内容、難易度のバランスは概ね良好と考える。
- ・これまでのセンター試験では選択問題にされることの多かった原子物理分野も、このようにぜひ共通に出題すべきである。
- ・例外的な出題はあるものの、全般的に、公式の暗記ではなく物理的な思考力・判断力を見ようとする姿勢が現れた出題内容となっている点が評価できる。

②改善すべき点

- ・出題分野に重複や偏りがみられる。
- ・数値計算は実験経験を反映する技能で、創造力を発揮する際に必要な技術なので軽視してはいけない。式変形のみであれば、単位変換や指数表示といった基本的技能を問うことが難しくなる。
- ・第1問の一部の問題で正答率が著しく低かった原因を分析する際には、出題形式だけではなく、高校での指導の実情についても十分に検討すべきである。

4. 共通テストの実施に向けた方向性

- 得点の分布図、設問正答率幹葉図、大問の五分位図、無解答率等を踏まえると、平均得点率（平均正答率）が5割に達しなかった一因は、大問別得点率がHi群でも5割未満だった第1問の難易度にあると考えられる。第1問は多様な分野・領域の小問からなる問題としたが、これらの各小問で正確な読み取りを求める問題や、新しい解答形式の問題を配置するなどしたため、それぞれが難しくなった可能性が考えられる。センター試験の第1問は基本的な事項を問うことが多く、本試行調査でも短時間で効率よく解くことを優先した受検者が多かったと見受けられ、問題文の読み取り不足が原因と思われる誤答や、見覚えがある式を反射的に選択したと思われる誤答がみられた。

- 以上の分析を踏まえ、共通テストに向けては、以下に基づき問題作成に当たる。

- ・共通テストの問題構成や基本的な考え方は、試行調査を原則踏襲しつつ、試験問題全体の難易度については、様々な難易度の設問をバランスよく組み合わせ、より適正となることを目指し、特に課題と考えられた第1問については、知識の理解を明快に問う問題を中心とする工夫をするなど、難易度が高くならないようにする方向で調整していく。

【化学】

1. 得点分布等に基づく分析

《受検者数等》

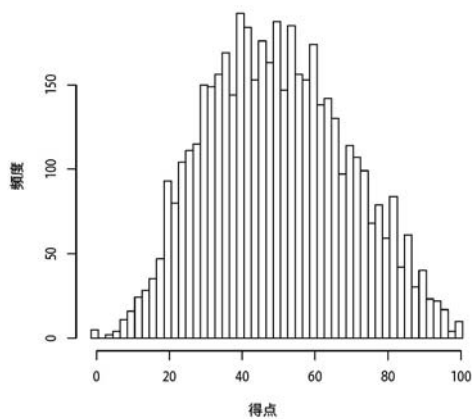
全受検者数 4,679人
 高校3年生 3,961人 (84.7%)
 高校2年生 718人 (15.3%)

《問題構成や設問数》

大問数 5題
 設問数 マーク式 30問

《得点の分布図等》

化学 (100点満点)



平均得点率 49.68% (50.77%)
 平均点 49.68点 (50.77点)
 標準偏差 19.31
 最高点 100点
 最低点 0点

※ 平均得点率及び平均点の括弧内は高校3年生のみを対象。

《設問正答率幹葉図》

平均正答率区間	設問数	設問番号	(部分正答等)
95%≤	(0)		
90%~95%	(0)		
85%~90%	(1)	2:1	
80%~85%	(1)	2:2	
75%~80%	(1)	2:4	
70%~75%	(2)	1:7, 2:6	
65%~70%	(1)	3:3	
60%~65%	(6)	1:1, 1:5, 1:6, 3:4, 3:7, 4:(2-3)	
55%~60%	(0)		
50%~55%	(2)	1:8, 1:9	
45%~50%	(2)	3:1, 5:4	
40%~45%	(4)	3:6, 4:6, 5:1, 5:(2-3)[13]*	
35%~40%	(4)	2:3, 2:5, 4:1, 4:5	
30%~35%	(2)	2:7, 5:5	
25%~30%	(2)	3:2, 4:4	5:(2-3)[1]
20%~25%	(1)	3:5	
15%~20%	(1)	1:(1,2-4)*	5:(2-3)[3]
10%~15%	(0)		1:(1,2-4)[4,132]
5%~10%	(0)		
<5%	(0)		1:(1,2-4)[1,751], 1:(1,2-4)[2,851], 1:(1,2-4)[3,112], 1:(1,2-4)[5,152]

※ 設問番号の「2:1」は、大問番号「2」、解答番号「1」を示す。

設問番号の後ろの[]内の文字列は選択肢を示す。

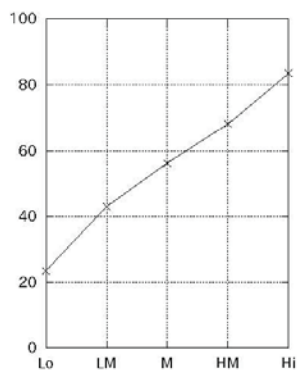
* は部分正答または正答の組合せが複数あるものを示す。

平均正答率 51.03%

《大問の五分位図》

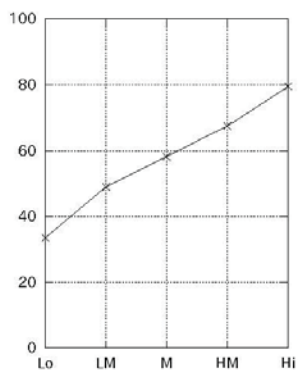
第1問

配点 26 点、平均 54.95%



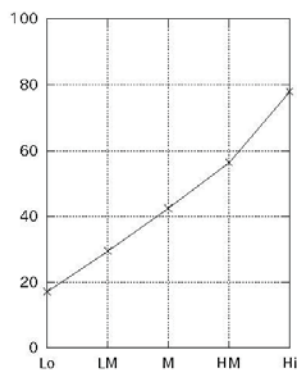
第2問

配点 20 点、平均 57.64%



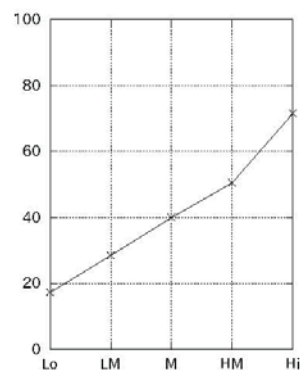
第3問

配点 20 点、平均 44.78%



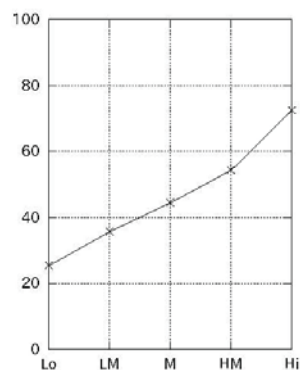
第4問

配点 19 点、平均 41.69%



第5問

配点 15 点、平均 46.57%



- 平均得点率（平均正答率）は5割程度に達した。受検者や目標平均得点率が異なるため、センター試験と一概に比較はできないものの、標準偏差は19.31であり、センター試験の過去3年間の標準偏差20.86～21.97と比較すると、得点分布の散らばりがほぼ同程度といえる。このことは、設問正答率幹葉図や各大問の五分位図からも伺える。
- 計算を必要とする設問において、必要な数値をマークさせる数値選択の問題の無解答率が、第1回試行調査ではいずれも高かったという前回の試行調査の分析を踏まえて、第2回試行調査では、この形式の出題を4問から1問（第1問問2）に減らした結果、全体的に無解答率は高くなかった。
また、無解答率が最も高かった第5問問4（8.42%）は、調査を行った11月では未習の内容であることが考えられ、1月であれば解答可能な、基本的な知識の理解を基に推論して答える問題として出題したものである。
- 各大問の五分位図からは、多様な学力層を識別していることが伺える。なお、第2問のLo群とHi群の得点率の差が小さくなったのは、Lo群の得点率が高かったためである。これは、第2問問1の基本的な知識・技能を問う問題において、Lo群の正答率が6割以上あったことが要因の一つであったと考えられる。

2. 小問ごとの分析

- 各小問と、当該小問を除いた全問題との間のピアソンの積率相関係数を算出し、さらに、五分位図により分析を行った。また、新たな出題形式等についても分析を行った。
 - （1）五分位図におけるLo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の問題
該当する問題はない。
 - （2）新しい出題形式等
 - ① 計算した結果等を解答する（数字穴埋め）問題
1問出題。五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。
 - ② 解答が前問の解答と連動し正答の組合せが複数ある問題
1問出題。計算した結果等を解答する（数字穴埋め）問題でもあるので、①とあわせて分析した。
 - ③ グラフを活用する問題
1問出題。五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。
 - （3）その他
 - ① 新たに得た情報と既習内容とを統合する問題
 - ② 資料を理解し、既習内容との整合性を判断する問題

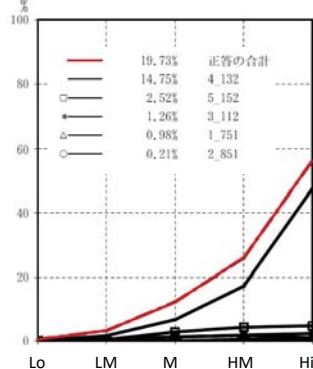
(2) 新しい出題形式等

- ①計算した結果等を解答する（数字穴埋め）問題
- ②解答が前問の解答と連動し正答の組合せが複数ある問題

第1問A問2
(解答番号2, 3, 4)

数字穴埋め
連動問題

正答率 19.73%



前問で答えたアルカンについて、表から読み取った燃焼熱を用いて、ヘスの法則から生成熱を求める問題である。それぞれのアルカンによって異なる生成熱が算出されるため、この問題では数字穴埋めの形式による解答が適している。

正答率は全問中で最も低く、Hi群の正答率は5割を超えているものの、その他の群では3割より低い結果である。無解答率は5.75%で全問中で2番目に大きい値であるが、本来、計算を含めて答えに至るまでに時間を要する問題であることも考慮すると、予想範囲内の正答率であった。

連動問題であるが、仮に前問で誤答をマークしても、選んだ答えから導かれる生成熱の数値が正しく求められていれば、この設問の配点どおりの点を与えた。

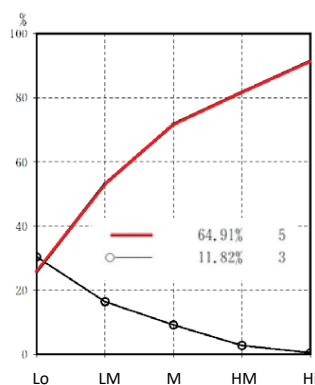
左の五分位図は赤色の線が正答として処理した合計を示しており、他の線は上から順に、前問で④、⑤、③、①、②をマークして得点となった正答率をそれぞれ示している。この図から、本来の正答の④以外をマークして得点した受検者が、M群で5.6%、HM群とHi群でそれぞれ8.7%いることが分かる。このことから、前問に応じて正答を変える配慮が有効であったと考えられる。

③グラフを活用する問題

第1問B問4
(解答番号6)

多肢選択 選択肢数6

正答率 64.91%



反応速度に関する実験の結果をまとめた表の空欄を補い、平均濃度と平均の反応速度の関係から方眼紙にグラフを描き、その傾きから反応速度定数を求める問題である。

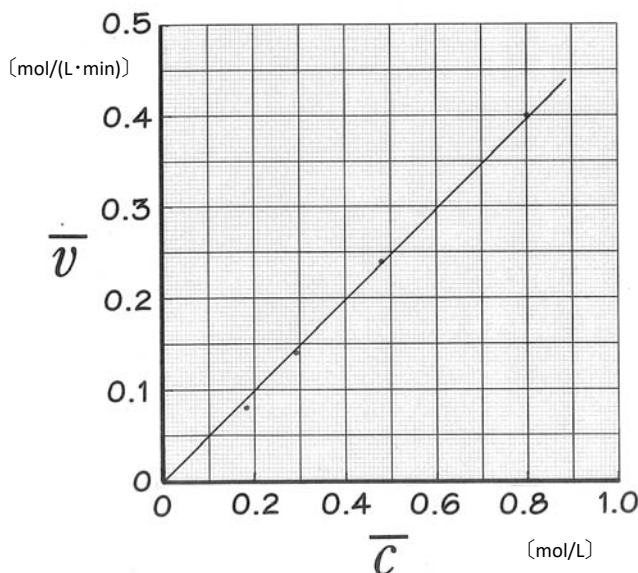
与えられた表のデータを全て処理して、方眼紙に4点記した上で直線を引くことが解法のプロセスであるが、予想以上に正答率が高いことから、受検者が表の空欄を補充しないで、すでに表示されているデータ（平均濃度0.29mol/Lのとき平均の反応速度0.14mol/(L・min)）のみを使って、反応速度式に代入して反応速度定数を求めていることが考えられる。このように、この問題では別の解法として方眼紙を使わなくても正答が得られるが、他の三つのデータも用いてそれぞれ反応速度定数を求め、合計四つの値を総合的に判断することが必要である、という教科指導が望まれる。

問4 表2の空欄[]を補うと、平均濃度 $\bar{c}$ と平均の反応速度 $\bar{v}$ の間には、次の式で表される関係があることがわかった。

$$\bar{v} = k\bar{c}$$

ここで、 k は反応速度定数(速度定数)である。この温度での k の値として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。なお、必要があれば、下の方眼紙を使うこと。 /min

- ① 0.008 ② 0.03 ③ 0.08 ④ 0.3
⑤ 0.5 ⑥ 2



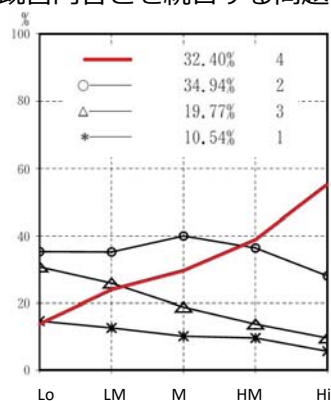
(3) その他

①新たに得た情報と既習内容とを統合する問題

第2問B問6 (解答番号7)

多肢選択 選択肢数4

正答率 32.40%

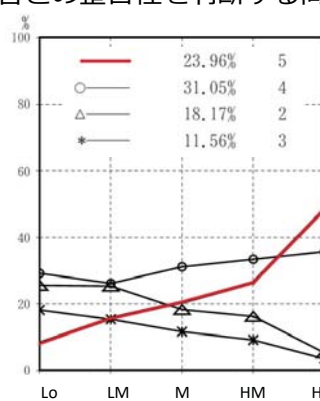


②資料を理解し、既習内容との整合性を判断する問題

第3問B問4 (解答番号5)

多肢選択 選択肢数6

正答率 23.96%



与えられた資料の理解を基に、無機物質の水への溶解性に関する既習内容からなる選択肢の内容と資料とを統合して考察する問題である。

1 ページにわたる長文の資料を理解する必要があり、4 択の問題にもかかわらず正答率は低い結果となった。図からどの群でも、3 割から 4 割程度の受検者が誤答として②をマークしていることが分かる。これは、既習事項である金属イオンと硫化水素との反応やアルミニウムイオンを塩基性にしたときの沈殿反応について、物質の化学式を考慮しないで単に知識として理解し、硫化水素の水溶液や塩基性の溶液中で生じている様々なイオンをイメージできていないことに加えて、選択肢②だけが 2 行にわたっていることが理由と考えられる。

有機化合物の合成実験の経過を記した資料の理解を基に、途中の生成物について呈色反応を判断する問題である。

全問題の中で正答率は 2 番目に低く、全ての群において 5 割以下となった。芳香族化合物において、出題した二つの呈色反応は基本的なものであり、約 55% の受検者が目的物質であるアセトアミノフェンに見られる呈色反応から④と⑤の二つに絞ることができているものの、さらに本問では研究途中で目的物質が得られない設定であり、実験による探究活動で順調に研究が進まないというような探究活動の経験がない受検者は戸惑ったのではないかと考えられる。

3. 有識者のコメント

大学関係者 6 名、高校関係者 3 名

○各問いの出題のねらいや、主に問いたい資質・能力が反映されていたかどうか

①評価すべき点

・作問のねらいを反映した、「思考力・判断力・表現力」を問う問題が出題されている。

②改善すべき点

・仮説を設定したり、その検証に向けた観察・実験計画を立てていく場面で求められる資質・能力があまり問われていないので、もう少し問う問題があってもよいのではないかと。

○科目の問題作成の方向性を踏まえ、題材の選定や問題の場面設定、出題形式等は適切だったかどうか

①評価すべき点

・カセットコンロ、海洋の酸性化などの身近な場面設定がされている。また、実生活と関連させにくい場面設定には、生徒の課題研究や化学の歴史的な扱いをして複数の資質・能力が各問いに埋め込まれる工夫がされている。

②改善すべき点

・問いの文脈と関連が薄い問いがあり、できれば流れの中で完結してもらいたい。
・方眼紙の補助線が小さすぎて見えないかも知れない。弱視の受検生に対する配慮が必要である。

○各科目の問題構成、設問数、内容、難易度等のバランスは適切だったかどうか

①評価すべき点

・最初に説明を丁寧にし、考える素材を十分に提供されている。設問数は適切で、内容は多くの資質・能力に対応している。全体の難易度も適切である。

②改善すべき点

・問いの説明が長いと批判があるかも知れないが、これは資質・能力を文脈の中ではかるという基本的な考えからすると仕方がないと思う。ただ、一つの文脈で多くの問いができるようにすると、この批判は軽減できるのではないかと。

4. 共通テストの実施に向けた方向性

- 第1回試行調査では思考力・判断力・表現力を問う問題を中心に出题した。今回は思考力・判断力・表現力を問う問題を主として、深い理解を伴う知識に関する問題や過去のセンター試験の問題のバランスを考慮して作問に当たり、目標に近い平均正答率となった。
センター試験の過去問から出题した問題の正答率を比較すると、センター試験よりも今回の試行調査の正答率の方が、15～25%低くなっていることから、共通テストの受検者の学力はもう少し高くなることが推測される。
- このことから、共通テストに向けて、試行調査の結果を踏まえて、設問数、思考力・判断力・表現力を問う問題と知識・技能を問う問題との出題数のバランス、各設問の難易度などを総合的に検討していくことが重要である。また、初見資料や実験操作などは問題文を精選して簡潔に表現することに留意する一方、例えば実験結果や文献などから必要なデータを抽出する能力をみることをねらいとした問題などもあることから、それぞれのねらいに応じた適切な分量を考慮しながら問題を作成する必要がある。

【生物】

1. 得点分布等に基づく分析

《受検者数等》

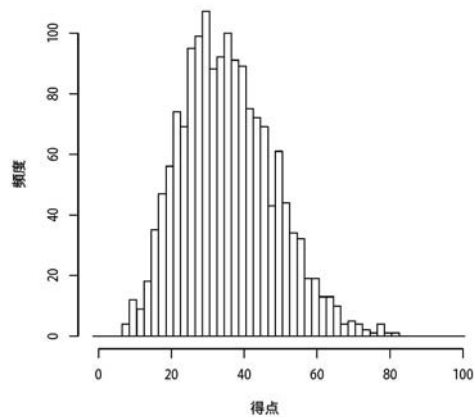
全受検者数 1,611人
 高校3年生 1,386人 (86.0%)
 高校2年生 225人 (14.0%)

《問題構成や設問数》

大問数 5題
 設問数 マーク式 27問

《得点の分布図等》

生物 (100点満点)



平均得点率	35.52% (36.05%)
平均点	35.52点 (36.05点)
標準偏差	12.75
最高点	81点
最低点	7点

※ 平均得点率及び平均点の括弧内は高校3年生のみを対象。

《設問正答率幹葉図》

平均正答率区間	(設問数)	設問番号	(部分正答等)
95%≧	(0)		
90%～95%	(0)		
85%～90%	(0)		
80%～85%	(0)		
75%～80%	(0)		
70%～75%	(0)		
65%～70%	(2)	2:1, 2:7	
60%～65%	(2)	2:2, 2:5	
55%～60%	(1)	5:4	
50%～55%	(1)	3:1	
45%～50%	(2)	1:1, 3:3	
40%～45%	(1)	5:2	
35%～40%	(3)	1:2[6]*, 1:3, 2:(3-4)[35]*	5:(6-7)[1]
30%～35%	(3)	4:2, 5:1[5]*, 5:5	2:(3-4)[3], 5:1[3]
25%～30%	(1)	4:(4-5)	2:10, 3:4[4], 5:(6-7)[5]
20%～25%	(2)	2:6, 4:6	3:4[6]
15%～20%	(3)	4:1, 4:3, 5:3	2:(3-4)[5], 2:9, 3:4[5]
10%～15%	(2)	3:2, 5:(6-7)[15]*	1:2[2], 1:2[3]
5%～10%	(4)	2:8, 2:(9-10)*, 3:4[7]*, 5:8	
<5%	(0)		5:1[1]

※ 設問番号の「2:1」は、大問番号「2」、解答番号「1」を示す。

設問番号の後ろの[]内の文字列は選択肢を示す。

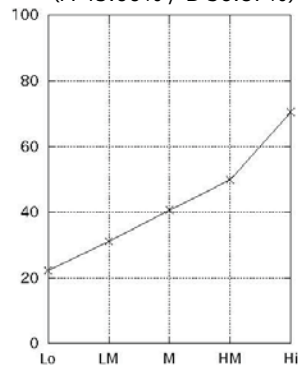
* は部分正答または正答の組合せが複数あるものを示す。

平均正答率 32.63%

《大問の五分位図》

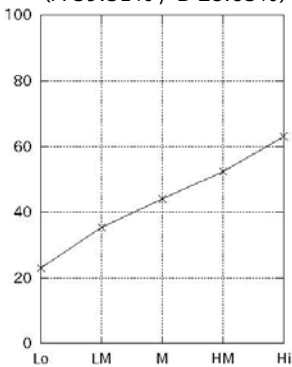
第1問

配点12点、平均42.97%
 (A 45.00% / B 36.87%)



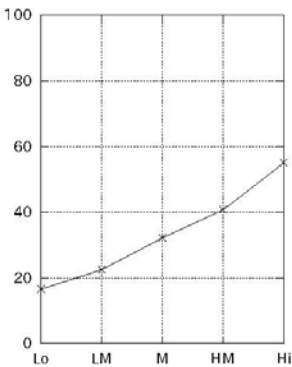
第2問

配点30点、平均43.65%
 (A 59.31% / B 28.03%)



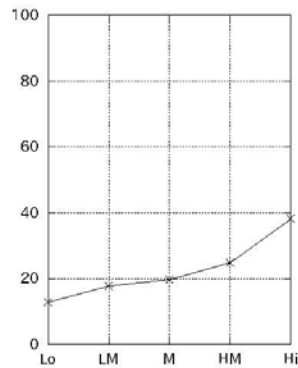
第3問

配点14点、平均33.54%



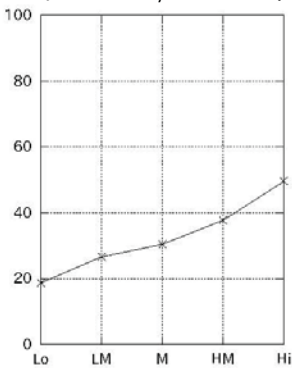
第4問

配点18点、平均22.64%



第5問

配点26点、平均32.65%
 (A 34.86% / B 31.03%)



- 本調査の作問については、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月21日）において、「教材で扱われる用語が膨大となっていることが指摘される中で、科目のねらいを実現するため、主要な概念につながる重要用語を中心に整理する」とされたことを踏まえ、生物では、第1回調査の問題と同様に、思考力・判断力・表現力等を重視した問題を中心とし、一部に深い理解を伴う知識を問う問題も含めた構成とした。
- 平均得点率（平均正答率）は、5割程度には達しなかった。正答率が70%を超えた設問はなく、20%未満の設問は27問中9問あった。生物では、いくつかの思考・判断等の過程を経て解答に至る設問を六つ出題したところ、三つの設問では正答率が15%※部分正答を除くを下回った。また、標準偏差は12.75で、過去3年間のセンター試験17.65～20.00と比較すると低くなっているが、平均正答率が極端に低く、平均正答率70%以上の設問がなかったことが要因と考えられる。これらの結果は、新しい傾向・分野融合の問題では難度が高くなりやすいことや、受検者が未習の内容も含めた問題の構成であったことなどが大きな要因と考えられる。これらを踏まえ、共通テストにおける問題の難易度等の構成や部分点の設定を含めた配点などについて決定していく必要がある。
- 各大問の五分位図からは、目標とする平均得点率（平均正答率）に影響を与えた大問が見受けられた。具体的には、第4問や第5問において、Hi群とLo群における得点率の差が20ポイント程度かつ、Hi群の得点率でも6割を超えていない状況となっている。これは、受検者が既知ではない資料の活用や、複数の分野を融合して思考・判断することに受検者が十分に対応できなかったことが要因と考えられる。
- 設問別無解答率については、全体的には低かったが第5問問7が約7%となった原因としては、高校3年生の受検者でも11月の時点で未習の内容であった可能性が高い。また、次に高かった第4問の問5の約3%については、教科書の複数の単元の内容を統合して思考・判断等をすることが求められたため、受検者が解答を断念した可能性が考えられる。

2. 小問ごとの分析

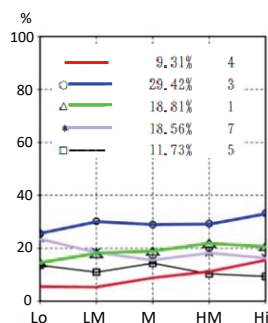
- 高校3年生の受検者の割合が前回の試行調査と比較して低下（前回【約92%】→今回【約86%】）した。11月に本調査を実施しており、高校3年生は実際の大学入試に向けて学力が伸びる可能性がある時期であること、高校2年生では多くの未習の内容があることから、実際に試験を実施する高校3年の1月よりも今回の調査の正答率が低くなっている可能性が高いことを十分に考慮しつつ、極端に正答率が低かった設問や、正答率の低かった教科書の単元の内容に留意して、得点の分布図がかなり左に偏って低かったという結果を踏まえ、分析を進めた。
- 各設問の正答率※部分正答を除くと、当該の設問を除いた全設問の平均正答率との間のピアソンの積率相関係数を算出し、更に五分位図により分析を行った。また、新たな出題形式等についても分析を行った。
 - （1）五分位図におけるLo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の問題（複数の解答がある設問では完全正解の場合の正答率で抽出）
 - * 5問あり、このうち、1問について、五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。
 - （2）新しい出題形式等
 - ① 複数の情報を整理・統合するなどして、段階的に思考・判断等させる問題
 - （3）その他
 - ① 写真の図を基に、立体的に構造を捉えて判断する問題
 - ② 調査結果のデータから適切なグラフの変化を見いだす問題

(1) 五分位図におけるLo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の問題

第2問B問7
(解答番号8)

多肢選択
選択肢数8
(語句の組合せ)

正答率 9.31%



植生と遷移や気候とバイオームなどに関する理解を基に、未知の植物に係る複数の情報を整理し、その原種が生息している場所を推論する問題である。三つの事象を特定するため、複数の情報を統合して判断をする必要があり、複数の概念化された知識を活用して複数の思考・判断を要する、新しい出題傾向の難しい問題である可能性がある。

昨年度と同様に、生物基礎の深い理解を伴う知識と思考力・判断力が求められる問題として難度を下げて出題したが、文中の「日当たり」という語句から選択肢にある「ギャップ」を特定するなど、知識の定着が十分ではないことも見受けられた。ただし、新テストの趣旨に沿った問題であり、識別力を上げるためには必要な情報を更に示すなどの工夫が必要である。

(2) 新しい出題形式等

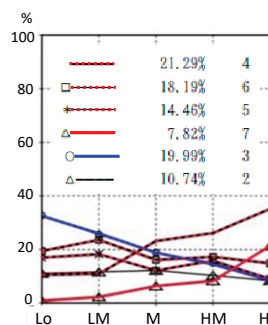
①複数の情報を整理・統合するなどして、段階的に思考・判断等させる問題

第3問問4
(解答番号4)

多肢選択
選択肢数7
(過不足なく含む)

正答率 7.82%

(選択肢⑦のみ)



ホメオティック遺伝子の働き方について、示された情報やショウジョウバエの変異体の知見を基に、チョウの形態形成のメカニズムに係る複数の仮説の妥当性を判断する必要があり、受検者にとって新しい出題傾向となり難しい問題であるとともに、過不足なく含むものを選ぶ問題で、難度が高くなった可能性がある。

新テストの趣旨に沿った思考力・判断力等が必要となる問題であったが、識別力を上げるためには思考・判断する際に参考となる内容を更に示すなどの工夫が必要である。

なお、思考・判断等の過程を段階的に評価するため、選択肢4・5・6に部分点を設定したことにより、完全正解と部分正解を合わせた平均得点率は27.13%となった。部分点については、適切に設定していく必要がある。

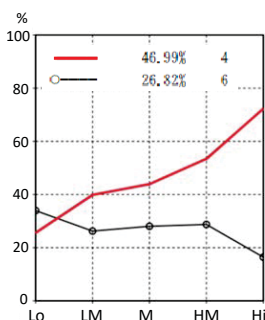
(2) その他

①写真の図を基に、立体的に構造を捉えて判断させる問題

第1問A問1
(解答番号1)

多肢選択
選択肢数6

正答率 46.99%



骨格筋（横紋筋）の構造について、筋肉の筋原繊維が収縮する仕組みに関する理解を基に、缶詰のツナを用いた標本の顕微鏡観察写真から、筋原繊維の構造についての情報を抽出し、筋繊維におけるその分布を特定する問題である。過去のセンター試験において、写真ではなく模式図で出題したときの正答率が約6割であったことを踏まえると、今後、探究的に学習が進む授業改善の取組が浸透すれば、共通テストに向けて、更に多くの受検者が正答を見いだすことができるようになると期待される種類の問題でもある。

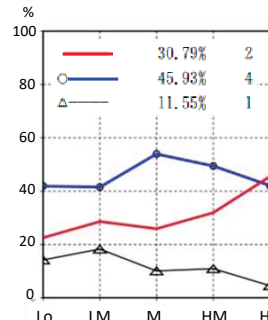
新テストの趣旨に沿った主体的で探究的な取組を題材とした問題であり、このような形式は今後も継続的に出題する必要がある。

②調査結果のデータから適切なグラフの変化を見いださせる問題

第4問問2
(解答番号2)

多肢選択
選択肢数6

正答率 30.79%



ある地域に生息しているリスについて、個体群とその変動に係る理解を基に、生命表のデータを処理して作成したグラフを特定する問題である。初見の資料から、生命表の値を適切に捉え、整理・統合するなど、複数の段階にわたる思考・判断等が必要であり、受検者にとって新しい出題傾向の難しい問題であることは想定されたが、想定よりも低い正答率になった。グラフの縦軸の相対値を十分に把握せず、既知のグラフ曲線（選択肢④）を選んだ可能性がある。

新テストの趣旨に沿った主体的で探究的な取組を題材とした問題であり、観察・実験を実施するに当たり、方法を再現する中で様々な処理等について十分に理解して実行することを重視していくことが求められる。

3. 有識者コメントの概要 大学関係者 4 名、高校関係者 3 名

○各問いの問題のねらいや、主に問いたい資質・能力が反映されていたかどうか

①評価すべき点

- ・読解力なども含め、「高校教育の成果として身に付けた」という観点が重要だと分かる。
- ・保健での学習を題材に教科横断的である点や課題を探究する方法を示唆している点が評価できる。

②改善すべき点

- ・問題文を減らし、選択肢を少なくするなどして、じっくりと思考できるようにした方がよい。

○科目の問題作成の方向性を踏まえ、題材の選定や問題の場面設定、出題形式等は適切だったかどうか

①評価すべき点

- ・学習指導要領の大項目間（教科書の複数の大単元）にまたがる問題が多く出題されている。
- ・「過不足なく含むもの」を選ぶ問題などで、段階的に部分点を設定している。

②改善すべき点

- ・図表に示されたデータを読み取ったり思考したりするために時間を要する問題が多かった。解答時間が60分であることなどを考慮して、更に図に説明などを加えるとよい。

○各科目の問題構成、設問数、内容、難易度等のバランスは適切だったかどうか

①評価すべき点

- ・生物全体として難易度や設問数、内容等のバランスがよい。
- ・小学校から高等学校までの幅広い知識を統合して考察するよう考えられている。

②改善すべき点

- ・問題量はやや多く、難易度は全体で見るとかなり難度が高かったので、更なる精査が必要である。
- ・高校の授業で扱うことがない語句は使用せず、平易な文章で解説した方が受検生が理解しやすい。
- ・分かりやすく短い説明に基づき、基本的な概念の理解とそれを用いた考察を求める形式がよい。
- ・選択肢が系統的に記述され、選択肢の数も4つに限られていると、考察しやすい。

4. 共通テストの実施に向けた方向性

○ 以上の分析を踏まえ、共通テストの実施に向けては、以下に基づき問題作成に当たる。

- ・科学的な探究の過程を重視するという方向性は維持しつつ、問題の分量（文字数や資料の数など）については、受検者が思考力・判断力・表現力等を重視した問題などの内容を理解して解答に至る時間が十分に確保できていない状況にあることなどを踏まえ、文章を精査するとともに、資料の示し方や提示する箇所についても工夫するなど、更に見直しを進めることとする。
- ・問題全体の構成については、これまでのセンター試験と同様に学習指導要領に示された五つの大項目の内容を網羅することとするが、いわゆる教科書の単元に則した大問を配置・設定するのではなく、複数の内容を融合した大問なども設定することとする。なお、選択問題は設定しない。
- ・全設問数については、試行調査における設定を目安とすることとする。
- ・深い理解を伴う知識を問う問題については、生物用語を直接的に問うような問題とならないよう工夫すること、思考・判断をする過程で段階的に活用する概念的な知識を問うことなどに十分に留意し、全設問数に占める割合を更に増やすこととする。なお、概念的な知識には、中学校理科や生物基礎で獲得し、系統的に理解しておくべきものも含まれる。
- ・思考力・判断力等を問う問題で、複数の分野の内容や知識を融合したり、解答に至る過程で複数の思考・判断を要したり、過不足なく含むものを選ぶなど、難易度が比較的に高くなる可能性がある場合には、導入的な知識などを問う問題と思考力・判断力等を問う問題などに分けて内容を問うたり、段階的に部分点を設定したりするなどの工夫を行うこととする。探究活動や授業の場面を取り上げたり、分野を横断した内容を取り扱ったりする新しい傾向の問題については、試行調査における正答率は比較的低いが、高大接続改革の趣旨を踏まえ、継続的に作成していくこととする。

【地学】

1. 得点分布等に基づく分析

《受検者数等》

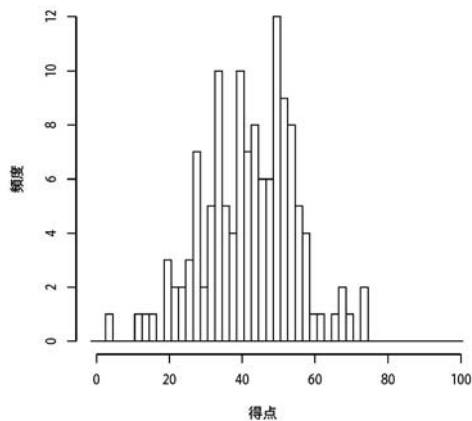
全受検者数 130人
 高校3年生 130人 (100.0%)
 高校2年生 0人 (0.0%)

《問題構成や設問数》

大問数 5題
 設問数 マーク式 29問

《得点の分布図等》

地学 (100点満点)



平均得点率 42.02% (42.02%)
 平均点 42.02点 (42.02点)
 標準偏差 12.76
 最高点 74点
 最低点 3点

《設問正答率幹葉図》

平均正答率区間	(設問数)	設問番号
95%~	(0)	
90%~95%	(0)	
85%~90%	(1)	4:1
80%~85%	(0)	
75%~80%	(1)	1:2
70%~75%	(1)	3:3
65%~70%	(1)	3:2
60%~65%	(2)	1:7, 3:5
55%~60%	(0)	
50%~55%	(1)	4:(4-5)
45%~50%	(4)	1:4, 2:1, 2:6, 4:2
40%~45%	(4)	1:1, 1:5, 2:2, 5:2
35%~40%	(4)	2:4, 3:6, 5:1, 5:4
30%~35%	(3)	2:5, 4:3, 5:5
25%~30%	(2)	3:1, 4:6
20%~25%	(2)	1:3, 2:3
15%~20%	(2)	1:6, 5:3
10%~15%	(0)	
5%~10%	(1)	3:4
<5%	(0)	

※ 設問番号の「2:1」は、大問番号「2」、解答番号「1」を示す。

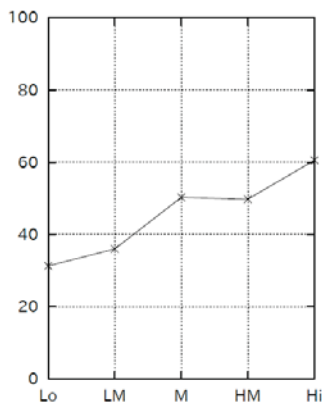
平均正答率 42.65%

※ 平均得点率及び平均点の括弧内は高校3年生のみを対象。

《大問の五分位図》

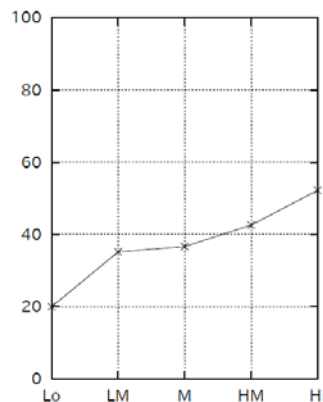
第1問

配点 21点、平均 45.61%



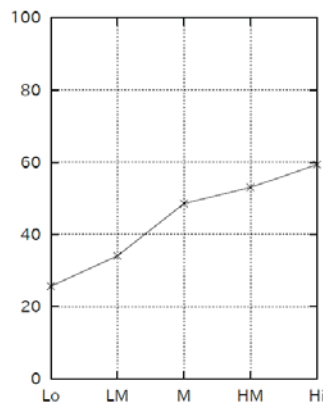
第2問

配点 20点、平均 37.27%



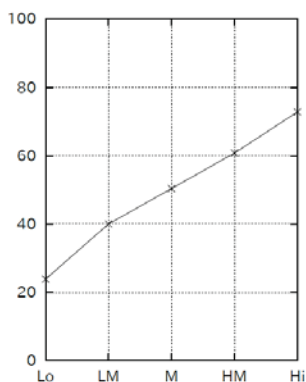
第3問

配点 19点、平均 44.21%



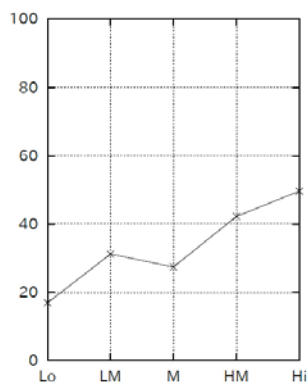
第4問

配点 20点、平均 49.54%



第5問

配点 20点、平均 33.38%



- 平均得点率（平均正答率）は5割程度には達しなかった。設問ごとの正答率では、5割を超える問題が29問中7問と全体の約2割5分程度であることから、正答率が中～高程度の問題数が少なかったと考えられる。得点の分布は、74点が最高点であることから推測されるように、平均を中心として左にやや裾の長い分布となっている。高得点の者が存在しなかった理由については、受検者が130人しかいなかったことから、学力層に偏りがあったためか、あるいは試験問題がかなり難易度の高いものであったためかの両方の可能性を考慮する必要がある。標準偏差は12.76であるが、目標平均得点率が異なるため、センター試験と一概に比較はできないものの、センター試験の過去3年間の標準偏差15.77～21.50と比較すると、得点分布の散らばりがかなり小さい。多様な学力層を識別するためには、正答率が中～高程度の問題を一定数含む様々な難易度の問題からなる試験問題とする必要がある。
- 各大問の五分位図からは、目標となる平均得点率（平均正答率）に影響を与えた大問が見受けられた。具体的には、第1問は基本的な知識を問う問題で構成し、いずれもセンター試験の過去問と類似の内容を扱っているが、Hi群においても6割程度の得点率であった。なお、他の大問についても、得点率のかなり低い設問が複数あった。

2. 小問ごとの分析

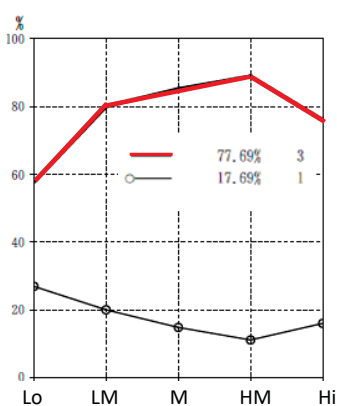
- 各小問と、当該小問を除いた全問題との間のピアソンの積率相関係数を算出し、さらに、五分位図により分析を行った。また、新たな出題形式等についても分析を行った。
- (1) 五分位図におけるLo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の問題
受検者が130人であり、これを五つに層別すると各25人程度となる。正答率の変動がかなり大きくなるため、解釈には注意が必要である。
- (2) その他
 - ① 数理的な推論を行う問題
 - ② 基礎的な知識と空間的な理解を問う問題

(1) 五分位図におけるLo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の問題

第1問A問2
(解答番号2)

多肢選択
選択肢数4

正答率 77.69%

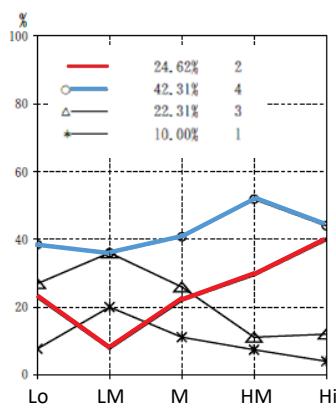


Lo群の正答率が57.69%、Hi群が76.00%であり、これらの差が20ポイントを下回っている。ただし、HM群の正答率は88.89%であり、Hi群を上回っている。設問は、海水中のイオンに関するものであり、化学基礎の内容でもあるため、基礎を付した科目の履修状況が影響した可能性がある。

第1問A問3
(解答番号3)

多肢選択
選択肢数4

正答率 24.62%

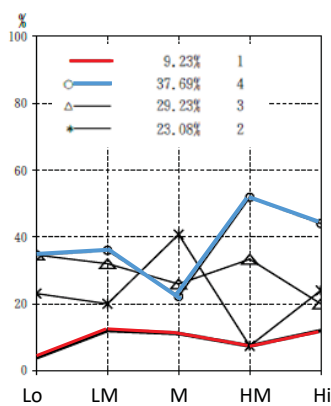


地球の歴史における大気組成の変化についての設問である。誤った記述を選ぶ問題であり、正答（誤った記述）は、「原生代前期に光合成をおこなう生物が陸上に進出したため、大気中の酸素は急激に増加した」というものである。正しくは、海中の生物により光合成がおこなわれたのであるが、別の選択肢4を選んだ受検者が全ての層で多かった。

第3問問4
(解答番号4)

多肢選択
選択肢数4

正答率 9.23%

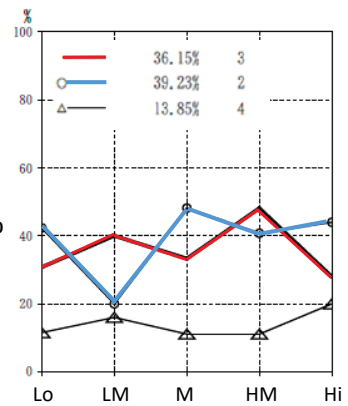


地質図を読み取り、そこに示された複数の情報から露頭での地層の様子を推論する問題である。複数の情報を考慮しながら、かなり複雑な空間的推論をおこなう必要があり、難しい問題となった。正答率は9.23%であり、Hi群においても12.00%の正答率しかない。直接解答を求めるのはかなり難しく、受検者にとって適切難易度とするためには、誘導を設定するなどの必要があるものと思われる。

第5問B問4
(解答番号4)

多肢選択
選択肢数4

正答率 36.15%



金星探査機を話題として、太陽からの距離と単位面積当たりの熱量との関係を問うものである。この熱量が距離の2乗に反比例することは、数理的な知識があれば比較的容易に推論されると思われる。Lo群での正答率が30.77%であるが、Hi群では28.00%であり、Lo群の方が高い正答率となっている。ただし、HM群では、48.15%の正答率があった。

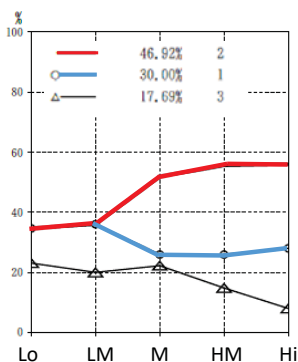
(2) その他

①数理的な推論を行う問題

第2問問6
(解答番号6)

多肢選択
選択肢数4

正答率 46.92%



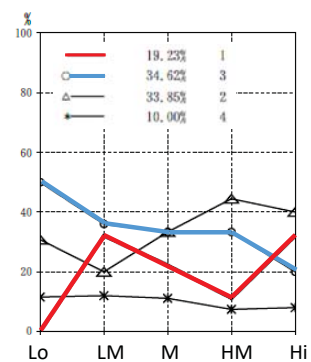
プレートの沈み込みに素材をとった問題であるが、この分野についての詳細な知識は必要とせず、図に示された情報から、沈み込みの速さ、プレートの年齢、沈み込みの角度の三つの変数の関係について、適切な記述を選択するものである。全体の正答率は46.92%であるが、Lo群で34.62%、Hi群で56.00%であり、差が小さい。第1回試行調査においては、海水の蒸発に関して三つの変数の関係をグラフから読み取らせる問題を出題したが、そこでの正答率は12.6%であった。問題の呈示を丁寧にし、変数の関係を線形に限定することにより、正答率は向上したものと思われる。この設問は、分野に固有の知識に依存する程度は低く、より一般的な数理的な理解力を問う色合いが強いため、他の設問の得点との関係が低くなったものと推測される。

②基礎的な知識と空間的な理解を問う問題

第5問A問3
(解答番号3)

多肢選択
選択肢数4

正答率 19.23%



金星の地球からの見え方に関する基礎的な知識と、空間的な理解を問う問題である。記述された見えの状況において、太陽、地球、金星の相互の位置を答えさせるものであるが、Lo群で金星の位置を誤って解答するものが多く、Hi群では、東方最大離角を誤って西方最大離角と解答するものが多かった。

3. 有識者のコメント

大学関係者 5 名、高校関係者 3 名

(1) 各問いの問題のねらいや、主に問いたい資質・能力が反映されていたかどうか

①評価すべき点

- ・冗長的なリード文が少なくなり、前回の試行調査と比べて場面設定等に無理がなくなっていると思われる。また、問題のねらいやどのような能力を問おうとしているのかが、前回の試行調査に比べて明確になっている。
- ・「思考力・判断力・表現力」を問う問題が含まれて、全体的にバランスのとれた内容になっており評価できる。

②改善すべき点

- ・教科書に載っていない内容については、受検生の科学的な素養を問うために、もっと扱った方がいいように思われる。
- ・今後も知識を問う問題だけでなく、野外観察や実験から具体的に学ぶ過程を注視した問題作成に取り組んでいただきたい。

(2) 科目の問題作成の方向性を踏まえ、題材の選定や問題の場面設定、出題形式等は適切だったかどうか

①評価すべき点

- ・第1問Aの図1「岩石Xに関連した学習内容のつながり」については、解答のためには横断的な知識が必要となり、新しいスタイルとして評価できる。
- ・第3問は地質調査を基にしており、図表を提示しながら、野外観察の情報採取からはじまり、探究活動における推論および検証にいたる過程を経て、課題解決する力を問う問題となっており、今後もこういった問題を出題していただきたい。
- ・第5問は全体的に正しい空間認識力が必要で受検生にとっては難しい問題であったと思われるが、問5は誤差や円周の違いなど総合的に考える必要があり、グラフの分析力と、問題で想定されている状況を正しく理解する思考力・判断力が必要な良い問題である。

②改善すべき点

- ・第3問の問4に関しては、過去の問題と照らして新しいタイプの問題として注目されるが、受検生は解答するのに戸惑ったと考えられる。解答を導くにあたって、「走行方向では傾斜面は水平に見る」ことを示すモデル図があってもよかったのではないかと感じた。
- ・初見の資料等を用いた思考力・判断力を問う問題については、様々な切り口の設問を用意して、様々な視点からのバリエーション豊富な問題作成することが、いろいろな資質・能力を測る上で重要であると感じた。

(3) 各科目の問題構成、設問数、内容、難易度等のバランスは適切だったかどうか

①評価すべき点

- ・思考力・判断力を問う問題について、ややレベルが高いと感じるものもあるが、奇をてらった問題はなく、難易度は適切であったと考える。
- ・第3問は全体的に課題研究の過程を研究記録をもとに構成してあり、「観察、実験などを通して探究の過程をたどらせることによって科学の方法を習得させ、地学的に探究する能力と態度を育てる」という科目の目標の考え方にも合致しており評価できる。

②改善すべき点

- ・受検生が問題を解きながら、次第に考えを深化させていくためには、関連した設問構成が望ましいと考える。探究的なストーリーの中に、知識・技能を問う問題、思考力・判断力を問う問題を織り交ぜるのが適切と考える。
- ・地学基礎と比べて、思考力・判断力を問う問題が少ないように思われたので、もう少しあっていいのではないかと。
- ・設問毎の問題文が長いので、問題を読んで内容を理解する時間が必要であり、標準的な受検生が時間内に解答できるぎりぎりの問題構成と感じた。これ以上、思考力・判断力を問う問題を増やす場合は、問題文を短くするなどの配慮が必要である。

4. 共通テストの実施に向けた方向性

- 地学の受検者は130人であり、全ての受検者が高校3年生であった。11月に試行調査を実施しており、本番の入学試験に向けて点数が伸びる可能性があること踏まえる必要はあるが、設問の正答率はかなり低いものが多く、29問のうち、正答率が5割を超えたものは、7問にとどまる。4割台の正答率のものは8問あるが、残り14問は4割に満たない。また、科目得点との相関の小さい設問も比較的多く、相関係数が0.1を下回るものが9問あった。これらのうち3問は正答率が3割を下回るものであったが、他の6問は3割以上の正答率があるにもかかわらず、科目得点との低い相関を示した。これは正答率が低い問題があったことや、地学の特質として、互いに異質な広い分野から構成される科目であることが相関を下げる要因になった可能性があることが考えられる。
- 第1回試行調査においては、三つの値の関係性をグラフから読み取る問題の正答率が際立って低かった。これと類似の数理的な推論を行う設問を今回も出題したが、前回と比べて問題の呈示を丁寧にし、変数の関係を線形に限定したことから正答率はかなり向上した。

以上の分析を踏まえ、共通テストの実施に向けては、以下に基づき問題作成に当たる。

- ・ 科学的な探究の過程を重視するという方向性は維持しつつ、問題の分量（文字数や資料の数など）については、受検者が思考力・判断力・表現力等を重視した問題などの内容を理解して解答に至る時間が十分に確保できていない状況にあることなどを踏まえ、文章を更に精査するとともに、資料の示し方や提示する箇所についても工夫するなど、更に見直しを進めることとする。
- ・ 全設問数については、試行調査における設定を目安とすることとする。
- ・ 思考力・判断力等を問う問題で、解答に至る過程で複数の思考・判断を要するなど、難易度が比較的に高くなる可能性がある場合には、複数の設問に分けて内容を問うたり、段階的に部分点を設定したりするなどの工夫を行うこととする。また、新しい傾向の問題については、試行調査における正答率は比較的低いが、高大接続改革の趣旨を踏まえ、継続的に作成していくこととする。

【英語（筆記［リーディング］）】

1. 得点分布等に基づく分析

《受検者数等》

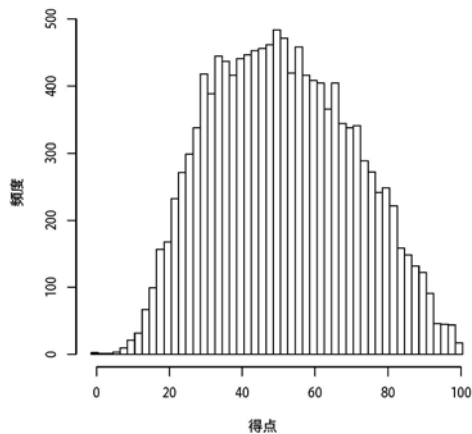
全受検者数 12,990人
 高校3年生 10,681人（82.2%）
 高校2年生 2,309人（17.8%）

《問題構成や設問数》

大問数 6題
 設問数 マーク式 37問

《得点の分布図等》

英語（筆記［リーディング］）（100点満点）



平均得点率	51.25% (51.15%)
平均点	51.25点 (51.15点)
標準偏差	19.43
最高点	100点
最低点	0点

※ 平均得点率及び平均点の括弧内は高校3年生のみを対象。

《設問正答率幹葉図》

平均正答率区間	設問数	設問番号
95%≧	(0)	
90%～95%	(0)	
85%～90%	(4)	1, 6, 7, 16
80%～85%	(2)	4, 11
75%～80%	(2)	3, 5
70%～75%	(1)	18
65%～70%	(3)	8, 22, 26
60%～65%	(3)	15, 17, 19
55%～60%	(6)	2, 9, 10, 20, 23, 39
50%～55%	(3)	14, 35, 43
45%～50%	(4)	13, 21, (24-25), 37
40%～45%	(2)	12, 33
35%～40%	(2)	38, 40
30%～35%	(0)	
25%～30%	(1)	36
20%～25%	(1)	(27-31)
15%～20%	(2)	34, (41-42)
10%～15%	(0)	
5%～10%	(1)	32
<5%	(0)	

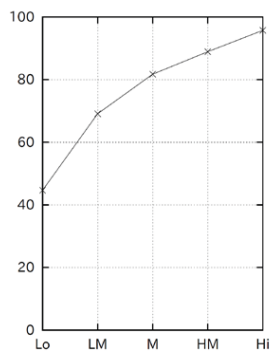
※ 設問番号は、解答番号を示す。

平均正答率 56.37%

《大問の五分位図》

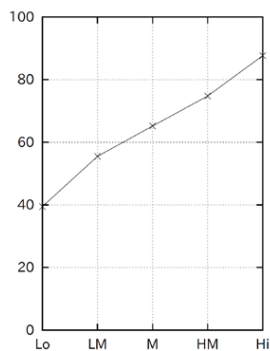
第1問

配点 10 点、平均 76.18%



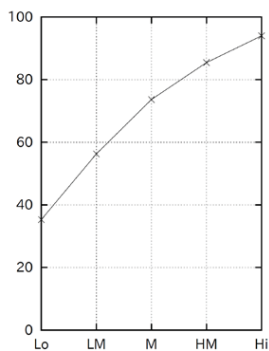
第2問

配点 20 点、平均 64.56%



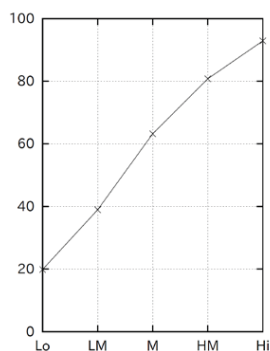
第3問

配点 10 点、平均 69.03%



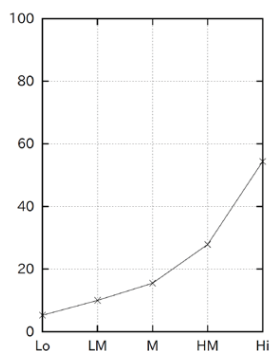
第4問

配点 16 点、平均 59.19%



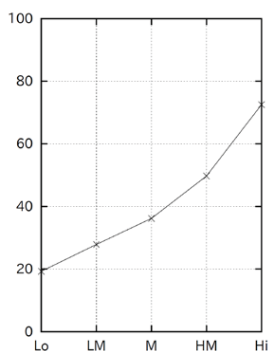
第5問

配点 20 点、平均 22.50%



第6問

配点 24 点、平均 41.05%



- CEFRレベル別の正答率は次のとおり。

CEFRレベル	A1程度	A2程度	B1程度
正答率	72.84%	65.08%	42.01%

- 平均得点率（平均正答率）は5割程度に達した。受検者数や目標平均得点率が異なるため、センター試験と一概に比較はできないものの、センター試験の過去3年間の標準偏差、20.60～22.47（100点満点換算時）と比較すると、得点のばらつきはやや小さい。また、設問正答率幹葉図からは、様々な難易度の問題が含まれていることが分かることから、多様な学力層を識別しているものと考えられる。なお、無解答率は後半の設問でやや増加傾向を示したが、全体的には低かった。
- 大問の五分位図からは、多様な学力層を識別していることがうかがえる。
 全ての大問で、Lo群とHi群の得点率の差が20ポイントを超えている。
 全ての大問で、Hi群の得点率が5割を超えているが、第1問～第4問は、昨年度同様、Hi群の得点率は8割を超えている。第4問～第6問がB1程度の問題であるが、第4問の得点率が想定よりも高くなった理由として、紛れの少ないシンプルな選択肢が多かったことが考えられる。
- 2年生の平均点が3年生を0.60点上回る結果となったが、今回、学校規模別の受検者数の調整を学年別には行わなかったことの影響があったものと考えられる。

2. 小問ごとの分析

- 各小問と、当該小問を除いた全問題との間のピアソンの積率相関係数を算出し、さらに、五分位図により分析を行った。また、新たな出題形式等についても分析を行った。
- （1）五分位図におけるLo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の問題
 該当する問題はなかった。
- （2）新しい出題形式等
 ① 当てはまる選択肢を全て選択する問題
 3問出題。五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。
- （3）その他
 ① 正答率が低かった問題
 ② 書き手の意図を問う問題
 ③ 事実と意見に整理する問題
 ④ 事実と意見に整理し、必要な意見を把握する問題
 ⑤ 誤答選択肢の選択率が高い問題

(2) 新しい出題形式等

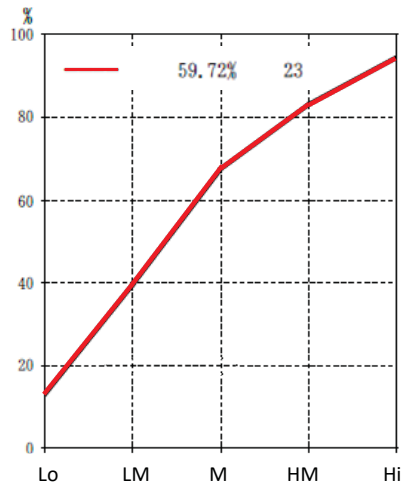
①当てはまる選択肢を全て選択する問題

第4問問3

(解答番号23)

多肢選択
選択肢数 4
全て選ぶ
完答
(正答二つ)

正答率 59.72%



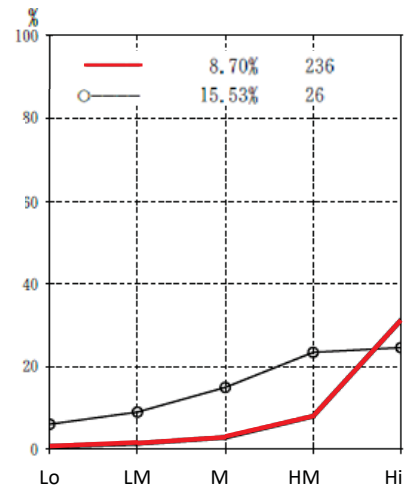
Lo群とHi群の正答率の差が80ポイント以上。全ての群の識別に寄与している可能性がある。問題の内容や選択肢がシンプルであったため、適切な難易度であった。なお、当てはまる選択肢を全て選択する問題については、マークの読み取り方など、実施上の課題も併せて検討する必要がある。

第5問問2

(解答番号32)

多肢選択
選択肢数 6
全て選ぶ
完答
(正答三つ)

正答率 8.70%



Lo群とHi群の正答率の差は約30ポイント。正答を三つ選択しなければならないため、難易度が高いテスト項目となった。選択肢3のaffordableの意味がわからない受験生が少なかった可能性がある。なお、当てはまる選択肢を全て選択する問題については、マークの読み取り方など、実施上の課題も併せて検討する必要がある。

(3) その他

①正答率が低かった問題

第6問A問2

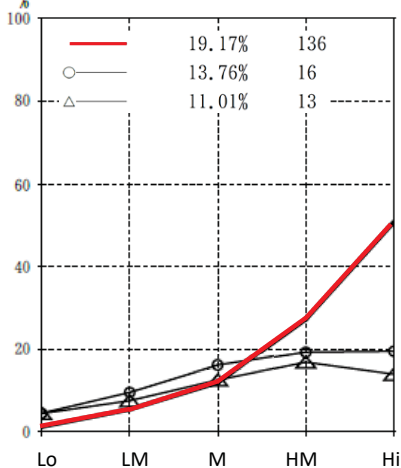
(解答番号36)

第5問問4

(解答番号34)

多肢選択
選択肢数 6
全て選ぶ
完答
(正答三つ)

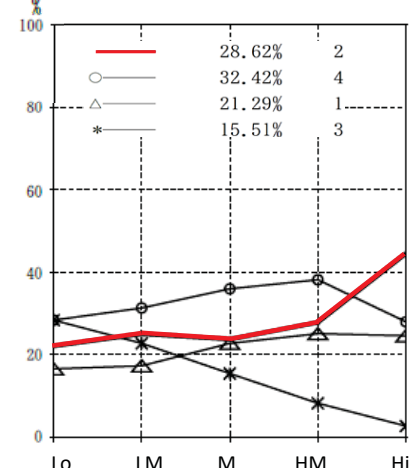
正答率 19.17%



Lo群とHi群の正答率の差が約50ポイント。特に、Hi群の識別に寄与している可能性がある。しかし、正答を三つ選択しなければならないため、難易度が高いテスト項目となった。なお、当てはまる選択肢を全て選択する問題については、マークの読み取り方など、実施上の課題も併せて検討する必要がある。

多肢選択
選択肢数 4

正答率 28.62%



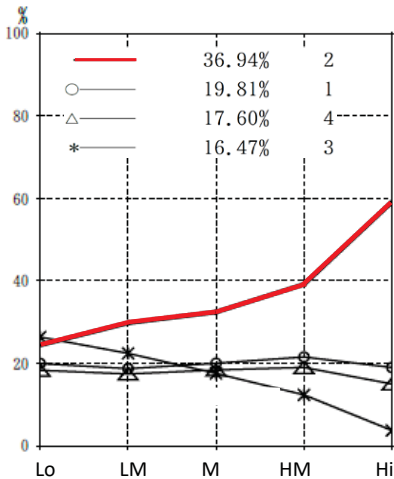
Lo群とHi群の正答率の差が約22ポイント。Hi群でも正答率が44.56%と低かったが、Hi群の識別に寄与している可能性がある。選択肢4が錯乱肢として予想以上に強く機能したが、その他の選択肢も機能した。これは、設問中のlittle differenceを否定表現だと把握できないケースが少なくなかった可能性が考えられる。高等学校での指導において留意したい事項である。

①正答率が低かった問題

第6問B問2
(解答番号40)

多肢選択
選択肢数 4

正答率 36.94%



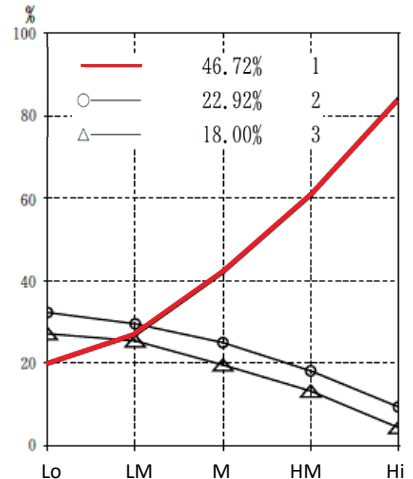
Lo群とHi群の正答率の差が約35ポイント。Hi群でも正答率が59.14%と低かった。難問となった理由として、新形式の設問であったこと、wolfとelk両方の情報を理解する必要があったこと等が考えられる。選択率を見る限り、正答選択肢2が最も高く、誤情報を一つ含む選択肢1及び4の選択率が同等で、誤情報を二つ含む選択肢3の解答率が最も低かったことから、問題としてはうまく機能したと考えられる。

②書き手の意図を問う問題

第6問A問3
(解答番号37)

多肢選択
選択肢数 4

正答率 46.72%



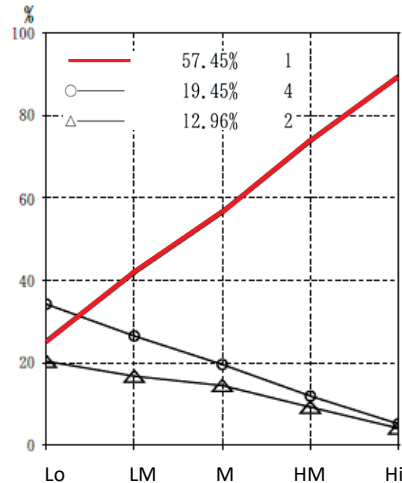
Lo群とHi群の正答率の差が約64ポイント。書き手の意図を問う問題を出題した。選択肢4の選択率は9.70%と、10%に届かなかったという課題はあるが、本文の全体的な理解を問う問題としてねらい通り機能したと考えられる。

③事実と意見に整理する問題

第2問A問4
(解答番号9)

多肢選択
選択肢数 4

正答率 57.45%



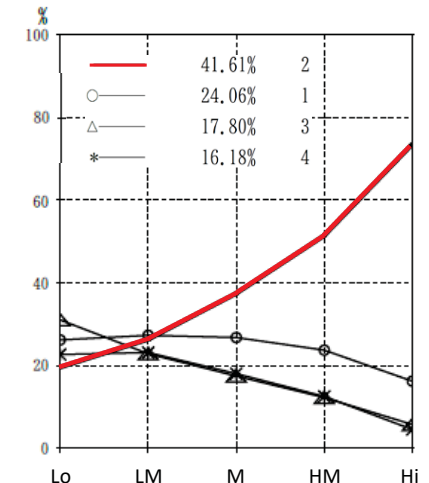
Lo群とHi群の正答率の差が約64ポイント。LM群以上を弁別している。本設問は「事実」を選択させる問題であったが、誤答で最も選択率が高かった選択肢4は「意見」であり、事実と意見を区別させる設問として機能したと考えられる。

④事実と意見に整理し、必要な意見を把握する問題

第2問B問2
(解答番号12)

多肢選択
選択肢数 4

正答率 41.61%



Lo群とHi群の正答率の差が約54ポイント。M群以上を弁別している。本設問は「意見」を選択させる問題であったが、誤答選択肢3 (17.80%)、選択肢4 (16.18%) は「事実」の錯乱肢である。選択肢1 (24.06%) の選択率が最も高かったのは、一般的に「ありそうな」意見であったため、多くの受検者が選択した可能性がある。

⑤誤答選択肢の選択率が高い問題

第6問B問3

(解答番号41,42)

多肢選択

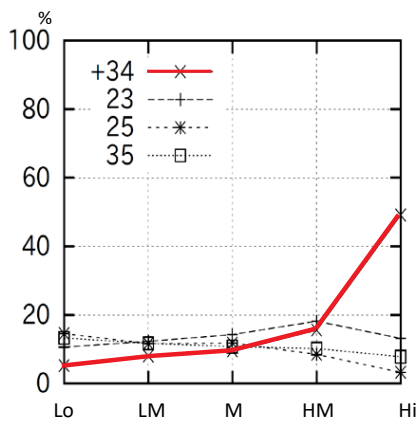
選択肢数 5

二つ選ぶ

完答

(順序は問わない)

正答率 17.46%



正答率は17.46%と低かったが、Hi群を弁別している。正答率が低かった理由は、正答選択肢3の選択率が52.66%と5割を超えている一方で、もう一つの正答選択肢4の選択率が36.50%と低かったためである。また、誤答選択肢2を選んだのは、本文第1段落に「オオカミはほとんど絶滅した」という表現があるため誤解した可能性がある。

3. 有識者コメントの概要

大学関係者4名、高校関係者4名

○各問いの問題のねらいや、主に問いたい資質・能力が反映されていたかどうか。

①評価すべき点

- ・学習指導要領の枠組みから外れることなく、且つ読解力の構成概念が活かされるように設問が設定されています。また、英文でのインプット情報を的確に処理、把握する力を測定するテストだと判断できます。
- ・問題のねらいは学習指導要領の内容に沿ったものであり、問いたい資質や能力を反映している妥当性の高いリーディングテストです。
- ・全体として、各問の問題のねらい、問いたい資質・能力がうまく反映されており、リーディングの力を測る問題としては非常によく工夫された良問から成っている。

②改善すべき点

- ・第3問のAでは、「イラストを参考にしながら概要を把握する力」を問うことがねらいとなっていますが、問2については、「文章には書かれていない詳細な情報（順位）について、イラストを見て理解する」という構造になっているため、「イラストを参考にしながら概要を把握する」というねらいとは少し違うように感じました。

○各科目の問題作成の方向性を踏まえ、題材の選定や問題の場面設定、出題形式等は適切だったかどうか

①評価すべき点

- ・問題作成の方向性としては、①「読解力」というものの構成概念を明確にする、②対象となる受験者の知的興味や一般生活での興味を考慮する、③未知語が推測できる程度の難易度の英文にする、ということを意識して作問されていると感じられ、日本の英語教育というローカルな環境でのテストとして好ましいと感じます。
- ・日常生活に関連した身近なテキストから、より社会的な話題やアカデミックなテキストなど、A1レベルからB1レベルをねらった様々なテキストが使われていて、問われるリーディングスキルも様々であるため、高校での英語学習において、生徒が読むテキストや行う言語活動を多様化させてほしいというメッセージとしても大変良いのではないかと思います。

- ・単純な知識・技能のみでは解答できない問題が多く、前後の文脈から判断の根拠を探し出したり、概要や要点を把握した上で推測させたりするなど、出題形式にバリエーションがある。
- ・実際のコミュニケーションを想定した明確な目的、場面、状況が多く、受験生が安心して取り組める。
- ・知的な興味関心をひくテキストも多く、読んでいる間に気づきや発見があり、純粋に読み物としても面白い題材を使用している。

②改善すべき点

- ・指示文が一切ないが、これでは受験者は何をすればよいのか戸惑う可能性がある。本文を読んで選択肢の中から解答を選びなさい等のあるべき指示文が必要である。
- ・今回は問題ないと思いますが、解答番号9, 10のような「事実」と「意見」を分けて考えさせる問題の出題には慎重であるべきだと考えます。この区別には主観が絡んでしまう恐れがあります。
- ・「説明、評論、物語、随筆などについて速読したり精読したりするなど目的に応じた読み方をする。」（コミュニケーション英語Ⅱ）とあるが、問題構成全体では意見文（評論、随筆など）や文学的な物語を読み取る力の出題が少なく、説明文の読み取りの出題に片寄っている。

○各科目の問題構成、設問数、内容、難易度等のバランスは適切だったかどうか。

①評価すべき点

- ・英文の難易度は指導要領の範囲内であり、全体の問題構成も良いと考えます。分量は平均的な高校生にとってはやや多いのかもしれませんが、弁別力を考えるとこの程度の量と設問数が必要だと思えます。
- ・内容についても、高校生の理解を超えるものはなく、興味をもって読めるものですし、解答に男女差等ができるようなバイアスのある英文も見受けられません。
- ・標準的な英文で、英文解釈的な精読もほとんど必要なく、高等学校の授業で多くの英語に触れ多様な言語活動を行ってきた生徒の得点が高いことが見込めるため、高等学校の授業改善への好影響が期待できる点。

②改善すべき点

- ・ネット上の情報読み取りが多すぎるように思われる。（現在の傾向としてやむを得ないかもしれないが。）
- ・日本の高校生の英語力を引き上げるという観点や、大学での研究活動等の基盤となる英語力を問うという観点から考えると、今回の難易度が適切だと思いますが、A1レベルの高校生が多い現状を考えると、A1レベルの問題の出題を工夫することも考えられるのではないのでしょうか。
- ・読むべき英文量がやや多く、かなり時間を要する問題構成となっていないか。
- ・一部イラストを含む問題があったがイラストの必然性はあったのか。

○発音、アクセント、語句整序などのいわゆる間接問題を出題せず、リーディングの問題としていることについて

- ・全てリーディングのテストとすることに賛成です。特に、発音、アクセントや語句整序の問題は出題する必要はないと思います。
- ・発音、アクセントなどの音声に関わる問題を筆記で試すことはできない。音声を認識することと、実際に発話できる、あるいは聞き取ることができるということとは、全くの別問題である。
- ・発音やアクセントを単独で出題することは、単なる知識の問題となり、「生きて働く」知識・技能が求められている状況にそぐわない出題となってしまうため避けた方がいいと思われる。
- ・言語知識を確認することを必ずしも筆記試験によって行う必要はない。リスニングの第1問では文法の知識を確認しているといえる。同様に発音の知識を試すリスニング問題もあってよいのではないかと思う。文法の能力が別個に測定されないのであれば、やはり何らかの形で問いに含めるべきであると考えます。
- ・大学入学共通テストのねらいが、「高校教育を通じて、大学教育の基礎力となる知識及び技能や思考力、判断力、表現力がどの程度身に付いたかを問う」ことにあるとき、従来の「発音、アクセント、語句整序などのいわゆる間接問題」を出題しないことは、受験生が高校教育を通じて「大学教育の基礎力となる知識」をどの程度身に付けたかを一部測らないことになるかと思う。

4. 共通テストの実施に向けた方向性

大学入試において、①「聞くこと」「読むこと」という情報を受信するための力のみならず、「話すこと」「書くこと」という情報を発信するための力を含めて問うてほしいという期待にどう応えるか、②語彙、文法及び語法の知識をどのように問うべきか、という課題は、これまでも議論が重ねられてきた。

センター試験においては、④「筆記」という限られた枠組みの中で可能な工夫として、発音、アクセント、語句整序の問題という形式で、「話すこと」「書くこと」にも間接的に目配りをした問題を出題してきた。このいわゆる間接問題は、「聞くこと」「読むこと」のみならず「話すこと」「書くこと」も意識した指導が必要であるという、高校の指導に対するメッセージとしても機能してきた。また、②語彙、文法及び語法の基礎知識があるかを問うことを目的として、「与えられた英文を完成するのにふさわしい語句を選ばせることにより、意図された意味になるような英文を構成する」という形式の問題を出題してきた。これらの問題は、小問の数を確保することにより、識別力を確保することにも貢献してきた。

一方で課題として、①発音、アクセント、語句整序をマーク式で問う形式の問題については、英語の発音やアクセントには規則性と不規則性があるにもかかわらず不規則性を問う問題に偏ることや、文脈の中での抑揚を問うのではなく単語単位での発音、アクセントの暗記に偏ること、現実に英語を使う場面では起こらない語句の並べ替えという作業を求めることなどについて、英語教育の観点から批判がなされてきた。

また、②語彙、文法及び語法の知識を問うため語句の穴埋めを行う形式の問題については、言語活動の目的や場面、状況などから切り離された学習で身に付けた知識で得点がとれても、必ずしも実際に英語を活用する能力が高いわけではないという点が指摘されてきた。中央教育審議会答申（平成28年12月21日）では、中学校、高等学校における英語教育の課題の一つとして、文法・語彙等の知識がどれだけ身に付いたかという点に重点がおかれた授業が行われていることを挙げている。学習指導要領においても、言語材料については、「意味のある文脈でのコミュニケーションの中で繰り返し触れることを通して指導すること」に留意すべきとし、文法事項の指導に当たっては、文法的な正確さだけを求めたり、コミュニケーションの文脈から切り離して、個々の文法事項をどれだけ理解しているかといった観点での評価となったりしないよう配慮を求めている。

こうした課題を踏まえ、試行調査問題では、「大学入学共通テスト実施方針」に基づき、より思考力・判断力を重視した作問となるよう見直しを図った。第1回試行調査における高校教員対象のアンケートや外部有識者のコメントを考慮し、第2回試行調査についても、①英語の資格・検定試験の活用を含め、四技能を評価する別の枠組みが設けられる方針であることを踏まえ、発音、アクセント、語句整序の問題は出題せず、「読むこと」の力を把握することを目的とした問題構成とし、②語彙、文法及び語法事項については、CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）で整理されている能力を発揮する中でその知識を活用できるかを評価する問題となるよう出題し、検証を行ったところである。

出題に当たっては、特に小問の数が多く識別力の確保に貢献してきた第2問Aの問題群も含めた見直しに伴い、識別力を問全体で確保する必要性が高まった。試行調査では、小問ごとに問う能力のレベルを設定し、最新のCEFR関連研究成果により可能となった、レベル別による使用テキストの言語材料分析を活用し、出題のねらいに沿った作問を行ったところである。

こうした工夫を通じて、作問者の経験と知識に加えてエビデンスを取り入れたより緻密な出題に転換した結果、テスト全体として、センター試験と比べても遜色のない識別力※¹を保持し、信頼性（アルファ係数）※²が高く、広範囲の学力層を精度よく測定できた。この結果を踏まえ、共通テストでは試行調査の問題構成を反映し、「リーディング」として実施することとする。

※1 平成30年度センター試験本試験 英語（筆記）における、第1問A～第6問Bまでの「各中問と大問との相関」の幅は0.40～0.79であるのに対し、平成30年度試行調査問題における第1問A～第6問Bまでの同相関の幅は0.55～0.80であった。（点双列相関係数[当該項目の正誤情報を含む]）

※2 テスト等の信頼性を表す指標。0.7以上であれば、信頼性が高いと判断されることが多い。また、項目間の関連性が強く、項目数が多いと値が大きくなる傾向にある。

難易度については、CEFRのレベルが上がるごとに正答率が下がっており、概ね適切なレベル設定を行うことができたと考えられる。

無解答率は、後半の設問でやや増加の傾向を示した。特に、最後の問題（解答番号43）の無解答率は15.61%と、最大になった。（第1回試行調査は5.65%が最大。）これは、第5問に「当てはまる選択肢を全て選択する問題」が複数あるなど、受検者がテスト後半で解答に時間がかかったことが原因の一つと考えられる。

共通テストの実施に向け、今回の試行調査は11月に実施していることや、高校3年生の受検者が約82%であることなどにより、実際の大学入試に向けて学力が伸びる可能性があることを考慮する必要があるが、試行調査を目安としつつ、得点率や得点分布のバランスに配慮した各設問の難易度と、試験時間に応じた問題分量になるよう検討を行うことが重要である。また、認知的負荷が高すぎる問題とならないよう工夫していく。

【英語（リスニング）】

1. 得点分布等に基づく分析

《受検者数等》

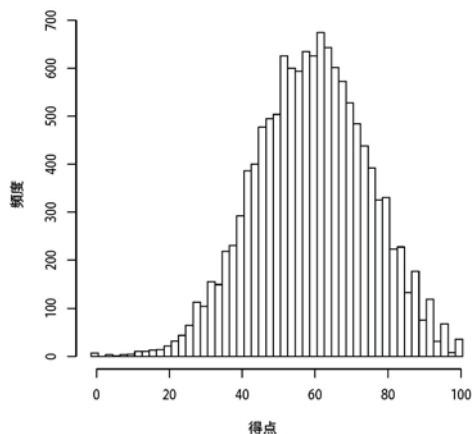
全受検者数 12,927人
 高校3年生 10,623人 (82.2%)
 高校2年生 2,304人 (17.8%)

《問題構成や設問数》

大問数 6題
 設問数 マーク式 30問

《得点の分布図等》

英語（リスニング）（100点満点）



平均得点率	59.10% (58.82%)
平均点	59.10点 (58.82点)
標準偏差	15.57
最高点	100点
最低点	0点

※ 平均得点率及び平均点の括弧内は高校3年生のみを対象。

《設問正答率幹葉図》

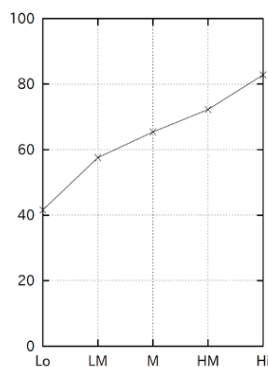
平均正答率区間	(設問数)	設問番号
95%≤	(2)	13, (16-19)
90%~95%	(2)	7, 9
85%~90%	(1)	10
80%~85%	(3)	2, 3, 8
75%~80%	(1)	12
70%~75%	(0)	
65%~70%	(2)	4, 24
60%~65%	(3)	1, 14, 35
55%~60%	(2)	6, 11
50%~55%	(1)	20
45%~50%	(5)	22, 23, 25, 34, 37
40%~45%	(2)	15, 21
35%~40%	(2)	(26-28), 33
30%~35%	(1)	32
25%~30%	(1)	36
20%~25%	(1)	(29-31)
15%~20%	(1)	5
10%~15%	(0)	
5%~10%	(0)	
<5%	(0)	

※ 設問番号は、解答番号を示す。

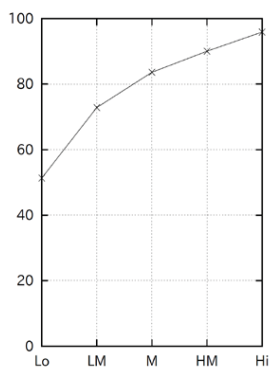
平均正答率 59.09%

《大問の五分位図》

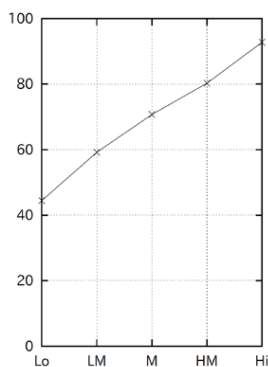
第1問（2回読み）
 配点 24 点、平均 63.89%



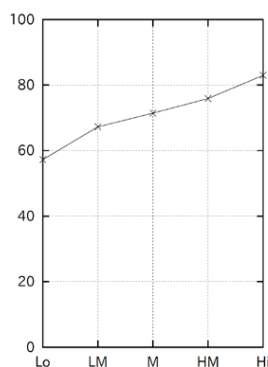
第2問（2回読み）
 配点 12 点、平均 78.72%



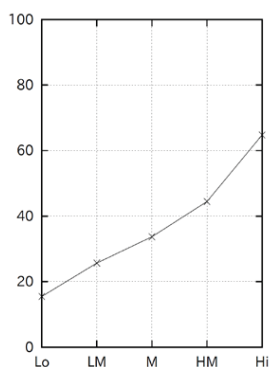
第3問（2回読み）
 配点 16 点、平均 69.39%



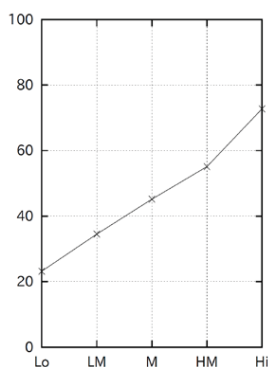
第4問（1回読み）
 配点 12 点、平均 70.93%



第5問（1回読み）
 配点 20 点、平均 36.72%



第6問（1回読み）
 配点 16 点、平均 46.03%



- CEFRLレベル別の正答率は次のとおり。

CEFRレベル	A1程度	A2程度	B1程度
正答率	77.34%	63.98%	44.90%

- 「選択肢が2回以上使用可能な問題」における正答率と当該科目等の正答数による五分位図のLo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下であった問題は次のとおり。

科目等名	問題番号	正答率	Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下
リスニング	第4問A問2（解答番号20）	52.69%	○
	第4問A問2（解答番号21）	44.24%	該当なし
	第4問A問2（解答番号22）	45.61%	該当なし
	第4問A問2（解答番号23）	48.51%	該当なし
	第5問問1(b)（解答番号26-28）	39.00%	該当なし
	第5問問1(b)（解答番号29-31）	24.26%	該当なし

- 平均得点率（平均正答率）は5割程度に達した。受検者数や目標平均得点率が異なるため、センター試験と一概に比較はできないものの、センター試験の過去3年間の標準偏差、18.28～20.34（100点満点換算時）と比較すると、得点のばらつきは小さい。また、設問正答率幹葉図からは、様々な難易度の問題が含まれていることが分かることから、多様な学力層を識別しているものと考えられる。なお、無解答率は全体的に低かった。
- 大問の五分位図からは、多様な学力層を識別できることが伺える。
 全ての大問で、Lo群とHi群の得点率の差が20ポイントを超えている。
 また、全ての大問で、Hi群の得点率が5割を超えているが、第1問～第4問は、Hi群の得点率は8割を超えている。
 第4問はA2程度とB1程度の問題が混在し、第5問及び第6問はいずれもB1程度の問題となっている。第4問A問1（A2程度）の正答率が95.16%と高くなったため、第4問全体の得点率も高くなったと考えられる。
- 2年生の平均点が3年生を1.59点上回る結果となったが、今回、学校規模別の受検者数の調整を学年別には行わなかったことの影響があったものと考えられる。

2. 小問ごとの分析

- 各小問と、当該小問を除いた全問題との間のピアソンの積率相関係数を算出し、さらに、五分位図により分析を行った。また、新たな出題形式等についても分析を行った。

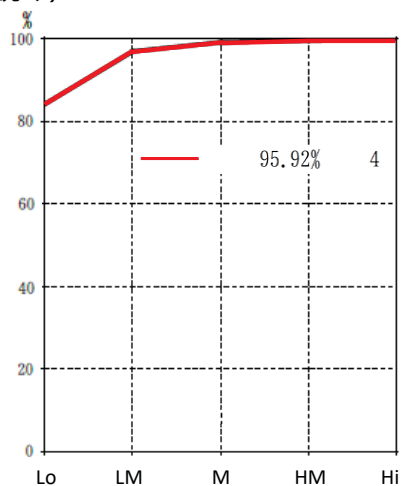
- (1) 五分位図におけるLo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の問題
3問あり、その全ての問題について、五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。
- (2) 新しい出題形式等
 - ① 当てはまる選択肢を全て選択する問題
1問出題。五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。
 - ② 当てはまる選択肢を2回以上使用可能とする問題
3問出題。五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。
- (3) その他
 - ① 正答率が低かった問題
 - ② 基本的な文法事項を含む英語を把握する問題

(1) 五分位図におけるLo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の問題

第3問問2（2回読み）
(解答番号13)

多肢選択
選択肢数 4

正答率 95.92%

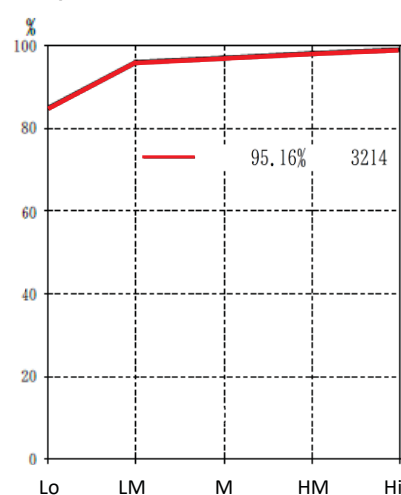


Lo群とHi群の正答率の差が15.81ポイント。選択肢のうち、「運動する」に関する選択肢は4のみであったため、他の三つの選択肢が錯乱肢として機能しなかった。結果として、正答率が高く、難易度、識別力とも低い問題となった。問題の曖昧さを排除しようと努めた結果、問題を易化させることとなった。

第4問A問1（1回読み）
(解答番号16-19)

多肢選択
選択肢数 4
(ストーリーの
順番を問う問題
完答
(正答一つ))

正答率 95.16%



Lo群とHi群の正答率の差が14.17ポイント。受検者にとって、ストーリーが想定される展開であったため、正答率が高く、難易度、識別力とも低い問題となった。

(2) 新しい出題形式等

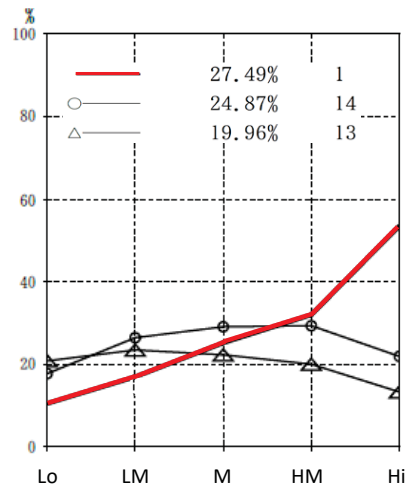
①当てはまる選択肢を全て選択する問題

第6問B問1（1回読み）

（解答番号36）

多肢選択
選択肢数 4
全て選ぶ
完答
（正答一つ）

正答率 27.49%



Lo群とHi群の正答率の差が約43ポイント。Hi群の識別に寄与している可能性がある。正答の選択肢1に加え、選択肢4が選ばれた理由は、選択肢4のProfessor Johnsonが最後の発言で、ゲームによる健康への影響について言及しているため、受検者がその部分の印象に引きずられた可能性がある。

なお、当てはまる選択肢を全て選択する問題については、マークの読み取り方など、実施上の課題も併せて検討する必要がある。

②選択肢を2回以上使用可能とする問題

※解答番号20は「Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の問題」にも該当

第4問A問2（1回読み） 解答番号20 52.69%
（解答番号20-23）

多肢選択
選択肢数 5
（複数回使用可）

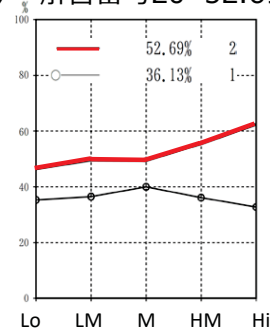
正答率

解答番号20 52.69%

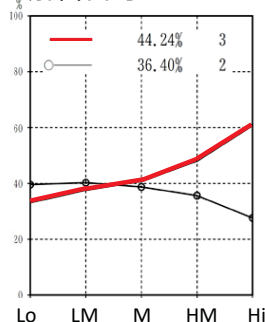
解答番号21 44.24%

解答番号22 45.61%

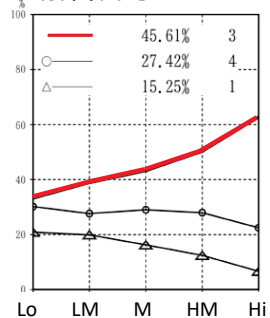
解答番号23 48.51%



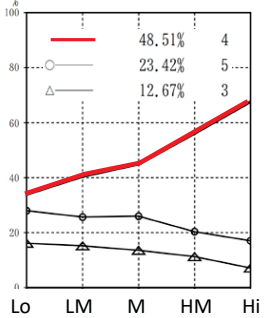
解答番号21 44.24%



解答番号22 45.61%



解答番号23 48.51%



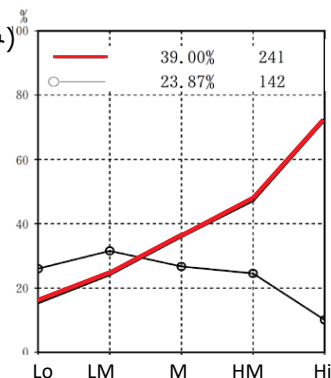
Lo群とHi群の正答率の差は、解答番号20のみ、20ポイントを下回り、識別力が低かった（約16ポイント）。また、解答番号20のみ、全問題との項目相関が低かった。項目相関が低い点については、本問は、英語力に加え、思考力・判断力をより求めようとする問いであることが起因している可能性がある。

②選択肢を2回以上使用可能とする問題

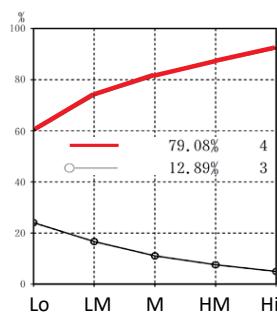
第5問問1(b) (1回読み)
(解答番号26-28)

多肢選択
選択肢数4
(複数回使用可)

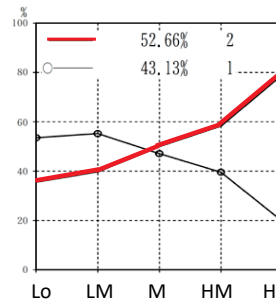
正答率 39.00%
解答番号26 52.66%
解答番号27 79.08%
解答番号28 56.81%



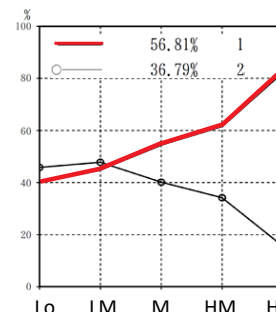
参考：問1(b)27の五分位図



参考：問1(b)26の五分位図



参考：問1(b)28の五分位図



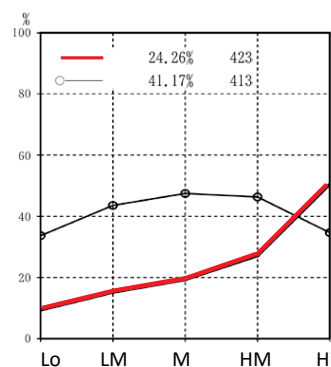
各解答番号によって難易度に差があるとともに、それぞれ異なる能力層を識別しており、バランスの良い設問の組み合わせとなった。解答番号26で選択肢1が、解答番号28で選択肢2が特定の能力層で錯乱肢として機能している。

②選択肢を2回以上使用可能とする問題

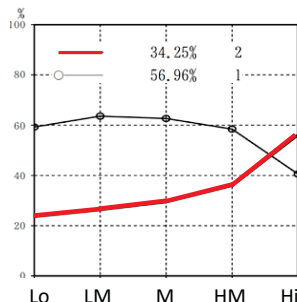
第5問問1(b)
(1回読み)
(解答番号29-31)

多肢選択
選択肢数4
(複数回使用可)

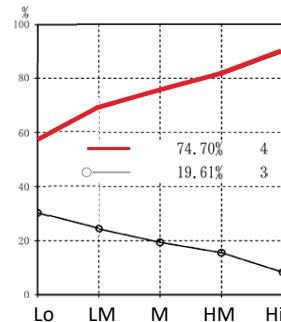
正答率 24.26%
解答番号29 74.70%
解答番号30 34.25%
解答番号31 78.32%



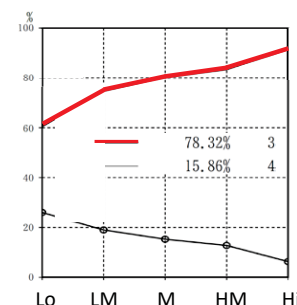
参考：問1(b)30の五分位図



参考：問1(b)29の五分位図



参考：問1(b)31の五分位図



Hi群でも正答率が50.56%と、難易度が高くなった。特に、AIが労働に及ぼす影響を問う解答番号30は選択肢1が錯乱肢として機能し、解答番号29及び31と比べると難易度が高くなったが、Hi群の識別に貢献している。

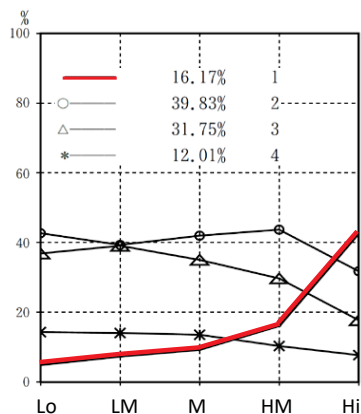
(3) その他

①正答率が低かった問題

第1問B問1（2回読み） （解答番号5）

多肢選択
選択肢数4
（英文の内容に最も
近い絵を選ぶ問題）

正答率 16.17%



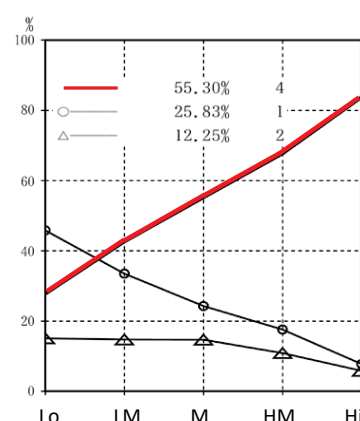
Lo群とHi群の正答率の差が37.75ポイント。Hi群でも正答率が42.82%と高くなかった。原因としては、(1)1つの文に多くの情報（got a phone call, from Joe, as soon as, he arrived home, from the library）が詰め込まれた、(2)イベントが先に、状況・時間枠が後から読まれたため、難易度が上がった、(3)arrive homeがget homeに比べるとより馴染みのない表現であった、という可能性が考えられる。また、内容が理解できず、スクリプトの最後に“the library”が聞こえたことから、図書館が大きく描かれたイラストを選んだ受験者が多かった（選択肢2の選択率39.83%、選択肢3の選択率31.75%）可能性もある。

②基本的な文法事項を含む英語を把握する問題

第1問B問2（2回読み） （解答番号6）

多肢選択
選択肢数4
（英文の内容に最も
近い絵を選ぶ問題）

正答率 55.30%



Lo群とHi群の正答率の差が56.02ポイント。A1程度レベルの問題であるが、予想より正答率が伸びなかった。基本的な文法項目too～to…を含む英語を把握する問題であるが、「否定語句を用いない否定表現」を含む英語の理解に苦戦した可能性がある。too～to…の意味を知識として持っていたとしても、実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できなければ解答できない。高等学校での指導において留意したい事項である。

3. 有識者コメントの概要

大学関係者4名、高校関係者4名

○出題のねらいに照らした作問について

①評価すべき点

- ・問題のねらいは学習指導要領の内容に沿ったものであり、総じて問いたい資質や能力を反映している妥当性の高いリスニングテストだと思います。
- ・問題のねらいや主に問いたい資質・能力は反映されている。特に、話されている状況の把握、話者の意図や要点を把握する力を問う問題が多い点。
- ・ジャンル（説明文、物語文、意見文）と、テキストタイプ（長短のモノローグ、会話、講義、講義後のQ&Aなど）が広くカバーされている。

②改善すべき点

- ・英語力以外の部分で難度が増している問題があったように思います。例えば、第1問のBは、イラストが分かりにくかったのではないかと思います。ある場面ではなく、出来事の順番を一つの絵で表現するのは難しいかもしれません。
- ・第4問Aは、聞かなくても絵の内容で判断して解答できるように思います。リスニングテストに絵を使用することには賛成ですが、絵だけで解答できるような問題は避けるべきでしょう。

○題材の選定や問題の場面設定、出題形式等について

①評価すべき点

- ・会話やミニ・レクチャー的なものまで様々な場面、内容をもとに、部分的な理解だけでなく、全体からの推測を促す問題も含まれており、望ましいテストだと感じました。
- ・リーディングに比べて題材の設定や問題の場面設定は、EFL環境（外国語として英語を学ぶ環境）においては出題が難しいとは思いますが、総じて日常の場面や学習場面を反映させていると思います。
- ・特定情報、要点、概要、複数の情報の統合など、目的に応じた聞き取りの力を測っている。

②改善すべき点

- ・第4問の設問A-2や設問B-2は、かなり正答率が低い項目だと予想しておりましたが、私の予想よりは正答率が高かったようです。しかし、聴かせる英文にもう少し冗長性を与えることで、情報の確認ができるようにし、1度しか読み上げられない問題でも、多少なりとも正解を導きやすく工夫してもいいかと感じました。
- ・指示文が日本語であるのはいいのですが、説明が多いように感じます。
- ・内容をまとめた表を使ってリスニングの問題を出す場合、その表の理解に時間がかかってしまい本来のリスニング力が測れないことになってしまわないか。補助的な表はできるだけシンプルな形態の方がいいのではないか。

○問題構成、設問数、内容、難易度等のバランスについて

①評価すべき点

- ・様々なレベルの問いが含まれており、また英文もA1からB1までの内容がカバーされている。
- ・英文の読み上げられる速度が適切である。
- ・認知的な負荷も、前回の試行テストに比べて負荷のかかりすぎる問題がなく、適切な難易度であると思いました。

②改善すべき点

- ・読み上げのスピードに関していえば、ほとんど標準的なものばかりなので、現実の場面を反映した面（やや速いアナウンスメントや言いよどみ、早口の人々の発話）もあった方がいいかもしれない。

○難易度等に応じて1回読みと2回読みを混在させていることについて

- ・1回読みと2回読みの混在は、現実世界での「聞く」場面が反映されているという点と、難易度調整という点から適切であると思われる。
- ・私は、理想的にはすべて1回読みにすべきだと思っています。そのほうが現実のコミュニケーションを反映しているからです。
- ・難易度によって、1回読みと2回読みが混在することは、事前に周知し、大問ごとの説明でも明確にしているのが良いと思います。

- ・A1レベルでは、必要な情報を聴き取るために、2回読みが必須であると思う。1回目に全体を把握して、2回目に必要な情報に焦点を絞るとか、2回目を確認するとか…。B1レベルでは自然なやりとりが求められ、不自然な聞き返しは前提としないので、1回読みとなっていることも自然である。
- ・確かに実生活では音声一度しか聞けないことが大部分だが、経験未熟な十代の若者が受験するハイスレイクな試験では、予期せぬ事故を回避し受験生の実力発揮を保障する意味でも、全て2回読みが望ましいと思う。

○アメリカ英語以外の読み上げ（イギリス人や英語を母語としない人による読み上げ）について

- ・アメリカ英語以外の読み上げを使用したことは高く評価しています。実際に英語ネイティブよりも第2言語として英語を使用する人口の方が圧倒的に多く、世界では第2言語として英語を使う非英語ネイティブの方とコミュニケーションをとる機会のほうが多いからです。
- ・アメリカ英語以外での読み上げの導入については賛成ですが、現段階では、英語を母語としない人による読み上げについては、止めた方がよいのではないかと考えています。
- ・基本的に、学習環境の前提を担保する（日本では英米、特にアメリカの標準的な発音による指導を行っている）という意味から、英語を母語とする話者の発音を主とすべきであるが、一部にアジアや日本の発音を混在させることに異議はない。
- ・国際化が進行し、日本人学習者も小学校から様々な国籍のALTの英語に触れるようになった。また、移行教材のWe Can! 1, 2（文部科学省）の動画でロシア、エジプト、中国など世界各地の小学生が英語を話している動画を授業で聞く時代になっており、アメリカ英語以外の読み上げによる出題に賛成である。

4. 共通テストの実施に向けた方向性

2006年度に開始されたリスニングテストについては、実施面を考慮した開始当初の議論を踏まえ、スクリプトを2回読み上げる形式で実施されてきている。これに対しては、現実に英語を使う場面に照らした適切な読み上げ回数の方が検討されてきたところであり、全く同じスクリプトを2回読むことが適切か、一つのスクリプトの中で重要な情報に関しては形を変えて、複数回言及するなど、余剰性のある英語を1回だけ読むことが適切かといった議論がなされてきた。

今回の試行調査では、第1回試行調査における生徒対象のアンケート、高校教員対象のアンケート及び外部有識者のコメント、更には、信頼性（アルファ係数）に関しては、全て2回読みの問題よりもより設問数が多くなる1回読みと2回読みが混在する問題の方が好ましい結果となったことも参考に（全て2回読みの問題：0.62、1回読みと2回読みが混在する問題：0.71）、第2回試行調査については、1回読みと2回読みが混在する問題として実施し、検証を行った。

B1レベル程度の問題が配置された第4問、第5問、第6問を1回読みとしたところ、項目得点と総点とのピアソン相関やLo群とHi群の得点率の差から判断すると、一定の識別力を確保することができた。また、テスト全体としては、様々な難易度の問題から成り、多様な学力層を識別する結果となった。今回の結果を踏まえ、将来的にはすべて1回読みにするのが望ましいという意見もあるところであるが、引き続き検討することとし、2020年度からは試行調査と同様、1回読みと2回読みが混在する問題として実施することとする。

難易度については、CEFRのレベルが上がるごとに正答率が下がっており、概ね適切なレベル設定を行うことができたと考えられる。

第1回試行調査問題の正答率と比較すると、正答率が5割を上回る設問数の割合は、プラス16.7ポイント（第1回：40.0%→第2回：56.7% ※第1回はバージョンBの割合）となっている。リスニングで正答率が5割を上回る設問数の割合が大幅に高まったのは、第1回試行調査問題で課題となった指示文や問題番号読み上げ後の適切なポーズ（無音時間）や解答時間等の設定に加え、音量が改善されたこと、また、CEFRのA1～A2レベル程度の第2問・第3問は、それぞれ30語、40語程度、読み上げ語数を減らしたこと等が理由と考えられる。

共通テストの実施に向け、今回の試行調査は11月に実施していることや、高校3年生の受検者が約82%であることなどにより、実際の大学入試に向けて学力が伸びる可能性があることを考慮する必要はあるが、試行調査を目安としつつ、得点率や得点分布のバランスに配慮した各設問の難易度と、試験時間に応じた問題分量になるよう検討を行うことが重要である。また、認知的負荷が高すぎる問題とならないよう工夫していく。